

## 第3章 観光開発基本戦略の策定課題

### 3.1 将来動向

#### 3.1.1 将来の社会経済状況

本調査で策定するマスタープランの目標年次（2010年、2015年、2020年）における主な社会経済指標について整理する。

##### （1）人口

国際連合経済社会情報・政策分析局人口部の世界人口予測では、中国全体の将来人口予測と年平均増加率、都市人口などが表 3.1.1 のように予測されている。

表 3.1.1 中国の将来人口予測と年平均増加率（中間シナリオ）

年	総人口 (千人)	年平均 人口増加率	都市人口 (千人)	農村人口 (千人)	都市人口 の割合	農村人口 の割合
2000	1,273,979	-	455,804	818,175	35.8%	64.2%
2005	1,315,844	0.65%	533,377	782,466	40.5%	59.5%
2010	1,354,533	0.58%	611,558	742,975	45.1%	54.9%
2015	1,392,980	0.56%	689,734	703,246	49.5%	50.5%
2020	1,423,939	0.44%	762,633	661,306	53.6%	46.4%

出所 国際連合経済社会情報・政策分析局人口部：世界人口予測（2004）  
都市化予測（2003） <http://esa.un.org/unpp>

青海省の最新の人口統計（2004年）によると、青海省の総人口は538.6万人、西寧市<sup>21</sup>の人口は183.0万人となっている。青海省の人口は、2000年から2004年の間に年平均1.05%の割合で増加しており、この数字は国際連合が推定する中国全体の年平均人口増加率（0.65%）の1.62倍である。国際連合予測の2010年、2015年、2020年までの中国全体の年平均人口増加率に対し、1.62倍を乗じたものが同期間の青海省における人口増加率とみなすと、2006年から2010年までの青海省の年平均人口増加率は0.94%、2011年から2015年は0.91%、2016年から2020年は0.71%となる。これらの増加率に基づいて推定される青海省の将来人口は表 3.1.2 のようになる。

<sup>21</sup> 1つの区（西寧市区）と3つの県（大通回族土族自治州、湟源县、湟中県）から構成される。

表 3.1.2 青海省の将来人口予測

年	青海省の人口(人)	人口増加率(青海省)	人口増加率(中国全体)
2000	5,165,000	-	0.65%
2001	5,231,000	1.28%	0.65%
2002	5,286,000	1.05%	0.65%
2003	5,338,000	0.98%	0.65%
2004	5,386,000	0.90%	0.65%
2005	5,442,717	1.05%	0.65%
2010	5,703,279	0.94%	0.58%
2015	5,966,729	0.91%	0.56%
2020	6,182,446	0.71%	0.44%

出所 青海省統計局：青海統計年鑑 2004（2000年から2003年の青海省人口データ）

青海省統計局：青海統計年鑑 2005（2004年の青海省人口データ）

国際連合経済社会情報・政策分析局人口部：世界人口予測（2004）

都市化予測（2003）（中国全体の人口増加率）

### （2）都市人口と農村人口

国際連合のデータによる中国全体の都市人口の割合は、表 3.1.1 に示したように 2000 年で 35.8% である。同年の青海省の都市人口比率は 34.8% であり、割合にして中国全体の値よりも約 2.8% 低い数字となっている。この割合を国際連合推測の各年の都市人口比率に掛け合わせたものを青海省の同年の都市人口比率とみなし、さらにその都市人口比率と将来予測人口から都市人口と農村人口を算出すると表 3.1.3 のようになる。

表 3.1.3 青海省の都市人口と農村人口の将来予測

年	青海省					中国全体	
	総人口 (人)	都市人口 (人)	農村人口 (人)	都市人口 の割合	農村人口 の割合	都市人口 の割合	農村人口 の割合
2000	5,165,000	1,795,400	3,369,600	34.8%	65.2%	35.8%	64.2%
2001	5,231,000	1,900,000	3,331,000	36.3%	63.7%	-	-
2002	5,286,000	1,991,600	3,294,400	37.7%	62.3%	-	-
2003	5,338,000	2,038,000	3,300,000	38.2%	61.8%	-	-
2004	5,386,000	2,075,100	3,310,900	38.5%	61.5%	-	-
2005	5,442,717	2,138,407	3,304,310	39.3%	60.7%	40.5	59.5
2010	5,703,279	2,495,288	3,207,990	43.8%	56.2%	45.1	54.9
2015	5,966,729	2,865,241	3,101,488	48.0%	52.0%	49.5	50.5
2020	6,182,446	3,214,732	2,967,714	52.0%	48.0%	53.6	46.4

出所 青海省統計局：青海統計年鑑 2004（2000年から2003年の青海省人口データ）

青海省統計局：青海統計年鑑 2005（2004年の青海省人口データ）

国際連合経済社会情報・政策分析局人口部：世界人口予測（2004）

都市化予測（2003）（中国全体の人口増加率）

### （3）国内総生産（GDP）

中国国家统计局は、2006年から2010年の中国全体のGDP成長率を年約8.0%、2010年から2020年は年約7.0%と予測している。一方、青海省の2000年から2004年におけるGDPの年平均増加率は15.3%であり、これは中国全体の数字のおよそ2倍である。2020年までの青海省のGDPと一人当たりGDPの予測値を表3.1.4に示す。

表 3.1.4 青海省の将来 GDP 予測

年	GDP (億元)	一人当たり GDP (元)	年平均 GDP 成長率 (青海省)	年平均 GDP 成長率 (中国全体)
2000	263.59	5,103	-	-
2001	300.95	5,753	14.2%	-
2002	341.11	6,453	13.3%	-
2003	390.21	7,310	14.4%	-
2004	465.73	8,630	19.4%	-
2005	537.06	9,844	15.3%	-
2010	967.80	16,895	12.5%	8.00%
2015	1,558.66	25,960	10.0%	7.00%
2020	2,510.23	40,289	10.0%	7.00%

出所 青海省統計局：青海統計年鑑 2004（2000年から2003年のGDPデータ）  
 青海省旅遊ガイドブック（2004年のGDPデータ）  
 CNN International Website：World Business，“China Growth to Exceed Forecasts”，  
 2005年3月21日 <http://edition.cnn.com/2005/BUSINESS/03/20/>（中国のGDPデータ）

### 3.1.2 観光需要予測

ここでは、青海省へのインバウンド旅行者数の将来予測について示す。なお、本節の内容（将来予測モデルを適用する上での仮定や分析結果、予測結果など）については、「付録4 観光需要予測」にてより詳細に記載する。

#### (1) 青海省へのインバウンド旅行者数

青海省旅遊業發展与布局總体計画<sup>22</sup>（2000）では、青海省への将来のインバウンド旅行者数が表 3.1.5 のように予測されている。また、青海省旅遊局（観光局）は、青海省への国内旅行者を次の3つに分類している。

- 青海省居民（青海省内居住者）による宿泊旅行者
- 青海省居民による日帰り旅行者<sup>23</sup>
- 省外からの旅行者

表 3.1.5 青海省へのインバウンド旅行者数の予測

（単位：万人）

	2005	2010	2020
国内旅行者数	500	1,000	2,000
外国人旅行者数、及び 香港・マカオ・台湾 からの旅行者数	10	25	60

出所 青海省旅遊業發展与布局總体計画（2000）

表 3.1.6 は、近年の青海省への国内旅行者数の推移を示したものである。青海省居民による旅行トリップは「省内旅行者」、省外からの旅行者は「省外旅行者」と表している。

<sup>22</sup> 青海省観光開発總体計画

<sup>23</sup> 例えば、甘肅省の人々が青海省を日帰りで観光する事も可能だが、日帰り旅行者の大部分は青海省内に居住する人々であり、本調査では日帰り旅行者は全て青海省居民として扱う。

表 3.1.6 青海省へのインバウンド国内旅行者数

(上段：旅行者数(人) 下段：対前年増加率(%))

年	省内旅行者			省外旅行者	合計
	宿泊旅行者	日帰り旅行者	合計		
2001	764,000	2,460,000	3,224,000	474,000	3,698,000
	-	-	-	-	-
2002	870,000	2,780,000	3,650,000	530,000	4,180,000
	13.9	13.0	13.2	11.8	13.0
2003	816,000	2,622,000	3,438,000	505,000	3,943,000
	-6.2	-5.7	-5.8	-4.7	-5.7
2004	1,136,300	3,260,200	4,396,500	695,500	5,092,000
	39.3	24.3	27.9	37.7	29.1
2001年 - 2004年の 年平均増加率(%)	14.1	9.8	10.9	13.6	11.3

\* 日帰り旅行者は全て青海省居民とみなしている。

出所 青海省旅遊局計画財務室：青海省旅遊統計便覧

**(2) 旅行者数の将来予測モデル**

表 3.1.5 にて示した青海省旅遊業發展与布局總体計画(2000)による予測は非線形回帰モデルから導出されたものであり、1995年から1999年のインバウンド旅行者数に基づいている。青海省への旅行者は国内旅行者が圧倒的に多く、中でも青海省居民による省内旅行者国内旅行者全体の約8割を占めている。本調査では、省内旅行者と省外旅行者を区別し、可能な限り現実に即した将来予測をするため、省内旅行者のトリップ生成が省外旅行者と分離できるという仮定の下、より詳細なモデル分析を行った。

**(3) 省内旅行者数の将来予測****将来予測モデル(省内旅行者)**

省内旅行者数の将来予測をするに当たって、主な要因として下記の2つを考える。

- 青海省の都市人口(青海省では、一般的に都市居住者は地方居住者よりも経済的に豊かであり、旅行する機会も多い)
- 一人当たりGDP(一人当たりGDPは人々の豊かさを表す一つの指標であり、豊かさは観光や業務を目的としたトリップを発生させる要因である<sup>24)</sup>)

本調査では、この2つの要因に基づいて多変量線形回帰モデルを定式化した<sup>25)</sup>。省内旅行者に関して入手できるデータの限界もあって相関関係が低い結果となったが、モデル自体の一般的な論理や仮定は妥当であると考えられる。回帰モデル、及び2001年から2004年の省内旅行者数に係る回帰分析、分散分析等の結果を図3.1.1に示す。

<sup>24)</sup> 都市居住者の一人当たりGDPを用いた方がより適切であると考えられるが、入手できる統計データに限界がある。

<sup>25)</sup> 人口と一人当たりGDPがゼロの場合にはトリップは発生しないため、切片をゼロと仮定。

回帰統計				
重相関 R	0.99806787	y	=	$ax_1 + bx_2 + c$
重決定 R <sup>2</sup>	0.99613948	y	=	省内旅行者数
補正 R <sup>2</sup>	-0.007721	a	=	x <sub>1</sub> 係数
標準誤差	414346.979	x <sub>1</sub>	=	青海省の都市人口（百万人）
観測数	3	b	=	x <sub>2</sub> 係数
		x <sub>2</sub>	=	青海省一人当たりGDP（元/人）
		c	=	切片 = 0（人口/一人当たりGDP = 0）
		y	=	$0.56x_1 + 360.54x_2 + c$

## 分散分析表

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F
回帰	2	4.43E+13	221499	129.01617	#NUM!
残差	1	17168	171683		
合計	3	44472			

	係数	標準誤差	t 値	P-値	下限95%	上限95%	下限95.0%	上限95.0%
c	0	-	-	-	-	-	-	-
a	0.56	1.13	0.49	0.71	-13.85	14.97	-13.85	14.97
b	360.54	306.73	1.18	0.45	-3536.85	4257.93	-3536.85	4257.93

出所 JICA 調査団

図 3.1.1 将来予測モデル（省内旅行者）

## 将来予測結果（省内旅行者）

省内旅行者数の将来予測結果を表 3.1.7 にまとめる。

ここでは、2010 年以降の一人当たりの旅行回数は年 1.25 回を上限としている。モデルによる予測結果では、2010 年は年 1.32 回、2020 年は年 2.66 回と大きな値となった。しかし、日本における 2004 年の一人当たりの国内旅行回数は年 1.47 回<sup>26</sup>であり、現在の青海省と日本の状況を比較した場合、青海省で 1.47 を超える旅行回数を想定する事は非現実的である。そのため、本調査における省内旅行者数の将来予測においては、青海省居民の平均旅行回数の上限を年 1.25 回とした。

表 3.1.7 省内旅行者数の将来予測

年	旅行者数（人）		
	宿泊	日帰り	合計
2001	764,000	2,460,000	3,224,000
2002	870,000	2,780,000	3,650,000
2003	816,000	2,622,000	3,438,000
2004	1,136,300	3,260,200	4,396,500
2005	1,441,864	3,307,495	4,749,359
2010	2,365,754	4,763,345	7,129,099
2015	2,585,474	4,872,937	7,458,411
2020	2,824,704	4,903,354	7,728,058

宿泊旅行者数の割合の増加は 2001 年から 2004 年の年平均増加率と同じとし、一人当たり GDP の増加がトリップ発生に反映される考え、各年の一人当たり GDP の増加率を乗じて算出した。

出所 JICA 調査団

<sup>26</sup> 国土交通省編：観光白書（2005）

**(4) 省外旅行者数の将来予測****将来予測モデル(省外旅行者)**

省外旅行者数の将来予測では、下記に挙げる 3 つの仮定の下、省市自治区の人口、一人当たりGDP、青海省との距離をトリップ発生の主要因として想定する<sup>27</sup>。

- 省市自治区の人口(人口が多い地域からの方がより多くの旅行者が青海省を訪れる)
- 省市自治区の一人当たり GDP (経済的に豊かな地域からの方がより多くの旅行者が青海省を訪れる)
- 青海省との距離(青海省に近い地域ほどより多くの旅行者が青海省を訪れる)

省外旅行者数の将来予測をするために用いた回帰モデルを図 3.1.2 に示す<sup>28</sup>。

回帰統計	y	=	$ax_1 + bx_2 + cx_3 + f$
重相関 R	0.84	y	= 青海省への省外旅行者数
重決定 R <sup>2</sup>	0.71	a	= x <sub>1</sub> 係数
補正 R <sup>2</sup>	0.65	x <sub>1</sub>	= 当該省の一人当たりGDP (元/人)
標準誤差	23590.65	b	= x <sub>2</sub> 係数
観測数	29	x <sub>2</sub>	= 省人口(百万人)
		c	= x <sub>3</sub> 係数
		x <sub>3</sub>	= 青海省との距離によるダミー変数(甘肅省、寧夏自治区、新疆ウイグル自治区、陝西省、四川省 = 1、その他 = 0)
		f	= y切片(GDPまたは人口 = 0)
		y	= $1.40x_1 + 189.42x_2 + 9,592.51x_3$

## 分散分析表

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F
回帰	3	3.559E+10	11864762203	21.3196	4.545E-07
残差	26	1.447E+10	556518982		
合計	29	5.006E+10			

	係数	標準誤差	t 値	P-値	下限95%	上限95%	下限95.0%	上限95.0%
切片	0	-	-	-	-	-	-	-
a	1.40	0.31	4.47	0.00	0.75	2.04	0.75	2.04
b	189.42	119.64	1.58	0.13	-56.50	435.34	-56.50	435.34
c	9592.51	7285.86	1.32	0.20	-5383.78	24568.80	-5383.78	24568.80

出所 JICA 調査団

**図 3.1.2 将来予測モデル(省外旅行者)**

なお、この予測モデルには北京・上海・広州・成都・西寧とラサを結ぶ青蔵鉄道開通による省外からの旅行者は含まれていないが、目的地がチベットである観光客が青蔵鉄道を利用する際に、青海省内に途中下車するケースが考えられる。このような青海省へのインバウンド旅行者数を下記の仮定の下で別途算出した。その結果、2007年に青蔵鉄道によって発生する青海省への省外旅行者数は年間912,500人<sup>29</sup>となった。2010年からの運行本数は片

<sup>27</sup> 都市人口やアウトバウンド旅行者数も重要な要因として考えられるが、各省市自治区の都市人口比率のデータ入手には限界がある。

<sup>28</sup> 他の要因も変数として用いる事を検討したが、分析の結果重要度は低かったため、本調査ではこれら3つの要因を適用する。これらの詳細は付録4に記載する。

<sup>29</sup> 125人×10車両×4本×0.5(乗客の半数)×365日

側3本、2015年からは片側4本に増便されるというさらなる仮定を置くと、2010年から2014年は年間約137万人、2015年から2020年は年間約183万人となる<sup>30</sup>。

- 青蔵鉄道開業：2007年
- 一日の運行本数：片側2本
- 車両数：10
- 車両当たり125人乗車
- 乗客の半数は青海省外の居住者であり、青海省内で途中下車する。

上記のとおり、青蔵鉄道利用によるインバウンド旅行者数は、青海省を最終目的地とする将来予測モデルの対象と全く異なるマーケットからの旅客である。よって、将来予測モデルには影響を与えず、単純に加算する事ができる。青蔵鉄道利用者を含めた省外旅行者数は、2015年で333万人、2020年で379万人という予測結果となり、2005年から2010年の年平均増加率は23.0%、2010年から2015年は5.5%、2015年から2020年は2.6%となった。

### 将来予測結果（省外旅行者）

以上に示した仮定と予測モデルによる将来の省外旅行者数の予測結果は表3.1.8のようになる。

表 3.1.8 省外旅行者数の将来予測

（旅行者数の単位：人）

年	省外旅行者数 （青蔵鉄道以外）	省外旅行者数 （青蔵鉄道利用）	省外旅行者 数合計	増加率 （青蔵鉄道以外）	増加率 （合計）
2001	474,000	0	474,000		
2002	530,000	0	530,000	11.8%	11.8%
2003	505,000	0	505,000	-4.7%	-4.7%
2004	695,500	0	695,500	37.7%	37.7%
2005	904,726	0	904,726	30.1%	30.1%
2010	1,175,656	1,368,750	2,544,406	5.4% <sup>A</sup>	23.0% <sup>A</sup>
2015	1,506,778	1,825,000	3,331,778	5.1% <sup>B</sup>	5.5% <sup>B</sup>
2020	1,966,743	1,825,000	3,791,743	5.5% <sup>C</sup>	2.6% <sup>C</sup>

A、B、C：2005 - 2010、2010 - 2015、2015 - 2020、それぞれの期間における年平均増加率  
出所 JICA 調査団

### （5）外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の将来予測

青海省への外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数は1990年代中頃から着実に増加しており、SARSの影響で2003年に落ち込んだものの、2004年には持ち直している。表3.1.9は、1995年から2004年までの青海省への外国人旅行者数と香港・マカオ・台湾からの旅行者数の推移を表したものである。ともにピークは2002年であり、1995年から2002年までの外国人旅行者の年平均増加率は9.9%、香港・マカオ・台湾からの旅行者数の年平均増加率は32.1%、外国人旅行者と香港・マカオ・台湾からの旅行者の合計では18.5%

<sup>30</sup> 2006年4月に一日の運行本数：片側4本、車両数：12（1等寝台車2両、2等寝台車6両、座席4両）、定員：824名であることが明らかとなった。しかし、75%の乗客が青海省外の居住者であり、青海省内で下車すると仮定すると、2015年までは表3.1.8の予想とほぼ一致するため、予測モデルをこのまま利用する。

であった。SARSの影響があった2003年から2004年の増加を除き、最も増加率が高かったのは1999年から2000年であり、その期間の増加率は58.7%に達している。

**表 3.1.9 青海省への外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の推移**

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
外国人旅行者数	9,852	7,533	9,449	10,049	9,745	14,579	18,295	19,110	7,715	12,358
香港・マカオ・台湾からの旅行者数	3,480	2,819	3,368	6,561	10,792	18,013	21,405	24,400	9,996	16,517
合計	13,332	10,352	12,817	16,610	20,537	32,592	39,700	43,510	17,711	28,875
年平均増加率	-	-22.4%	23.8%	29.6%	23.6%	58.7%	21.8%	9.6%	-59.3%	63.0%

出所 青海省統計局：青海統計年鑑2001、2002、2003、2004、2005

表 3.1.10 は、青海省旅遊業發展与布局總体計画（2000）に示されている外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の将来予測である。2004年の実績値と1995年以降の増加率を考えると、2005年の10万人、及び2004年からの増加率246.3%という数字は非現実的であり、2010年の予測値も大きく算出されている。一方、2020年の予測値である50万人は2004年からの年平均増加率が20.8%であれば良く、達成可能な数値と言える。20.8%は、1995年から2002年の年平均増加率（18.5%）よりも多少高い数字である。

**表 3.1.10 外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の将来予測 1**

	2004*	2005	2010	2020
外国人旅行者数、及び 香港・マカオ・台湾からの旅行者数	28,875	100,000	250,000	500,000
増加率（2004 - 2005）		246.3%	-	-
年平均増加率（2004 - 2010）		43.2%		-
年平均増加率（2004 - 2020）		20.8%		
年平均増加率（2010 - 2020）	-	-	9.1%	

\* 2004年の数字は実績

出所 青海省旅遊業發展与布局總体計画（2000）

以上を踏まえ、本調査では過去の実績に基づき、2010年までの外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の増加を抑え、一方で2010年から2020年の増加率を増大させて将来の旅行者数を予測した。これは、2010年頃には現在実施されている、また今後実施される観光開発がある程度完了し、観光デスティネーションとしての青海省の国際的な知名度が高まるという想定に基づいている。

**表 3.1.11 外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の将来予測 2**

	2004*	2005	2010	2020
外国人旅行者数、及び 香港・マカオ・台湾からの旅行者数	28,875	50,000	175,000	500,000
増加率（2004 - 2005）		72.4%	-	-
年平均増加率（2004 - 2010）		34.9%		-
年平均増加率（2004 - 2020）		20.8%		
年平均増加率（2010 - 2020）	-	-	13.1%	

出所 JICA 調査団



**(6) 青海省へのインバウンド旅行者数の将来予測**

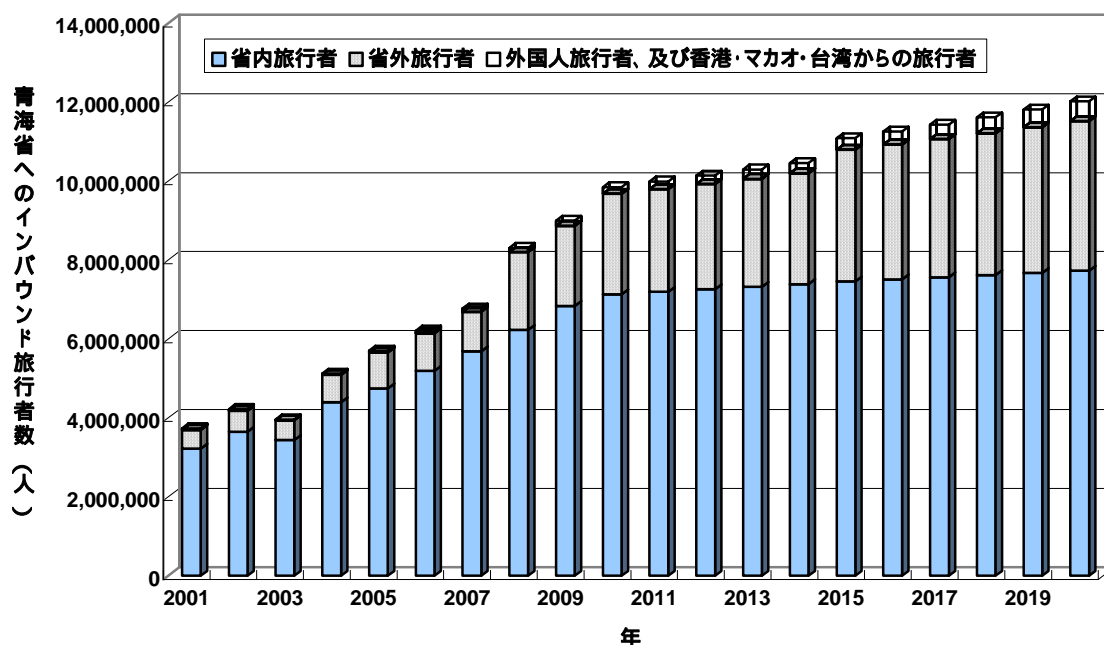
表 3.1.12 に、青海省へのインバウンド旅行者数の 2020 年までの将来予測をまとめる。青海省旅遊業發展与布局總体計画（2000）による推計よりも 2005 年は約 70 万人多くなっているが、同計画の 2010 年の予測は約 1,025 万人、本調査の同年の予測は約 985 万人となり、ほぼ同程度の予測結果となった<sup>31</sup>。2020 年は、同計画による推計結果では 2,060 万人、本調査での予測結果は 1,202 万人となった。

**表 3.1.12 青海省へのインバウンド旅行者数**

（単位：千人）

年	A 省内宿泊 旅行者	B 省内日帰 り旅行者	C=A+B 省内旅行 者合計	D 省外 旅行者	E 青蔵鉄道 による省 外旅行者	F=D+E 省外旅行 者合計	G=C+F 国内旅行 者合計	H 外国人 旅行者	I=G+H 青海省へ の旅行者
2001	764	2,460	3,224	474	0	474	3,698	40	3,738
2002	870	2,780	3,650	530	0	530	4,180	44	4,224
2003	816	2,622	3,438	505	0	505	3,943	18	3,961
2004	1,136	3,260	4,397	696	0	696	5,092	29	5,121
2005	1,442	3,307	4,749	905	0	905	5,654	50	5,704
2010	2,366	4,763	7,129	1,176	1,369	2,544	9,674	175	9,849
2015	2,586	4,872	7,458	1,507	1,825	3,332	10,790	296	11,086
2020	2,825	4,903	7,728	1,967	1,825	3,792	11,520	500	12,020

\* 外国人旅行者、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者  
出所 JICA 調査団



出所 JICA 調査団

**図 3.1.3 青海省へのインバウンド旅行者数**

<sup>31</sup> 青海省旅遊業發展与布局總体計画（2000）の推計では約 1,025 万人、本調査の予測は約 985 万人。

## 3.2 環境保全課題

### 3.2.1 自然環境保全課題

青海省は寒冷で乾燥した高原性の草原を主体としており、外部要因に敏感な生態環境である。1950年代以降、人口急増を背景とした自然資源の過剰利用は自己再生能力をはるかに超え、生態環境の荒漠化が進んでいる。現在の中国における退耕還林還草などの生態環境建設への取り組みは、この荒漠化の経過を分析した結果である。青海省では、特に過放牧による草地の保全対策が重要な課題である。

#### (1) 生態環境の荒漠化

中国では、膨大な人口を維持する中で、生態環境の過剰利用（過剰耕作、過剰森林伐採、過放牧等）の問題を常に抱えてきた。荒漠化の形態は地域の気象条件によって異なる。乾燥・半乾燥地帯の北部は風食（沙漠化）による荒漠化に侵され、長江以南の湿潤な南部では、水食（水土流出）による荒漠化が進行している。風食とは、生態系の基盤である土壌が日照り等で乾燥・沙漠化して強風により飛ばされ、草地や農耕地などが劣化する現象である。水食は、傾斜地の草地や耕地が豪雨などによって土壌浸食を受けるものである。風食にせよ水食にせよ、気象条件ばかりか人間活動による過剰利用がきっかけとなって発生する。

中国各地で荒漠化問題を抱えているが、青海省では荒漠化に起因する数多くの災害が起きている。青海省民政庁のウェブサイトでは、2002年にまとめた11章40節に及ぶ大部の「青海自然災害」が公表されている。2000年の青海省林業勘測設計院の調査によれば、青海省全域の荒漠化土地面積は2,045万ha（20.45km<sup>2</sup>）で、これは全省の28.4%を占める。表3.2.1は青海省の荒漠化について示したものであり、乾燥が深刻な青海省で最も多いのが風食（70.8%）である。被災地域は、省中央部の盆地や青海湖南部の共和盆地、及び貴南県であり、その面積は東西約800km、南北約500kmに及んでいる。風食の直接的な原因は過放牧と過剰耕作であり、対象地の荒草地は過放牧による荒廃した草地を指し、程度がさらに進むと裸地化や沙地化となる。

表中で風食が進んでいる地域（柴達木盆地～チャカ塩湖～共和盆地、貴南県）は、省中央部を東西に走る盆地・青海湖南部・湟水谷南部であり、この地域は省内では比較的平坦地であるため、新規灌漑による耕地開発が行われた地帯である。しかし、乾燥が厳しい地帯でもあるため、耕地の維持が難しく、多くが耕作放棄に至っている。

それに対し、水食は歴史的にも早くから開かれた農耕地帯の湟水谷が中心となる。崩れやすい黄土丘陵地を過剰耕作することからの「水食被災地」があり、「塩積化」は柴達木盆地などにおける不適切な灌漑管理による耕地の塩分堆積である。そして、「凍融」は寒冷な高山で生じる自然現象としての崩壊や風化である。表3.2.2は、自然災害被災データを整理したものである。

表 3.2.1 青海省の4類型別荒漠化

荒漠化類型	地域	対象地
風食 (70.8%)	柴達木盆地～チャカ塩湖～共和盆地、貴南県の東西約800km南北約500km	荒草地、裸地、沙地
水食 (14.4%)	省東部の黄土丘陵地：民和、楽都、平安、貴徳、尖扎などの県、及び黄河の両岸、昆仑山、祁連山、青海南山等の山地と谷地	退化耕地・草地、黄河や内陸河川の泥沙、ダム湖、河床上昇
塩積化 (7.7%)	柴達木盆地の湖沼、都蘭県の香日徳農場、諾木洪農場、ゴルムド市の河東、河西農場	不適切な灌漑による農耕地の塩分堆積
凍融 (7.1%)	昆仑山やココシリ山などの高山	反復凍解、崩壊、風化、地表疏松、粗造

出所 青海省民政庁編：青海自然災害（第4章生態災害）（2002）

表 3.2.2 青海省の自然災害被災データ

年	被災県数	被災郷鎮数	被災人口 (万人)	被災死亡 人数(人)	被災農耕地 (万ha)	被災草地 (万ha)	死亡家畜 (万頭)	特記事項
1994	35	--	68	62	31.0	--	--	降水極少、日照り
1995	31	--	140	15	28.0	--	123	雪害、乾草日照り
1996	44	387	131	62	17.5	--	203	雪害
1997	--	--	190	24	22.6	667	31	高温乾燥、暴雨、洪水
1998	41	352	129	34	12.6	555	86	雪害、暴雨、低温霜凍
1999	40	385	350	65	42.1	107	134	乾燥害、暴雨、洪水
2000	40	358	252	12	39.5	--	183	乾燥害

不詳のデータは「--」で表している。

出所 青海省民政庁編：青海自然災害（第4章生態災害）（2002）

## （2）過剰利用の歴史

「青蔵高原、人口と環境承载力（王天津著・洛桑・靈智多杰主編、1998）」は、北京の研究者や中央政府の行政担当者らが調査してまとめた報告書で、青蔵高原の自然環境の劣化問題とその将来展望に関するものである。青海省とチベット自治区を対象とし、青蔵高原の人口急増による自然環境の劣化を多面的に分析している。

### 青海湖の漁業

青海湖は青海省命名の源であり、中国最大の湖水（弱塩分の汽水）である。青海湖は流出河川のない内陸湖であるが、降雨量（年平均357mm）や流入河川と地下水などからの湖水への入水量に対して蒸散量（年平均926mm）の方が多く、湖水面積は縮小傾向にある。青海湖の漁業は省人民政府による第4次漁業規制（2001年1月から2010年12月）の下にあり、「封湖育魚」のため漁業を停止している。表3.2.3は、青海湖の年間漁獲量の推移を

示したものである。1960年代初期の青海湖の漁獲量は年産7,000トンであったが、1960年代末には4,000トン、1990年代初期には僅か数百トンにまで減少している。

前述の「青蔵高原、人口と環境承载力」では、漁獲量の経緯を次のように記している。「青海湖は青海省最大の天然魚類の生息水域であるが、1959年から関連部門を組織し、人材・財力・物資を投入して青海湖で大規模な漁獲を行った。ピーク時には青海湖に1千艘近くの漁船があり、1万人以上が漁獲に従事した。当初は小規模の網を用いたが、次第にトロール漁船、沿岸では地引網を用いて湖水中に魚網が張り巡らされた。魚類はまさしく壊滅的な捕殺状態に陥った。」そして、「天然魚類を長期間に渡って捕獲する科学的な方法などあるはずがない。」とその濫獲ぶりを批判している。現在も漁業停止措置が行われているが、天然資源の過度の収奪により、漁獲資源回復は捗捗しい成果を上げていない。

表 3.2.3 青海湖の年間漁獲量の推移

年代	年間漁獲量(トン)	備考
1960年代初期	7,000	12,416トン(1961年)
1960年代末期	4,000	
1980年代	2,000	1,405トン(1978年)
1990年代初期	数100	

出所 王天津著・洛桑・靈智多杰主編：青蔵高原人口と環境承载力(1998)

## 林業

標高の高さから森林限界を超える地域が多いため、面積は僅かでも森林は青蔵高原の貴重な生態系である。青海省林業局は、退耕還林や防護林造成事業、禁伐による天然林保護、そして森林公園の整備などに取り組んでいるが、それ以前の濫伐によって自然林資源が著しく劣化している。林業局は1979年に森林資源の調査法を設定し、それに基づいて全省を対象に現地調査を5年間実施した。その調査データは1985年に集計され、1988年に「青海森林資源」として公表されている。

### i 森林資源の動向

1950年代から1960年代初期の自然林伐採について、「青海森林資源」では次のように述べている。「解放初期から1960年代初期は正に我が省の国民経済と基本建設の回復の時期であり、大きな木材需要量への対応を求められていた。ところが、林業管理機構が不健全で管理水準は低く、盲目的な木材生産一辺倒に加えて伐採技術も低かった。搬出条件によって伐採木は山中で放棄されるなどしたため、立木資源の利用率は僅か40%から45%程度に過ぎなかった。」

1960年代中期から1970年代中期になると、林業局は伐りやすい条件の自然林を一通り択伐した。択伐とは、細く若い林木の生長を勘案して森林を適切に抜き伐り、相当林木を伐り残すという自然林に対する伐採作業である。しかし、優良な自然林が多い瑪可河、祁連と隆務の麦秀などの林場(営林署)では、需要に対応するために既に択伐した同じ林分を再度択伐してしまい、さらに疎林化・劣化させてしまっていた。これでは森林管理技術とは呼べずただの濫伐である。

青海省林業局がこのような経営管理体系を改めるようになったのは1977年、1978年のことである。林業法規を作成して森林の経営管理作業を進め、伐採作業と審査制度を拡充して自然林の経営利用水準の進歩が提案された。同時に、計画外、林場外部の一般住民による盗伐が相対的に減少して合理化された。このような経過を回顧すれば、森林蓄積資源の変化は総じて以下のような3つの点に集約される。

- 立木総蓄積を増加することができず、自然林区では明らかに森林の蓄積が減少した。
- 重要な自然林樹種である雲杉属樹種の蓄積を低下させた。
- 林分の質、量ともに低下し、森林の保護能力を衰退させた。

### 伐採跡地の造林を行わない粗放な林業活動

林業局の1950年代からの30数年間の活動をまとめたのが表3.2.4であり、有林地と疎林地に分けてその増減を示している。森林資源に大きな影響を与えたのが13,776haに及ぶ森工伐採である。また、1.5万ha余の自然林伐採に対して、人工造林面積は11%程度の2,252haに過ぎない。自然林として質の良い有林地を大幅に減少させ、劣化した疎林地を増やしており、自然林の伐採跡地に対し林木更新を促進させる人工造林などの作業が十分に行われていない。

表 3.2.4 有林地、疎林地の面積変化

(単位：ha)

項目	実質増減面積	
	有林地	疎林地
合計	-13,513	+6,657
天然林の再生	+2,429	+830
人工造林	+2,252	+408
閉山育林	+2,749	+2,073
森林火災	-5,347	-3,322
森林伐採	-13,776	-1,454
農地開墾	-850	-268
道路整備	-185	-3,124
その他	-785	

出所 青海森林資源(78頁)(1988年)

### 牧畜業

「青蔵高原、人口と環境承载力」では、1990年代に現地調査を実施し、過剰利用による深刻な草地の劣化を次のように指摘している。「青海省の草地退化は、沙漠化面積が733万haに到達して草地総面積の19%に及び、その中の約20%程度が重度の退化草地となっている。1990年代の天然草地の生産量は、50年代と比べると30%から60%減少している。草地の沙漠化は、高原気候の日照乾燥と風沙侵蝕によって激化している。」

また、1990年代初期の土地利用データを全国的に検討した「中国土地利用(呉伝鈞・郭煥成編、1994)」は、青海省の土地利用問題の草地について次のように述べている。「過放牧は、草地の劣化とそれに伴う広漠化を引き起こし、盲目的な開墾と同様に利用可能な草地面積を減少させている。また、鼠害や虫害も深刻な草地の退化をもたらし、単位面積当たりの草生産量が概ね1/3に減少した。青海省では、ここ40数年間で家畜頭数が1.96倍となり、利用可能な草地面積も荒漠化で減少し、羊一頭当たりの草地面積が1950年代初期の32畝(2.1ha)から13畝(0.9ha)未満に減少した。青海省における過放牧は、草地の生態環境の回復力を遥かに超え、家畜対草地の矛盾関係を際立たせ、省牧畜業の発展にとって深刻な障害となっている。」

青海省農牧庁草原総ステーションでは、衛星画像や航空写真なども用いて省内の草地類型や生産量を詳細に調査し、草地に関する理論上の保全可能な放牧密度と現実の過剰利用

との格差を 1988 年に公表した<sup>32</sup>。1996 年の公表では、西寧市と海東地区の過剰利用は 385% と 291% であり、理論上の値の約 3 倍から 4 倍の過放牧状態に達している。2004 年の公表値でも同様の過剰利用状況にあり、1996 年と 2004 年の公表値を比較しても西寧市、海東地区、黄南チベット族自治州（黄南州）では微減、海北チベット族自治州（海北州）、海南チベット族自治州（海南州）では増加という地域差はあるものの、過放牧の実態に大きな変化はなかった。

表 3.2.5 青海省天然草地理論と実際の飼育数

（単位：飼育容量、飼育数、理論値と実測値の差（万羊）、1 羊当たりの草地面積（ha/羊））

地域	理論値		1996			2004		
	理論飼育容量	草地面積/1 羊	実測値		実数/理論	実測値		実数/理論
			飼育数	理論値との差		飼育数	理論値との差	
全省	3,625.45	0.87	3,519.65	-105.8	97.1%	3,511.55	-113.9	96.9%
西寧市	22.59	0.73	87.01	64.42	385.2%	79.80	57.21	353.3%
海東地区	121.03	0.78	352.66	231.63	291.4%	279.80	158.77	231.2%
海北州	258.81	0.92	420.55	161.74	162.5%	493.59	234.59	190.6%
黄南州	322.17	0.49	397.98	75.81	123.5%	375.60	53.43	116.6%
海南州	370.87	0.91	546.23	175.36	147.2%	661.70	290.83	178.4%
他	2,529.98	0.91	1,715.22	-814.78	67.8%	1,337.60	-1192.38	52.9%

出所 青海省土地管理局：青海土地資源 153 頁（1999）

統計数値は青海省統計局：統計年鑑（2005）

### 3.2.2 環境社会配慮に係る課題

中国では、これまでに環境影響評価制度を相当に発展させてきた。JICA が実施する調査の基本方針は、プロジェクトが環境や地域社会に与える負の影響の回避・緩和を目指し、環境社会配慮を確実に実施することである。

#### (1) 環境影響評価制度

建設プロジェクトに対する環境影響評価は 1979 年から施行された「環境保護法」で規定され、「建設プロジェクト環境保護管理弁法（1981）」が制定、施行された。2002 年に成立し、翌 2003 年に施行された「環境影響評価法」において、環境アセスメントの対象を建設プロジェクトから各種開発発展計画に拡大している。

西部大開発の展開とともに、地方内陸部でも環境管理の向上が求められている。中国では、建設プロジェクトの環境に対する影響の程度に基づき分類され、環境アセスメントが管理・実行されている。

#### 環境影響評価法第 16 条に規定される分類管理（スコーピング）

重大な環境影響が発生する場合：環境影響報告書を作成し、環境にもたらされ得る影響について全面的な評価を行わなければならない。

<sup>32</sup> 青海草地資源（1988）

軽度な環境影響が発生する場合：環境影響報告表を作成し、環境にもたらされ得る影響について分析、あるいは特別な項目の評価を行わなければならない。

環境影響が非常に小さく、環境アセスメントを行う必要がない場合は、環境影響登録表に記入して提出しなければならない。

分類管理の現況は、中国環境年鑑によって公表されている。1997年から2001年までの596,066件の建設プロジェクトのうち、環境保護部門へ申請されたものは565,245件に及んでいる。それらの環境アセスメント執行状況は、環境影響報告書は15,065件で総数の2.7%、

環境影響報告表は226,321件で総数の40.0%、そして環境影響登録表は323,859件で総数の57.3%である。過半の建設プロジェクトで環境アセスメントの実施は必要ないが、軽度な環境影響が発生するために環境影響報告表が必要となるプロジェクトが4割占める。

建設プロジェクトの環境影響報告書には下記の内容が含まれていなければならない。また、環境影響報告表と環境影響登録表の内容と書式は、同様に環境保全当局によって制定されている。

1. 建設プロジェクトの概況
2. 建設プロジェクトの周辺環境の状況
3. 建設プロジェクトが環境にもたらし得る影響に対する分析、予測、評価
4. 建設プロジェクトの環境保全措置、及びその技術、経済的論証
5. 建設プロジェクトの環境影響に対する経済損益分析
6. 建設プロジェクトに対する環境モニタリングの実施に関する提案
7. 環境アセスメントの結論

環境影響報告書と環境影響報告表は、相応の環境アセスメントの資格を持つ機関によって作成されなければならない。ただし、アセスメント実施機関の選定は事業実施主体が行うものとし、他の如何なる機関も選定に関与してはならないとされている。

建設プロジェクトの環境アセスメントの手順を次図に示した。現在の評価項目は公害関連の水質、大気、騒音といった環境要素が中心である。ただし、環境質量現状調査に自然環境があるように、水資源、動植物、生物多様性などの生態環境に係る環境要素の評価が次第に重視されていく可能性が高い。

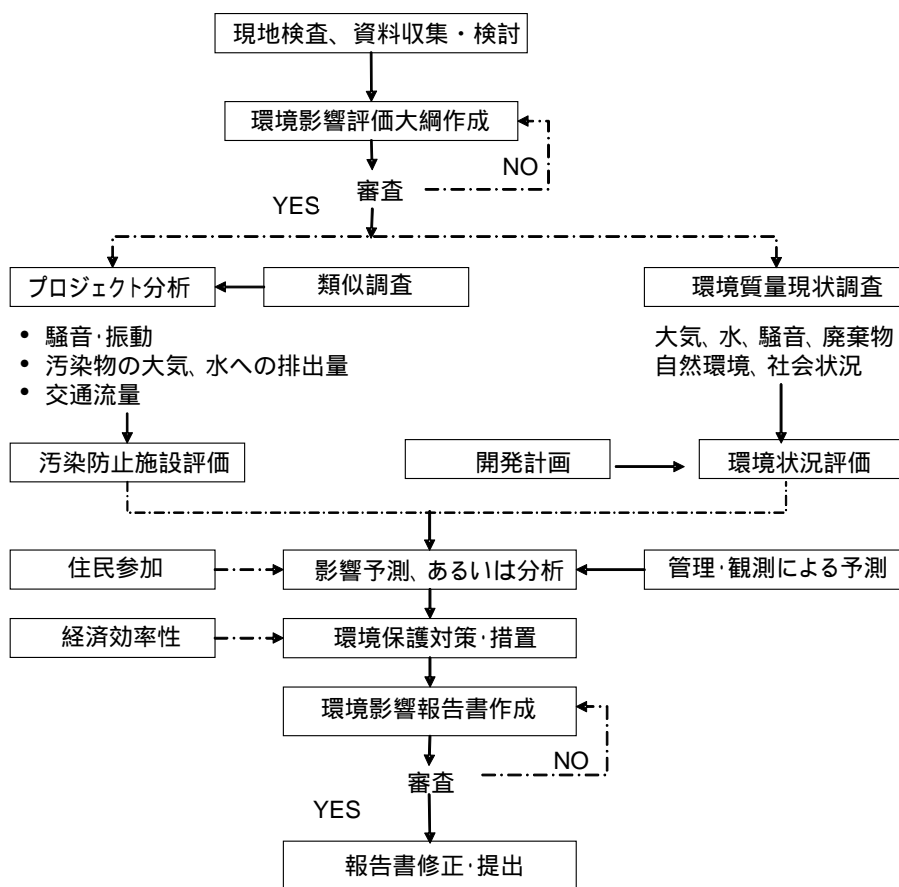


図 3.2.1 環境アセスメントの手順

青海省においても環境配慮関連の組織や制度が整備されてきており、各種環境影響評価を行う資格、機材・設備を有する研究所、コンサルタントも多数ある。ただし、環境行政部門は、大規模な開発プロジェクト実施において比較的弱い立場に置かれる場合が多く、環境評価制度への適用が不十分に終わるケースが多発している。今後の観光開発における課題は、公害関連だけでなく生態環境分野の要素も重視し、住民の環境意識の向上などを通して環境影響評価制度の徹底を図っていく必要がある。

**(2) 貧困対策**

貧困地域の住民は、過放牧、過剰耕作、過剰伐採など、自然資源への依存度が持続可能な水準を越えて異常に高い。地域住民の貧困と環境劣化との悪循環は深刻で、今日この悪循環に対して注目されるようになってきた。下記、青海省における代表的な環境社会配慮の課題として貧困問題を取り上げる。

**貧困対策への寄与**

青海省では、農牧地区を対象として貧困層の定義が定められ、また中央政府と省人民政府がそれぞれ「国家貧困対策開発重点県」と「省貧困対策開発重点県」を指定し、財政面での支援策を講じている。



- 絶対貧困層：農業地区の一人当たり年間所得が 625 元以下、畜産地区が 800 元以下
- 低所得層：農業地区の一人当たり年間所得が 800 元以下、畜産地区が 1,000 元以下

青海省における貧困は極めて深刻であり、中国最多の国家貧困対策開発重点県を抱えている。特にチベット族が集中する青海省の南西部は、全国的に見ても深刻な状態と言える。2003 年の農村・牧場地区の総人口が 329 万人であるが、そのうち絶対貧困層が 119 万人、低所得層が 78 万人であり、農村・牧場地区人口の約 60% が貧困状態にある。青海省統計局農村調査隊の「農村貧困世帯サンプル調査」(毎年 840 世帯)では、下表のように数年にわたり総収入、とりわけ現金収入がほとんど増えていない。

表 3.2.6 農村貧困世帯サンプル調査

(単位：元)

	2000 年	2001 年	2002 年	2003 年
一人当たり収入	1,460	1,572	1,794	1,831
内訳				
給与など現金収入	210	228	420	389
農牧業による収入	1,173	1,260	1,277	1,313
補助金、財政移転	77	84	97	129

出所 青海省統計局

中国他地域での貧困対策の成功例をみると、貧困対策のポイントは、如何に現金収入を増大させるかにあると言えるが、標高が高い地域ほど現金収入を得る手段が少なくなる。観光開発による「貧困対策」への寄与は、観光産業による雇用増加、土産品生産・販売による現金収入増加などが考えられる。そのため、観光開発を行う際に如何に周辺地域の農村人口を巻き込み、現金収入増加のアプローチを確立させるかが青海省の観光開発での課題の一つとなる。

青海湖 151 基地や青海湖沙島地区における観光開発プロジェクトにより、5,000 人以上の直接雇用、及び数千人の関連産業などに係る間接的な雇用の創出が見込まれ、地元の貧困対策への貢献が期待されている。

### (3) 環境アセスメントと住民参加

環境アセスメントへの住民参加は、開発や建設活動による地域社会への負の影響に対する住民の自覚を促すという意義がある。中国の環境アセスメントにおける住民参加は 1990 年代に始まった。1996 年に改正された水污染防治法や 1998 年に採択された建設プロジェクト環境保全管理条例で、所在地の各種組織・団体と住民の意見の聴取が定められている。さらに、2003 年施行の環境影響評価法では公衆の参加を重視し、公衆の意見の聴聞や論証会、公聴会の開催を明記している。ただし、環境アセスメント文書などの情報公開が必ずしも進んでいない現状では、住民参加をさらに発展させる必要がある。

他の大都市や東部沿海地域に続き、青海省でも住民参加制度が徐々に施行されつつある。住民参加は主に 2 つのレベルで行われている。公聴会制度が施行された大規模開発プロジェクトの計画段階では、各関係省庁担当者、専門家、市民・住民代表等が集められ、プロジェクトに対する賛否意見を求められる。そして、その意見がプロジェクトの形成・決定に反映される。開発プロジェクトの実施が決定された場合、プロジェクト対象地域の地域

住民を集めて「話し合い」が行われる。話し合いには、住民移転が発生した場合の補償問題も議題となる。

#### (4) 青海省観光開発にかかわる環境インパクトのスコーピング

観光開発計画に関わる環境インパクトを、現地踏査、事例分析、資料収集・分析、環境保護局、国土資源局、林業局へのヒアリングなどを実施してスコーピングを行った。

### 3.3 観光産業開発課題

観光事業は、「多種多様なサービスの組み合わせによる、1つの遅滞・欠陥もない観光客への完全、かつ満足のゆくサービスの連鎖の提供」から成り立つ。近年の中国全国レベルでの観光流動の拡大や観光地間の競争（省・地域間での観光客の奪い合い）、市場の成熟<sup>33</sup>といった観光をとりまく市場環境・条件の変化は、観光需要と観光プロダクトが強い相互関係にあることを観光業関係者が理解し、それに応じた速やかな対応を必要としている。

2000年の観光改革開放後に青海省観光は目覚ましい発展をとげたが、今後の青海省観光の持続的な発展には早急に対処すべき課題があり、それらを下記の5つに大別する。

- ホテルサービスの向上（サービス改善のための教育・訓練の実施）
- 旅行社乱立による過当競争とサービス低下の抑止
- 観光地に付随する施設、設備、便宜、サービスの整備
- 観光プロダクトの改善（商品・品質管理・サービスの向上）
- 観光デスティネーションとしての認知度の向上（販促・プロモーションの強化）

なお、本調査では、青海省を訪れる国内・外国人観光客、旅行会社、ホテル業者、航空会社に対して青海省観光に関するアンケート調査を実施し、観光産業に係る開発課題などを抽出した。アンケート調査の概要と結果は「付録6 アンケート調査」にまとめる。

#### (1) ホテルサービスの向上

青海省内のホテルサービスの水準は、中国内の観光先進地域（北京市や上海市、雲南省など）と比較すると高いとは言えない。特に、日々宿泊客に直接接するフロント・レセプション、食堂ウェイター、ハウスキーピングといった部門で、職業的な専門性と訓練されたサービスが見られないことが多い。また、サービス産業に不可欠な歓迎の気持ちが自ずと表情に現れる「笑顔・微笑み」を有したサービスに接することも稀である<sup>34</sup>。

下記、調査団員が西寧市内の4星ホテルに滞在した際に見聞・体験したことをまとめる。

- 先着順に処理するための行列整理の工夫（仕切り帯ラインの仮設）が皆無のため、チェックイン・チェックアウト時の混雑が増している<sup>35</sup>。

<sup>33</sup> 観光客は厳しい目と判断をもち、観光体験・サービスを通じたより高い満足度を求めるべく観光地を選択する。

<sup>34</sup> タイ国は、観光受け入れに成功しているアジア有数の観光先進国である。過去10数年にわたり、タイ国の観光客誘致・宣伝の基調スローガンは「微笑みの国・タイ（Land of Smile, Thailand）」である。すなわち、「微笑みを持って観光客をお迎えする国」が国全体の観光客誘致の基本方針となっている。

<sup>35</sup> 北京や上海などの観光先進地域では、行列整理の工夫（仕切り帯ラインの仮設）は既に常識になっている。

- 多くの従業員に「笑顔・微笑み」で宿泊客に接客するという意識、訓練、習慣がほとんどなく、無表情・無言の接客・サービスが多い<sup>36</sup>。
- ロビー・マネージャーのデスクが入口脇にあるが、担当の主任クラスの従業員も無表情でその役割も良く分からない。宿泊客の誘導・案内をしている様子もない。
- ロビーや廊下の照明の一部が切れても、その日のうちに取り替えられることは稀である。
- ロビーや車寄せの客さばきがつたない<sup>37</sup>。

## (2) 旅行社乱立による過当競争とサービス低下の抑止

観光改革開放前の1999年には52社（国際旅行社9社、国内旅行社43社）であった青海省内の登録旅行社数は、2005年6月には122社（国際旅行社11社、国内旅行社111社）に達し、実に2.4倍にまで増加している<sup>38</sup>。

このような旅行社数の急増・乱立は、当然ながら一定量の観光客をめぐる激しい競争をもたらし、様々な悪影響を生み出す要因となる。公正な条件下での競争原理導入は奨励されるべきであるが、「悪貨が良貨を駆逐する」とも言うべき旅行社の乱立と過当競争激化の現状を放置すれば、一時的な観光客増加はあっても、長期的には観光デスティネーションとしての青海省とその旅行・観光サービス全般への不満を増幅させ、ひいては青海省観光全体の評価・イメージを低下させる恐れがある。管理体制と法規の整備が急務である。

- 元来価格に極めて敏感な中国市場の中で、最も手っ取り早い競争手段である「価格競争」が激化し、旅行社間のダンピングが日常化している。
- 旅行業はもともと利幅が薄い業態で、ダンピングを余儀なくされる旅行社は仕入れ原価の引き下げに血眼になる。
- 旅行パッケージ商品の仕入れは、主に交通費（航空・鉄道・バス）、宿泊費、飲食代、観光費（ガイドや入場料など）から成り立っているが、航空・鉄道運賃は売り手寡占市場であり、旅行社に価格交渉の余地はほとんどない。
- 原価引き下げの圧力はもっぱらホテル、レストラン、バス、ガイドに集中する。
- より安いホテル、より安価なメニュー、サービス水準の低いバスの手配、より安い料金で請けるガイド<sup>39</sup>の調達を招くことになり、結果的に観光客へ提供するサービス・品質の水準の低下を招く。

<sup>36</sup> 例えば、食堂で空いた皿を下げる際、無言で突然わきからウェイトレスの手がのびて皿がさげられる。部屋の清掃を終えたハウスキーパが無言のままドアをバタンと閉めて出てゆく。観光先進地域では、たとえ無言であっても目顔や身振りで挨拶するのが基本である。

<sup>37</sup> 中型・小型バスが駐車していてもドアマンの車・客さばきが十分でないため、バスの中に乗用車が挟まって出られない。また、車寄せ前後の車路の乗車車駐車が全く管理されていないため、バスが出られないなどの状況が見られる。観光先進地域では、ドアマンとフロントの連携・情報交換により団体の到着・出発情報は事前に管理され、それに応じて車寄せの駐車規制・スペース確保が行われる。

<sup>38</sup> いわゆる「もぐり業者」も入れると、全体で140社から150社に達すると言う情報もある。

<sup>39</sup> 公定料金はあっても市場競争原理の中で機能しない場合が多い。

### (3) 観光地に付随する施設、設備、便宜、サービスの整備

青海省の観光地付随の施設・サービスの水準は十分でなく、国際水準の観光地付随施設・サービスに慣れていない、またそれらの整備・提供を当然と考える外国人観光客にとって、現在の青海省内の観光地における施設とサービスは満足できるものではない。海外の観光地の施設・サービスを経験した国内客も増えており、国内の観光先進地域では国際水準の設備・サービスが整備され、国内客の観光に対する期待・要求の度合いも高まっている。

青海省を代表する観光地であるタール寺と鳥島では、下記のような課題が指摘できる。

#### タール寺

- 八塔前広場で入場券を販売していて、寺指定の公式ガイドの手配、記念品・土産の販売も兼ねているが、案内パンフレットがない。
- 博物館や資料館、ビジターセンターがない。
- 主要参観個所の案内や説明の掲示は一部あるが古いものが多く、維持・管理状態が十分でない。
- 中国語・チベット語・英語などの公式ガイドはいるが、内容はありきたりのもので水準も高くない。
- 有料のトイレが随所にある。中国の平均水準と比較するとまずまずの清潔さであるが、国際水準から見れば劣る。

#### 鳥島

- 県道分岐から入口までのアクセス道路が舗装されているが、道路沿いの植栽や修景がない。
- 駐車場が入口右手にあるが舗装状態は砂利・土であり、車轍跡などで車両下車後の歩行が不便。
- 鳥類の説明板が十数点取り付けてあるが、小さくて維持管理も悪く、半数は剥げ落ちて読み取れない。
- 公式ガイドがない。環境保護の観点から電気自動車が導入されているのは先進的であるが、運転手が途中で案内や説明をすることはなく、そのような教育・訓練も受けていない。
- 無料のトイレが駐車場と鳥島入口の2ヵ所にあるが、国際水準から見ると容認できない水準である。

### (4) 観光プロダクトの改善

互助県土族民族村は、タール寺や青海湖鳥島とならび、青海省の代表的な2泊3日の観光旅程に組み込まれる観光プロダクトである。しかし、その「プロダクト化」レベルは極めて低いもので、現況のままでは観光客の期待を裏切る結果を招き、ひいては青海省観光全体の評価を低下させる恐れもある。

民族村では、旅行社が個々に契約した土族家族宅に案内され、伝統的な歌、踊り、プランコ遊戯などに参加し、土族の家庭料理の振る舞いを受けるのが一般的なコースである。村内で観光客を受け入れている家族・家庭は多く、その接遇規模にもかなりの差があるのが一概には言えないが、田舎の素朴な風情・雰囲気は味わえるものの、下記に示すように、

観光ポスターやガイドブックで紹介されているイメージを裏切る貧弱なものと言える。各家族・家庭が「見よう見真似」程度で観光客を受け入れているとすれば、早晚この観光プロダクトは市場から見放される恐れが高い。

- 歌舞・遊戯のレベルが低い。民族衣装も安っぽく、下からジーンズが見える。また、伴奏音曲もカセットテープである。
- 歌舞・遊戯・音曲の文化的・伝承的意味などの解説がない。
- 家屋・内装も伝統的建築様式を留めたものではない。
- 土族独特の刺繍なり編み物の土産品も、趣味、デザイン、仕上げ、いずれの面でも水準が低く、魅力は大きくない。

また、青海省の現在の観光土産品は、青海省旅遊業發展与布局総体計画（2000）がつとに三低一少（低い品質、低い創造的商品水準、低い包装水準、及び少ない鮮明な宣伝・イメージ）と指摘しており、外国人観光客はもとより、観光先進地域の観光土産品に馴染んでいる国内客にはいたって魅力に乏しいものばかりである。

青海省と近隣の観光先進省（雲南省や四川省）の土産品・手工芸品類を比較すると（表 3.3.1）、青海省の品数の少なさに対して、雲南省と四川省の土産品・手工芸品が如何に種類が豊富で多彩であるかが一目瞭然である。観光先進地域のモデル商品の研究、共同開発、さらには投資の導入などが望まれる。

表 3.3.1 土産品・手工芸品の比較（青海省と雲南省・四川省）

項目	青海省	雲南省	四川省
土産品	チベット族のバター彫刻や絨毯、皮革製品、毛織物、手織物、衣服、健康茶、冬虫夏草、薬草・薬品	大理紮染もの、白族紮染もの、少数民族服飾品、草編み帽、天麻健康食品、雪茶、佛香茶、旋雲茶、白毫茶、白芸豆、冬虫夏草、皮革製品、薬草人參、牛心果フルーツ、コーヒー	蜀絹織り・編み物、蜀錦つづれ織り物、成都絹扇、玉蘭竹の子、竹參香草、五糧液、「千張」湯葉、天麻健康食品、四川みかん、茅梨酒、青城茶、杜仲茶、苦丁茶、絨毯、白ろう、江團魚、国画紙、宋筆、龍井茶、雲霧茶、建昌板鴨、沱沱肉
工芸品	蔵族短剣・ナイフ	大理石彫り物・工芸品、タイ族木彫り品、木製工芸品、その他各種工芸品	竹製工芸品、玉の彫り物、彫刻品、漆器

出所 西安地図出版社：中国旅遊観光地図帳

#### （5）観光デスティネーションとしての認知度の向上

青海省は、かつては西安・蘭州の観光パッケージの一部として組み込まれるのが一般的であったが、近年の国内観光市場の成熟化に伴い変化が生じている。

- パッケージの対象が中部の観光デスティネーション群（陝西省、重慶市、四川省、貴州省）と西部の観光デスティネーション群（甘肅省、寧夏回族自治区、青海省、新疆ウイグル自治区、チベット自治区）に分化している。

- 青海省は西部観光デスティネーション群の一部として、新疆ルート（シルクロード周遊）、チベットルート、寧夏ルート（寧夏と西寧を結ぶ列車開通による）のパッケージに組み込まれることが多い。
- 最も代表的、かつ平均的な青海省の旅程は、2泊3日で青海湖（151基地、鳥島）、日月山、タール寺、土族民俗村を訪れるパッケージである。

観光業界でマス市場と呼ばれる一般大衆・観光客向けのパッケージ旅行カタログを見ると、国際・国内市場を問わず、西安、シルクロード、チベット、雲南のカタログはあっても青海省のみを単独に扱うものはほとんど見かけない。アムネマチン登山、ココシリ探検、三江源流遊行など、特化した専門的なツアー（SIT：Special Interest Tour）は限定された市場向けで、一般観光客を対象としたパッケージとは異なる範疇のものである。西部デスティネーション群の資源、魅力度、知名度を比較してみると、残念ながらいずれにおいても青海省は後塵を拝する位置にある<sup>40</sup>。

- 外国人客（日本市場）：1）陝西・西安、2）新疆・シルクロード（敦煌含む）、3）チベット、4）雲南・昆明、5）青海省
- 国内客：1）雲南・昆明、2）陝西・西安、3）チベット、4）新疆・シルクロード（敦煌含む）、5）青海省

また、青海省を国内客に人気の高い雲南省と比較した場合、旅行社関係者は下記のように指摘している。

- 青藏高原は魅力を有するものであるが、広大すぎて変化に乏しく単調である。青海湖や周辺の山岳も、風光としてはドラマチックさに欠ける。一方、雲南省の観光資源は多様性と変化を有している。
- 青海省が広大なため観光地間の移動時間が長く、その分旅行費用が膨らむ。雲南省では、短い移動時間でより多様で変化に富む観光体験ができる。
- 緑・森林が豊富な雲南省に比べて、青海省は緑・森林が極めて少ない。
- 高山病の不安がある。
- 観光地の整備が十分でなく、充実した参観を快適な観光環境で楽しむ状況にない。

なお、本節でとりあげた開発課題は、下記の6項目に整理した上で、「9.1 観光産業の競争力促進」において提言をまとめている。

- 顧客サービスの向上
- 従業員の能力・知識・技能の向上と管理体制の強化
- 業者間での競争原理の導入
- 利益による動機付けの強化
- 省外からの投資促進
- 市場での認知度の向上
- 管理体制と法規の整備

<sup>40</sup> 市場に出回っているパッケージ旅行カタログの量や種類により判断

### 3.4 観光プロダクト開発課題

#### 3.4.1 開発の枠組みと優先順位

##### (1) 次への展開が必要な観光開発

省人民政府によって開発優先スポットとして選定・整備が進む主要景観区や歴史・文化区は、西寧市を中心とする半径 150km 圏の環西寧圏に集中している。これらは、環西寧観光圏の将来の戦略的な周遊観光ルート開発における主要な観光スポットを形成するように選定・配置され、中国東部沿海地域や近隣の大都市観光市場の需要に適応した大量観光客受け入れ態勢を構成する。しかしながら、青海省旅遊業發展与布局総体計画で提案されている省外との連携による広域観光回廊開発、つまり線的な開発や三江源等の自然環境資源を背景とする面的観光開発は未着手である。よって、進行中の環西寧圏観光開発を青海省観光のゲートとして整備し、次のステップとして連携のとれた点的・線的な観光開発へ展開する。

また、同計画では、観光拠点都市（西寧・ゴルムド・玉樹）、観光ルート、観光地区、そして重点プロジェクトなどに関する計画が網羅されているが、戦略的な開発の枠組みや優先順位付けが弱い。そこで、下記に示す戦略的な開発の枠組みを省観光開発に導入し、短期・中期・長期の段階的な開発戦略に沿った観光開発地域の優先順位付けを提案する。また、観光開発投資の効率と効果を最大限にしつつ、先行する環西寧圏の観光開発を周辺地域へと順次展開・拡大していくことを提案する。

##### (2) 開発の枠組みと優先順位づけ

###### **戦略的な点・線・面の開発方式の導入**

###### 観光市場需要に適応した開発地域・地区の戦略的優先順位付け

観光産業を省の基幹産業と位置付ける青海省では、大量の国内市場需要と国外の限定された市場のニーズに応じた観光プロダクトを開発・提供するため、限られた投資可能財源の中で効果的・効率的な観光プロダクト開発が課題である。そこで、以下のような戦略的優先順位を取り入れる。

- 面的開発（環西寧観光圏）：基盤投資が進んだ大量誘客に対応できる地区を対象
- 線的開発（青蔵ルートなど）：隣接省・自治区と連携した広域観光回廊など
- 点的開発（玉樹など）：敏感な自然生態・民族文化を志向する小規模・特殊市場対応

###### **戦略的な段階的な開発方式の導入**

###### 開発優先地域・区内での資源開発優先順位

線・面的開発等、中・大量規模の観光客誘致を目指す地区では、域内の優れた潜在資源の観光開発・利用が優先されるべきである。ただし、観光客の選択の幅を広げるためには、自然<sup>41</sup>や歴史・文化、民族・宗教等の観光活動の多様性を高めるための優先開発資源選択の視点が必要となる。

<sup>41</sup> 山・平原・峡谷・氷河等の地形や植物・鳥・動物等の生態

### 3.4.2 インフラ開発課題

#### (1) 潜在需要や道路整備計画に見合った戦略的観光ルート整備

「2.1.4 インフラ」で既述したように、観光の5大ルートに当たる地域間幹線はほぼ整備が完了したと言える。今後の課題は、それらのルートをいかに需要に対応したプロダクトとするか、そのためにはどのような拠点やルート沿いのインフラ整備が必要かということである。また、この5大ルートのほとんどは、青海省旅遊業發展与布局総体計画の中で周辺省・自治区との連携が強調されている。しかしながら、実際上の問題として、例えば西寧とラサを結ぶ世界屋根ルートは1,890kmもあり、自動車でも1週間という大旅程となる。唐蕃古ルートも同様の旅程が必要であるし、シルクロード南ルートやマルコポーロルートなどはさらに長い旅程を要する。このようなプロダクトは特殊な客層には支持されることはあるが、それほど多くの需要があるとは考え難い。一般に、ルート上の各省・地域での特徴ある整備によって観光拠点が点として整備され、それらが繋がって線上に広がり、最終的には面的な観光地域・ルートの全体像が形成されていくという発展形態がある。この観点、及び現在の観光資源や拠点、道路の整備状況から、西寧市を中心とした環西寧圏は面的な整備、青蔵鉄道が開設される西寧～ラサを結ぶ世界屋根ルートなどは線的な整備、空港が整備される玉樹は点的な整備ポテンシャルを有していると考えられる。

特に環西寧圏に関しては、青海省への今後の観光客の需要に見合ったプロダクト開発として、大量の観光客の受け入れに対応でき、かつ短期間(2-3日間)で周遊できるコンパクトな観光ルートの形成が課題となる。この場合、現在計画されている道路計画の整備動向や観光資源の整備に合わせた実際的なルートを選定する必要がある。



図 3.4.1 面的・線的・点的整備地区



## (2) その他交通・インフラ施設の整備

### 水運

湖上交通と親水性スポーツ・レクリエーション活動は、青海湖における観光活動に多様性を確保する上で必要不可欠な要素である。しかし、青海湖は国家自然保護区に指定されていることから、湖水・沿岸の希少・貴重な野生生態系の保護が重要である。一方、内陸の流出河川を持たない陸封湖であるので、排水やゴミによる環境汚染に対して非常に敏感な状況に置かれている。港湾・船着場施設等の開発計画は、青海湖自然保護区の核心区・緩衝区内外に位置する沙島・海心山・鳥島・黒馬河の4地区では法的に容認されず、現状のままでは、緩衝区に隣接する実験区内に適地を探し、船着場・管理施設・待合室等に加えて下記の環境対策施設の整備が提案できる程度である。また、湖上交通には徹底した環境汚染対策が求められ、船舶上で発生する汚水・排油・ゴミの全ては、遺漏のないよう港湾施設に汚水と排油回収パイプを整備し、全て地上に回収・処理する事が必要である。同様に、給油施設についても同様の厳しい環境基準の適用を受けると判断される。沖留めする大型のクルーズ船に対応した港湾施設整備が予定されておらず、これらの船舶の営業については別途の観光汚染対策が必要となる。

### 給水施設

特に青海湖151基地において、25号線付近の既設井戸からの水量(1,500トン/日)では将来水不足となる。短期で整備が必要とされるホテルの室数、及びレストランその他観光施設の規模から推定すると、2010年までに少なくとも約3,000トン/日の水量の確保が必要となる。周辺の水源に関する情報がないが、地域でのヒアリングによると、江西溝郷には十分な水量が確保できる可能性がある。水源の確保や既存の給水施設の増設は、鳥島、青海湖沙島、カンブラなどでも必要となる。

中長期間で宿泊施設集積が3,000室を超える規模にまで拡大する観光拠点においては、サービスタウンの整備などに伴い、人口増加に伴う水需要も含む給水システムの整備が必要となる。一方、集中的な地下水利用による周辺環境への影響に配慮しつつ、水源の分散開発や付近にある大規模河川の河川敷の伏流水を開発・利用するなど、環境と調和する新たな水源開発が必要となる。

### 汚水処理施設

観光施設の整備計画地は、自然公園や森林区、湖、河川などの自然資源が豊富で、その保全が重要となる地区が多い。したがって、観光施設からの汚水・排水には十分な配慮が必要である。中でも、近年湖水の汚染が進んでいる青海湖では、その汚染源の大部分が牧畜や農業による面的な汚染によるとの報告がある。観光拠点は湖岸に位置することから、国が定める水質基準・排水基準に見合った適切な汚水・排水施設を整備する必要がある。

### ゴミ処理施設

今後の入込みの増大と施設の拡充に伴い、環境保全と美観保全の観点から、ゴミ処理施設の整備を各観光拠点で適切に進める必要がある。

### (3) 観光情報インフラの充足

観光客への情報提供という点でも大きな課題がある。青海省旅遊局のウェブサイトが開設されたが、そのコンテンツはまだ改善の余地があり、州や県の旅遊局との共同の情報整備活動も少なく、航空会社、鉄道会社、旅行代理店など関連企業も個々に情報提供を行っている状況である。西寧やゴルムドといった中心都市でも観光情報を容易に得られる観光案内所がなく、観光関連情報の入手が難しい。市内観光でも地図や案内がほとんどない状態である。これら観光情報を提供するシステム・設備・インフラの整備が課題であり、観光関連情報の具体例として下記を挙げる。

- 観光地情報（観光資源の紹介、位置、アクセス、施設・設備内容、料金、利用状況、季節的魅力、注意事項など事前に入手したい情報）
- 道路・交通情報（道路工事、陥没・亀裂・落石、交通事故、積雪などによる通行禁止・制限、天気などの情報）
- 同様に、羊・ヤクなどの通過箇所や近辺の農民の耕運機や馬車の通過箇所などの情報
- 観光ルート上にある都市名や町名の標示
- 西寧など主要観光都市での観光地図や街区設置型マップ、バスルートマップなど
- 森林公園、寺院などにおける観光客マナー情報

#### 3.4.3 観光資源開発課題

青海省の観光資源が持つ特性と利用の現状は、固有性、多様性、敏感性の3つにまとめられる。これらの特性と現状から導き出される課題は次の4つである。

- 観光資源固有性の活用
- 観光資源多様性の活用
- 敏感な観光資源の保全
- 観光資源利用環境の改善

##### (1) 観光資源固有性の活用

国内観光市場の急成長に伴う中国西部地域の他観光地との競争激化の中、旅行パッケージにおける観光目的地としての青海省の認知度は、現在のところ低い水準にある（「3.3 観光産業開発課題」参照）。しかし、青海省観光資源の固有性は観光プロダクトとして利用価値が高いものであり、国内外にその固有性と存在をアピールし続けることが必要である。

- 景観の活用：特に、自然・景観系の観光資源は拠点都市である西寧市から遠距離にあり、大多数を占める国内訪問客にとって日程上訪れることが困難である。しかし、景観は観光資源まで到達できなくても、移動中でも比較的簡単に楽しめるものであり、観光ルート整備に合わせて雄大な景観を見ることが出来る時期や場所を積極的にアピールする。
- 科学的価値・希少性の活用：世界、あるいは中国で唯一無二といった歴史的・科学的希少価値を積極的にアピールする。
- 省内の観光資源をいかに守り、維持しているかをアピールする。

## (2) 観光資源多様性の活用

多様な観光資源を活用するには、これらを組み合わせた観光プロダクト（観光ルート）作りが課題となる。青海省では既に7つのテーマ別観光ルートが設定されている。しかし、実際の国内客の平均的な旅程では、2泊3日での青海湖（青海湖151基地、鳥島）、日月山、タール寺、互助土族民族村が主要観光プロダクトとなっており、7つの観光ルートは未だ開発途上にある。

- エクスカーション：短期的には重点整備地区を設定し、短い滞在期間でも効率良く周遊できるルートを設定する。西寧市は青海省の玄関口であり、インフラ状況が良い。また、その周辺地域には自然・景観、歴史・文化、民族・文化、その他産業・レクリエーションなどの観光資源が近距離に立地しているため、多様な観光資源を組み合わせたエクスカーションが可能である。
- 省内サーキット：省内のサーキットでは、西寧を起終点とする環青海湖観光ルート、あるいは黄河上流碧水丹山観光ルートと民族宗教文化観光ルートも同様に周遊が可能である。ただし、各サーキット上には西寧市以外の宿泊拠点を設定しなければならない。また、自由旅行でも周遊可能なように、各観光地や県が当該地だけでなく他地域の紹介・情報を提供し、それぞれが協力・補完しあうことが重要である。
- 地域間ルート：短期的には、観光客が多く訪れている近隣省・自治区とのネットワークも有効である。世界屋根探検観光ルートでは、チベット自治区との協力協定を強化した青蔵鉄道開通を機に共同プロモーションの展開、唐蕃古道観光ルートはチベット自治区や四川省、南シルクロード観光ルートは甘肅省と新疆ウイグル自治区、またマルコポーロ観光ルートは新疆ウイグル自治区との連携の強化が必要である。黄河上流碧水丹山観光ルートと民族宗教文化観光ルートでも、甘肅省とのネットワークを整備することができる。これらのルートに関する他省との共同キャンペーン、あるいは自省の来訪者に他省を紹介するなどの共同プロモーションを進めるためには、従来から開催されていた西部地域隣接省・自治区旅遊局との協力・調整会議を定期化する必要がある。
- 長期的には、唐蕃古道観光ルートから青海省の果洛州や玉樹州、四川省の九寨溝へのルート、あるいは唐蕃古道観光ルートの東部と南部を含む四川省・雲南省・チベット自治区、及びインドシナ諸国までも含む国際的な大シャングリラとの連携ルートを一層アピールしていくことも重要である。これらの観光ルートは、数は多くはないものの、現在でもヨーロッパからの観光客を中心に客単価の高い一定の観光客を確保している。このような自治体・国境を越えた一つのチベット文化圏・生態圏を一つのルート（開発単位）にすることは、テーマ性が高い上に観光資源の多様性が利用でき、観光客の選択肢を増やすことができる。

## (3) 敏感な観光資源の保全

青海省の観光資源は、その山岳性・高原性の地形・気候から多様で希少な固有動植物が多く生息し、観光資源としての質が高い。その反面、元来外部要因に敏感な自然環境資源であり、過去半世紀にわたる入植促進と農・牧畜振興政策によって深刻な資源劣化や一部地域における自然崩壊の危機に瀕し、現在も過耕作・過放牧による資源劣化が進行中である。また、多様な少数民族の伝統的生活文化も観光資源としての質が高く、将来の観光プ

ロダクト開発の重要な要素として期待されるが、生活の近代化や都市化等の影響を受け、新しい生活スタイルの定着と共にその固有性・伝統性が喪失されつつある。青海省固有のこれらの観光資源を国内外にアピールし、多様な観光資源を組み合わせる持続的な観光利用を進めるには、観光資源のプロダクト価値・質を維持しなければならない。そのためには、以下のような自然、及び社会的な観光資源の保護・保全と同時に再生策が不可欠となり、観光利用と保全のための観光資源管理の計画・方策が必要である。

- **自然環境資源の保護・保全**：観光開発による自然環境への負の影響の防止は言うに及ばず、林業局が進めている退耕還林・還草事業、自然保護活動、水源涵養林の造林、森林公園の指定・保護・保全等の事業の強化・徹底による自然環境資源の保護・保全と回復が課題である。また、より総合的かつ効率的な環境管理体制を整備し、地域の誇る自然観光資源の回復も課題となる。
- **伝統的民族文化の保護・再生**：各民族の生活は、社会開発・近代化による新しい生活スタイルの普及や都市化による生活の画一などによって、伝統的な生活文化や習慣が徐々に薄くなってきている。現在、民族・宗教庁と旅遊局が実施している各民族語の伝統歌謡や芸能グループ育成策の拡充、民族・文化観光開発スポットとして選定した地区の伝統的な固有の生活文化の再生支援と保護、観光収入による持続的なシステムの確立が課題である。

#### (4) 観光資源利用環境の改善

- **観光資源の維持・管理計画と対策の整備**：過剰で無秩序な観光資源利用を管理しなければならない。自然・景観、歴史的建造物や歴史的遺跡など、損傷したものは修復し、維持・管理する必要がある。しかし、寺院などの宗教施設は生活する僧侶や参拝する信者が主体であるため、建造物の修復には民族・宗教庁による財源確保に限界があり、観光利用のための維持・管理についても困難な面が多々ある。例えば、タール寺や隆務寺では、建物や通路の改修にコンクリートやタイル、鉄パイプといった現代の建材が使用されている。また、寺院内には僧侶の現代風の生活風景が感じられる。これらは観光資源価値を低める要素であるが、予算の確保、厳しい気候下での安全性の確保のためには、やむを得ないことかもしれない。しかし、観光利用する上で観光プロダクトとしての価値を高めるためには、観光資源環境を伝統的な手法・材料で改善・修復することが重要課題であり、入園料や拝観料の施設補修・維持費への有効活用や収入の管理も課題となる。
- **来訪者の管理**：環境資源開発と同じく、過剰で無秩序な利用も管理する必要がある。これは、観光資源の損傷を防止するとともに、来訪者の満足度を高めるためにも必要である。直接的な規制策としての人数制限や活動規制・監視、間接的な規制策としての入園料・拝観料設定など、保護・保全対象に重要性や特性に応じた複合的な管理方法の導入が課題となる。

なお、インフラ開発や観光資源開発には比較的大きな投資が必要であるが、青海省における資金調達に係る課題として以下の3つがあり、今後有効な資金調達方法を検討していく必要がある。資金調達方法については、「第11章 資金調達方法の拡大」にて具体的に記述する。

- 早創段階にある資金調達方法（内部留保がほとんど無く、公的資金調達も少ない）
- 観光セクターへの小さい投入金額
- 民間投資・外国資本投資にとっての青海省観光の低い魅力

### 3.5 人材育成と組織・法制度整備に係る課題

#### 3.5.1 人材育成課題

本節では、開発課題に先立ち青海省観光業における将来の人材需要について述べる。その後、人材育成に関する開発課題を挙げる。

##### (1) 将来の人材需要

「3.1.2 観光需要予測」にて記載の通り、青海省への旅行者数は2004年から2010年で92.3%増加し、2010年には984.9万人に達すると見込まれる。観光セクターにおける将来の人材需要を2004年の観光セクター従業員数2.5万人を基準とし、以下の仮定で算出する。

##### 【人材需要算出の仮定】

- 2005年 - 2008年：前年度従業員数 × (1 + 旅行者数増加率)
- 2008年 - : 前年度従業員数 × {(1 + 旅行者数増加率) / (1 + 旅行者一人当たりの出費伸び率)}

2008年までは、必要となる従業員数の増加率を「3.1.2 観光需要予測」で予測した旅行者数の増加率と同率とみなす。2008年以降は、後述の施策などにより従業員一人当たりで対応できる旅行者数が増加するとしてセクター効率上昇分を考慮する。ここでは、旅行者一人当たりの出費伸び率をセクター効率上昇率と仮定する。

ここで、将来必要とされる青海省観光セクターでの人材数は表3.5.1のとおりである。2010年は4.5万人、2004年から2010年の間に2万人の増加となる。その後は、観光客数が漸増になると同時にセクター効率が上昇する為、セクター従業員は2010年4.5万人から2020年5.2万人と7千人の増加に留まる。

表 3.5.1 青海省観光業人材需要予測

年	旅行者数 (万人)	旅行者数 増加率 (対前年 度)	セクター総 収入 (億元)	従業員数 (万人)	旅行者一人 当たり出費 (元)	旅行者一人 当たりの出 費伸び率 (対前年度)	従業員一人 当たりの旅 行者数(人)
2001	373.8		13.3	1.6	356		234
2002	422.4	13.0%	15	1.9	355	-0.2%	222
2003	396.1	-6.2%	14.6	2.2	369	3.8%	180
2004	512.1	29.3%	20.2	2.5	394	7.0%	205
2008	830.7	22.7%	38.3	4.1	461	6.5%	205
2009	900.0	8.3%	42.6	4.3	473	2.7%	210
2010	984.9	9.4%	48.0	4.5	487	3.0%	217
2020	1,202.0	1.8%	62.7	5.2	522	0.6%	232

この需要数を「2.2.4 人材育成」にて示した青海省観光業の人材規模の部門別、ポジション別に検討する。

### 部門毎の人材需要

上記部門のうち、ここでは宿泊施設、及び旅行者（観光ガイドの一部を含む）の人材需要数を算出する<sup>42</sup>。

宿泊施設における人材需要数は、「8.7 観光関連施設とインフラ計画」において算出する宿泊施設開発需要を基に検討する。なお、同宿泊施設開発需要は環西寧圏における数値であるが、この値は「3.1.2 観光需要予測」の青海省全域を対象とした将来需要予測を基に策定されている為、本項では青海省全体の宿泊需要として利用する。

#### 【需要人材数算出の仮定】

- 2010年における宿泊施設需要は40,000室であり、その内訳は星級ホテル32,600室、コンドミニアム450室、民宿5,450室、テント1,500室である。
- 星級ホテルの一部屋当たりの従業員数（従業員率）は、2002年1.24である。2010年の従業員率は、2008年以降、同年の旅行者一人当たり出費率（2008年6.5%、2009年2.7%、2010年3.0%）に応じて減少すると仮定すると、以下の通り1.10となる。  

$$2008年： 1.24 / (1 + 0.065) = 1.16$$

$$2009年： 1.16 / (1 + 0.027) = 1.13$$

$$2010年： 1.13 / (1 + 0.030) = 1.10$$
- 星級ホテル32,600室のうち1,825室が社会旅館からの星級登録であるので、その分の従業員率は2002年の実績に基づき0.54と仮定する。
- コンドミニアムは、星級ホテルよりもレストラン等の人材を減らす事ができるため、従業員率は星級ホテルよりも3/4低い0.82とする。
- 民宿（5,450室）の従業員率は2002年の実績値0.21を利用する。
- テントの従業員は統計が未整備で実態が不明であることから、人材育成対象としない。

上記の仮定を元に人材需要数を以下の通り算出する。これは、2010年における人材需要の80.7%を占める。

- 星級ホテル： 30,775室 × 1.10 = 33,852人
- 社会旅館から移行した星級ホテル：1,825室 × 0.54 = 986人
- コンドミニアム： 450室 × 0.82 = 369人
- 民宿： 5,450室 × 0.21 = 1,145人
- 合計： 36,352人（約36,350人）

旅行者とその他部門の人材需要は、2004年における既存数の比率1:2を利用すると、それぞれ約2,880人と5,770人である。2010年における需要数、表2.2.19にて示した既存数、及び不足数をまとめると、以下のとおりとなる。宿泊施設部門に特に多くの人材が必要になる事がわかる。

<sup>42</sup> その他の部門は、人数が少ないか未発達の為ここでは記載しない。

表 3.5.2 観光業人材の部門別需要（2010年）

部門	需要数（人）	既存数（人）	不足数（人）
宿泊施設	36,350	17,500	18,850
旅行業者	2,880	2,500	380
上記2部門以外 （その他）	5,770	5,000	766
合計	45,000	25,000	20,000

**ポジション毎の人材需要**

青海省におけるポジション別の人材需要の割合を2010年にも適用すると、各ポジションで必要となる人材需要数は次表のとおりとなる。

表 3.5.3 ポジション毎の人材需要（2010年）

ポジション	割合	需要数（人）	既存数（人）	不足数（人）
現場担当者	80%	36,000	20,000	16,000
現場監督者	15%	6,750	3,750	3,000
責任者	4%	1,800	1,000	800
経営者	1%	450	250	200
合計	100%	45,000	25,000	20,000

**（2）開発課題**

人材育成に係る開発課題としては、以下の3点を挙げる。

**観光業に携わる人材の不足**

前項で述べたとおり、急激な旅行者数の増加に伴い2010年までに45,000人の観光人材（2004年の1.8倍）が必要になる。部門毎では特に宿泊施設（36,350人）、ポジション毎では現場担当者（36,000人）が特に必要となる。

また、前述のとおり、観光ガイド証保有者（2002年において約2,100人）のうち半分以下しか実際には勤務しておらず、観光ガイドの人材不足が問題となっている。この原因としては、青海省の観光は季節差が大きく観光ガイドの恒常的な雇用が難しい、別の職種への転職、学生であるなどが挙げられている。

**教育機関による育成数とポジションのミスマッチ**

前述のとおり、ポジション毎の人材需要は、現場担当者と現場監督者で95%を占める。2010年の責任者・経営者ポジションの新規需要は1,000人であるが、本科定員が現在から変更がないと仮定すると、新規卒業者は170人/年×6年（2004年 - 2010年）=1,020人である。現場監督者などからの内部昇進も考えると、本科卒業者の全てが経営者・責任者ポジションに就くのは難しい。これに対し、現場担当者の新規需要は16,000人であるが、中専の新規卒業者は700人/年×6年=4,200人に留まる。

このように本科の定員が比較的多いのは、給料の違いなどにより高いポジション（責任者・経営者）の希望が多く、現場担当者・現場監督者ポジションへの希望が少ないためである。しかし、責任者以上のポジションは限られている為、大学の観光関連学部を卒業し

ても給料と業務に見合う仕事がなく、観光以外の業種に就職する問題を引き起こす。現場担当者を希望する学生が少ないため、定員割れになっている職業学校もある。

#### **観光人材の専門分野における知識不足**

観光業は他の業種に比べて労働集約型産業の色合いが強い。観光業の質、及びセクター効率を高める為には、人的資源の質の向上が最も効果的であると言える。しかしながら、青海省における観光人材の質は、十分であるとは言えない。

多くの関係者から、ホテル等の従業員におけるサービス意識の低さが指摘された。考えられる理由は以下の通りである。

- 観光業における研修は限られているため、従業員が研修によりサービスに対する意識を高める機会が少ない。
- 観光関連の職業学校、大学出身者の割合が低い。
- 観光関連の職業学校や大学の教師の中で実戦経験のあるものは少なく、理論に偏っている。また、インターンシップの多くは青海省のみで行われているため、観光先進地での高品質なサービスを学ぶ機会が少ない。

また、観光ガイドのレベル向上も必要である。観光ガイドはその経験、及び知識により初・中・高・特級の四段階に分かれているが、青海省においてガイド証保有者（約 2,100 人）のうちほとんどが初級ガイド（約 90%）であり、中級（約 220 人）、高級（4 人）、特級（0 人）である。また、外国語でのガイド資格保有者は 295 名（英語 260 人、日本語 35 人）に留まり、チベット語のガイドも非常に少ない。

### **3.5.2 法制度・組織体制課題**

青海省観光開発を妨げる組織体制・法制度における課題として主に以下の 3 つを挙げる。

#### **(1) 観光業関連法規、及び実施体制の不備**

国家においては、消費者保護、観光ガイド等に関する各種法律の整備が行われつつあり、青海省でも青海省旅遊局政策法規部が中心となって観光業に係る法整備を図っている。しかしながら、急激な観光業の発展に法体系がまだ追いついていない。政策法規部は、各業界からの苦情があつてから法整備を進める事もある。特に、消費者保護に関して青海省独自に定めた条例・標準はない。これらの条例は、観光客が悪質業者の被害に遭うことを防ぐと同時に、サービスの質を担保するために重要である。

法体系が整っている場合でも、その制度の実施に問題が見られる。まず、青海省は面積が広く、地方の状況はそれぞれ異なるにも関わらず、それに応じた管理がなされていない。自治州・県では予算・人員が不足しており、法を実行する為の体制が行き届いていない。

また、行政手法上の問題も見受けられる。「事前の協議検討が不足したままトップダウンで指導が下され、またその指導が頻繁に変わることや、とりあえず実施して問題が起きてから考えるなどの行政手法上の問題が末端部分での事務の混乱を招いている<sup>43</sup>」という指

<sup>43</sup> [http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/sp\\_jimu/142\\_2/INDEX.HTM#1](http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/sp_jimu/142_2/INDEX.HTM#1) (2006/04/24 付)



摘がされている。さらに、制度実施時に表面的な目標達成に走り、その後の管理体制をどうするかといった長期的視点が欠落しがちである。

## (2) 旅遊局組織の能力向上に対する対応不足

民間が十分に発達していない青海省の観光業においては、旅遊局の能力向上は重要であるが、十分に対応がなされていると言えない。以下に、旅遊局組織における主な課題を述べる。

### 専門知識、及び研修の不足

省・自治州・県旅遊局内において観光を学んだ人材はほとんどおらず、職員の専門知識が不足している。局内の人数は法規において定められている事から、知識のある人材を採用する事は難しい。そして、職員の専門知識を向上させるための職員研修制度にも不備が見られる。省旅遊局内の職員研修は人事教育部が担当しており、国家旅遊局への派遣(6-7人)、先進省市自治区との交換研修(1-2人、4-6ヵ月)、業務関連の研修等がある。しかし、業務に関する研修を省旅遊局で行う事は少なく、他庁・局など主催の勉強会の通知が届いてから初めて派遣を検討するなど、計画性が乏しい事が多い。

### 環境保全対策に対する対応不足

景観区や歴史・文化区における観光開発計画や施設建設設計には、環境保全計画・対策の提出、及び承認が義務付けられている。しかしながら、旅遊局内において、計画・設計に必要な環境保全対策の経験や能力、また環境保全対策に対する認識が不足しているため、十分な対応が取れていない。このため、自然・景観や歴史・文化遺産との調和に欠ける整備、大規模な道路整備による自然景観の破壊、不適切な老朽施設が撤去されないといった問題を引き起こしている。ごみ・汚水の処理施設整備や運営体制の不備により、歴史・文化地区内にゴミが散乱し、排水が路上にあふれるなどの問題が発生している地域もある。

## (3) 旅遊協会の活動不足

最終的に観光客を受け入れてサービスを提供し、対価を受け取るのは主として民間の業者であり、観光振興とは観光業者の振興に他ならない。しかし、個々の観光業者自身では出来ないことも多々あり、インフラ整備や許認可など政府にしか出来ない業務もある。また、その中間の旅遊協会が担当することが最も効率的な業務もある。これら3つの組織それぞれの強化を図らなければならないが、それぞれの役割について明確な認識が必要である。

現在明らかにされているように、青海省の観光開発が政府主導で行われる時期にある場合、政府の政策実施の効率的な伝達機関としての旅遊協会の存在は重要である。しかしながら、前述のとおり、旅遊協会は設立して10年以上経つものの、現在の主な業務は視察や雑誌の発刊であり、大きな権限を持っていない。大きな活動資金源である会費も現在ほとんど徴収をしていない。



## 第4章 観光開発基本戦略

### 4.1 全体戦略

#### 4.1.1 本調査のアプローチ

青海省の自然は省内の観光にとって最重要資源でありながら、標高が高いこともあり人間活動に極めて敏感である。そのため、青海省においては観光開発計画と環境保全を同時に推進することが不可欠である。また、観光収入の源である観光客は、青海省と中国国内の他省市自治区、及び海外と比較して青海省の観光を評価するのであり、需要、すなわち観光客が何を望んでいるのかを的確に捉えて対処することが必須である。そうして観光客に売れるものとして観光資源やサービスをパッケージ化したものを観光プロダクトと称する。これらの要素は互いに関連しあって発展、あるいは衰退するものであり、これらに総合的に関連する人材育成と法制度・組織整備、資金調達方法の拡大が重要となる。

本調査では、これら「3つの要素（環境保全、観光需要、観光プロダクト）の最適な組み合わせ」を観光開発基本戦略策定のアプローチとして採用する。その中で、人材育成と法制度・組織整備、資金調達方法の拡大も重要要素として取り上げる。これは、将来のある一時点の目標を予め設定し、それを様々な関連要素に分けて必要な施策を策定するアプローチとは異なるものであり、今までの青海省における自然の衰退経緯の考察から、このアプローチが必要不可欠であると考えられる。

また、単に目標を示すことよりも、誰が何をすれば全体として好ましい方向に進むのかを具体的に示すこととする。誰が何をすべきかが明確な計画とすることで、担当者が直ちに実施作業に入れることを目標とする。急激に変化する中国社会経済の中では、将来の姿へ到る道筋を一つ示して施策を計画してもたちまち現実と乖離してしまう可能性が高い。むしろ、各時点で最良な調整ができる体制をとることが大切である。

図 4.1.1 に、上記のアプローチを模式的に示す。

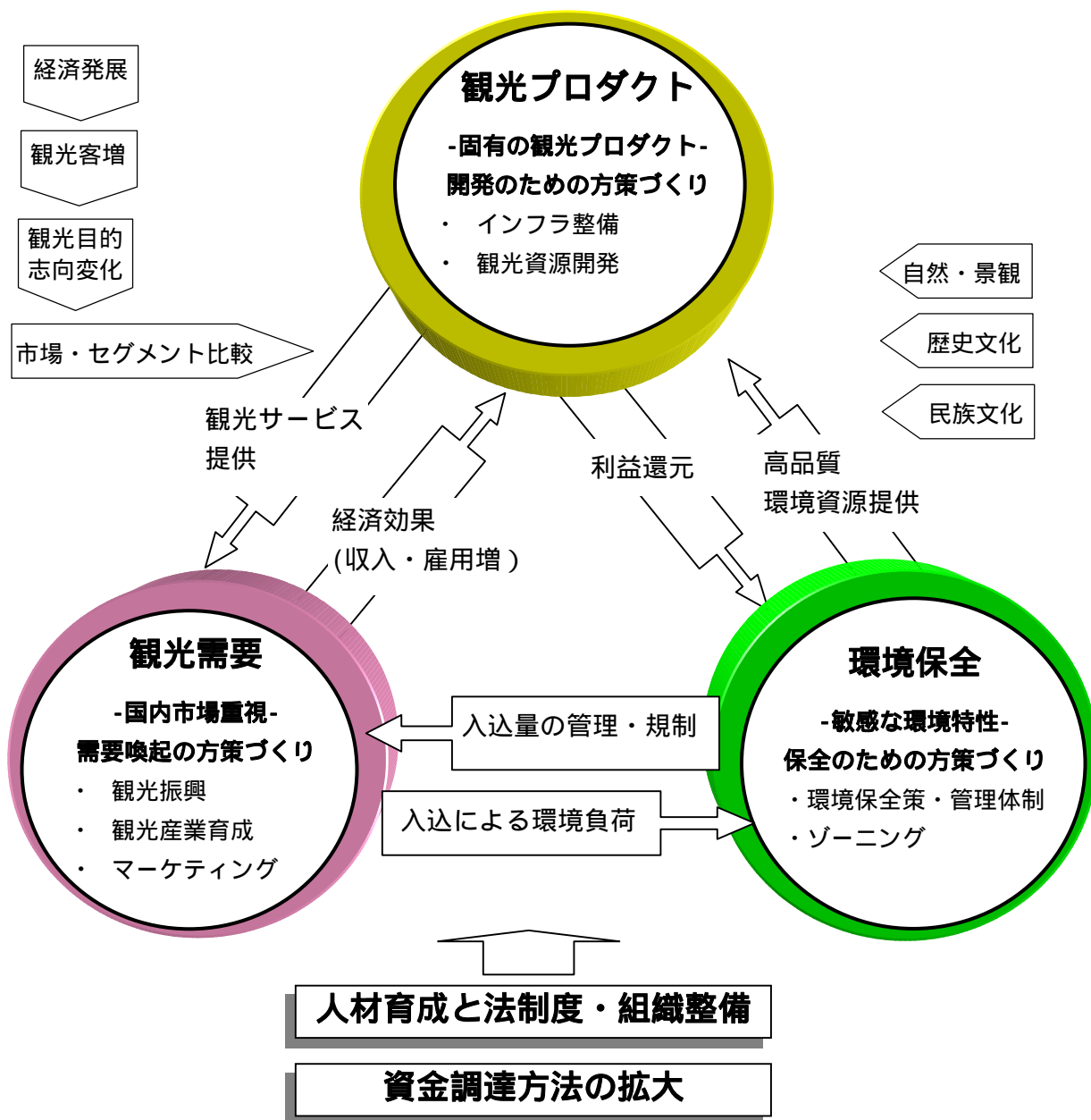


図 4.1.1 本調査のアプローチ

#### 4.1.2 全体戦略

青海省観光に係る課題、及び前節で示したアプローチを踏まえ、青海省の観光開発における6つの全体戦略を選定した。

- 環境管理と観光振興の融合
- 市場別施策、及び対外連携策の推進
- 観光重点地区と重点項目の戦略的整備
- 観光産業の競争力促進
- 人材育成と法制度・組織整備の推進
- 資金調達方法の拡大

### **(1) 環境管理と観光振興の融合**

青海省の最大の観光資源である自然は、人間活動によって多くが損傷している。しかし、青海省全体としては自然損傷への観光活動の影響は極めて限られ、むしろ観光以外の人間活動の管理を要望する立場にある。しかし、観光地として限定された地区では、観光活動の管理がなされて初めて持続的な観光振興が可能となる。いずれの場合でも、環境管理と観光振興は常に連関させて計画・実施されねばならない。

### **(2) 市場別施策、及び対外連携策の推進**

今後も極めて堅調な観光客の増加が見込めるが、市場は常時変化している。青海省における圧倒的な国内客の比率はさらに高まると想定されるが、来訪観光客の主流が近隣の省市自治区から東部沿海地域の省と直轄市となっており、この傾向は今後強まると思われる。東部沿海の先進地域の観光客は要求水準が高く、観光プロダクトもそれに応じた変化が求められる。近隣省市自治区との連携強化による相乗効果も狙うべきである。

### **(3) 観光重点地区と重点項目の戦略的整備**

観光開発は総花的に薄く広く展開したのではプロダクト価値の向上を望むことはできず、重点を定めて段階的に実施すべきであり、点から線、線から面へと拡大することが必要である。現時点から計画期間を考えるなら、地区ごとに点、線、面のどの開発が適切であるかを設定することが可能である。全体に適用される基礎的な項目についても、戦略的な開発が望ましい。

### **(4) 観光産業の競争力促進**

青海省の観光産業の水準は他の観光先進地域と比較して低く、観光産業の競争力を高めることが必要である。サービス水準を向上させるとともに、産業市場の条件なども改善することが求められる。

### **(5) 人材育成と法制度・組織整備の推進**

青海省観光における人材育成は、急激なマーケットの拡大に伴う要求水準の高度化に追いついておらず、観光関連法制度・組織も広範な整備と改革が必要な状況である。現在、また今後の計画が遅滞なく実施されるためには、人材育成と法制度・組織整備が不可欠である。

### **(6) 資金調達方法の拡大**

中央政府に対し、国債プロジェクトの代替として新たな資金確保のスキームを働きかけることが必要であり、また対口支援、西部大開発支援策、民間資本、外国資本、国際金融機関など、様々な資金調達方法を検討すべきである。

## 4.2 環境保全戦略

### 4.2.1 環境保全施策と管理体制

青海省の自然環境は、敏感な生態系であるにもかかわらず人間活動により過剰利用されてきた。過放牧、過剰伐採、過剰耕作などに対し、退牧還草還林などの生態環境建設の手法が有効な技術的基盤となるが、豊かな緑の中での放牧風景もまた一つの観光資源である。また、地域の農牧民は森林公園や自然保護区設立のはるか以前から放牧畜産を営んできており、できる限り自然環境保全、及び地域社会と共存・共栄する持続的な観光開発が必要である。景区の自然環境を適切かつ着実に保護・保全するためには、行政部門間の連携に加え、地域社会と住民の組織的な観光と環境管理への参加が求められる。

#### **過剰利用の規制・制御**

自然資源を回復させる基本は利用抑制である。青海省では、伝統的に季節的な移動放牧によって天然草地への利用圧力を制御してきた。しかし、過放牧の場合には放牧頭数を縮小し、草地の利用期間を短縮する必要がある。全体的に草地の利用期間を短縮し、草地を回復するための休閑草地を確保する。その際、牧柵の設置は利用と休閑を計画的に実施するために有効である。

過放牧で劣化した荒草地に対する措置が退牧還草であり、荒草地を禁牧にし、草地が自然回復するまで利用を停止する。その期間は2、3年間で、大きな効果がある。過剰利用で劣化が激しい草地に対しては、利用規制とともに積極的な人為による草地回復・育成栽培が必要となる。急傾斜の放牧地に人工造林を実施する場合には、防護柵で造林した幼樹を守り、護林員のパトロールで放牧を監視して森林を再生する必要がある。

#### **関係諸機関の連携と景区環境管理官の設置**

景区の環境保全策には、旅遊局と環境保全担当部局が連携・協力した積極的な対応が必要である。カンブラ国家森林公園では、州、県の下、観光開発を促進する機関として旅遊局、林業局、地元郷鎮人民政府の3者が参加する組織が作られている。そのような組織の下で緊急に求められるのが、景区の環境保全を担当する景区環境管理官の機能である。景区環境管理官は景区内の環境保全を担当し、観光と環境の融合的な開発・発展を推進することで観光発展と環境保全との好循環を作り出し、景区の美観を保護して維持する。景区環境管理官は以下の業務を担当する。

- 景観管理（景区内の植生管理、施設の自然景観との調和）
- 生物多様性保全のための域内パトロールや保全措置の実施による生態系保全
- 自然環境情報の提供（ビジターセンターやガイド養成研修）
- ゴミ、水質、大気、騒音等の汚染管理

#### **環境保全への地域社会・農牧民の参加**

景区内の環境保全には、過放牧など自然資源の過剰利用を行っている地域社会や農牧民に直接働きかける必要がある。そのためには、県や郷鎮より下部の村、組を単位とする地区環境整備事業体による観光農牧民組合などのような農牧民の組織化が必要である。これら組織に求められる作業は、景区環境管理官との共同パトロールが基本となる。景区環境

管理官がリーダーとなり、景区内の生態系を利用している農牧民と村、組が共同で草原、灌木、林木などを定期的に見回る。生態系の荒漠化（沙漠化や土壌浸食）の程度を判定してその効率的な回避策と回復策などを現地で協議し、保全技術を開発して実施する。景区環境管理官は、村や組のリーダーとともに荒漠化対策を実行するための具体的な計画を準備して推進する。

#### **観光開発と融合した環境保全**

地域環境の維持には、地域社会の主体的な取り組みが求められる。地域社会は、従来からの牧畜業を本業としつつ、観光という新たな地場産業開発を契機に、観光資源でもある生態環境の保全に共同で参画し、興味深い生態景観を観光客に提供する。その見返りとして、地域社会は観光産業からの収益を得て、環境保全の整備費用と新たな世帯収入を獲得する。そのような収入が地域社会のインセンティブ（励み）となれば、環境保全が観光からの収入を生むという、良好な連鎖と融合の創出が期待できる。

旅遊局と景区管理局は、農牧民組合などの地元組織と連携して環境保全を実施するとともに、観光開発事業の実施主体と連携して地元社会・住民の観光参画を支援し、農牧民の新たな収入源の確保が期待される。

#### **4.2.2 ゾーニング**

環境ゾーニングは、持続可能な観光利用・開発を進めるため、環境管理計画で分類した管理方法・手段の各々の対象地を明示することを目的とする。本件調査では地図情報システム（GIS）を活用し、既存の環境基礎情報の整理・分析から環境管理計画の分類の適用範囲（具体的かつ有効な自然環境の管理方法・手段）に至るまでの一連の流れを取りまとめた。自然環境保全に配慮した観光開発計画の策定は、ゾーニング結果を反映する事で可能となる。

#### **既存研究成果の活用**

これまでの各種の環境保全計画や法規制において、林地・草地保全、森林公園、自然保護区、荒漠化防治、重点保護野生動物、ラムサール条約指定など、広範な分野に及び重要な研究や対策が多数実施されており、これらの情報を GIS 上で整理して活用した。

#### **環境管理の一元化・実質化**

環西寧圏は広大であり、自然環境に係わる各担当部局の規制や執行は多岐に渡る。観光産業の持続可能な開発や生活環境保全のためには、観光産業関係者、旅行者、地元住民などのステークホルダーが環境管理を理解し、環境管理へ実際に参加することが求められている。そのため、自然環境に関する既存研究の成果からゾーニング結果を GIS 上で一元的に整理・明示することで、ステークホルダーが理解しやすくし、専門家と連携して自然観光資源の保全に参画できるようにする。

なお、ゾーニングの詳細内容については、第 5 章、付録 7、及び付録 8 にて述べる。

## 4.3 観光需要開発戦略

### 4.3.1 観光振興

近年の青海省観光の発展を当然のこと、また所与の条件とみなした「待ちの姿勢」では、これからの観光市場で勝ち残ることはできない。観光客を青海省に惹きつけ、呼び込む「攻めの姿勢」と積極的な売り込み・販売促進が必要である。ここでは、青海省の観光デスティネーションとしての認知度を高める戦略を示す。

#### (1) 旅遊見本市参加の戦略転換

旅遊見本市参加は、従来の旅遊局が省内旅行社と市場側旅行社間の取引便宜を図るパターンから、都市圏大市場の一般大衆（潜在観光客）向けに青海省観光を直接宣伝・売り込むパターンに重点を移す<sup>44</sup>。

- 省を代表する歌舞・音曲団の参加と見本市の常設演舞場での定時の歌舞・音曲ショーの提供
- 媒体宣伝（テレビ、雑誌、新聞など）の投入
- 近隣省市自治区（寧夏回族自治区など）との提携による共同キャンペーンの実施
- 媒体コストの低減と可能な範囲での省内・省外企業とのタイアップの導入（薬草・薬品、酒店、餐厅など）
- テレビ、雑誌、新聞記者、及び都市圏大市場の主要旅行社を対象とした視察・招待旅行の実施（無料招待の対価として放送・記事の無料掲載や旅行社パッケージ・カタログへの青海省ツアーの導入）
- 旅行社向けの省旅遊・セールス手引きと観光客向けの簡便な観光パンフレットの作成（省内・旅遊企業とのタイアップ - 旅行社、酒店、餐厅）

#### (2) 近隣省市自治区との連携・協力の強化

弱者デスティネーション連携の強化により、強者デスティネーションとの競争力・対抗力を強める。

- 現在ともにマイナーな青海省と寧夏回族自治区が連携し、西部地区での強者デスティネーションである雲南、チベット、新疆シルクロード、陝西・西安に負けない宣伝・販売促進活動の展開
- 省レベルの連携・協力による、需要先行の市場変化<sup>45</sup>の促進・強化
- 既存の省を越えた観光振興・宣伝連携構想への協力の積極化（大シャングリラ観光圏構想<sup>46</sup>の具体的展開、実現に向けての参加、協力など）

<sup>44</sup> 旅遊局に頼らなくて旅行社の自助努力で十分である。

<sup>45</sup> 西寧・銀川を結ぶ観光利便性の高い直通列車運行を契機とし、青海省・寧夏自治区間の観光客流動が増加している。

<sup>46</sup> 雲南省、四川省、青海省にまたがるチベット民族圏、その他少数民族圏を一つの大きな観光デスティネーションにするという構想



### (3) 大都市圏市場での青海省観光宣伝事務所の設立

観光宣伝事務所を大都市圏市場に設置し、観光宣伝活動、情報収集、観光業者との連携、媒体売り込みを図る。

- 観光宣伝事務所を大都市圏市場（例えば北京、上海、広東）に設置し、観光見本市参加などの観光宣伝活動はもちろん、「客源」市場内の情報収集、観光業者や各種宣伝・広告媒体との連携や売り込みの強化
- 観光宣伝事務所への専任者の派遣ないし雇用<sup>47</sup>

### (4) 祭典、行事、イベントの磨き上げ・高度化

「青海湖周回国際自転車レース」のように、省内の各種祭典・行事・イベントを他省市自治区からの観光客にも魅力のあるものに磨き上げ、高度化する。それによって青海省観光の認知度、魅力度を高める。そのためには、国内他省市自治区、特に観光先進地域（上海、雲南、香港など）のモデルとなる祭典、催事・イベントへ視察ミッションを派遣し、また省外の専門家を青海省に招聘するなど、観光先進地域から助言や指導を受けることが有益である。

## 4.3.2 観光産業育成

### (1) 旅行社乱立と過当競争の抑止、旅行サービスの向上

過当競争の日常化による問題点は旅遊局も認識しており、それが観光客に対するサービスの品質低下につながることを防ぐよう、様々な方法で旅行社の管理・監督の強化に努めている。下記に示すものは、「悪貨が良貨を駆逐する」ような事態を招かぬよう、良心的な旅行社が不当なダンピングを恐れることなく、良質の旅行・観光サービスを継続して顧客に提供できる環境整備する一つの試案である。

#### **苦情受け付け投書箱の設置**

観光サービスに係る苦情を受け付ける投書箱を旅遊局や観光拠点（空港、鉄道駅、バスターミナル、主要ホテル、観光地、デパートなど）に設け、これを広く告知する<sup>48</sup>。また、青海省観光・旅行訪問に関する簡略なアンケート用紙を作成し、設置した投書箱に常備する。観光客に記入してもらって投書箱に投函してもらうが、場合によって省内の郵送料を無料にするなどの措置を講ずる。アンケート用紙には、不満な点について記載するスペースの他、観光サービスや旅行体験の評価、再訪の意思などの質問も加え、今後の観光統計資料・データとしても活用する。

<sup>47</sup> 例えば、日本では大半の県が東京・大阪など巨大市場に県の産業・観光促進・宣伝連絡事務所を設置している。中国の主要な観光受け入れ省も、国家旅遊局の東京事務所とは別個に東京・大阪などに各自の貿易・観光促進・連絡事務所を設置している（河南省など）。

<sup>48</sup> このような旅行・観光の「苦情受け付け窓口」（投書箱）あるいは「困った時の相談ホットライン」（電話）を常設している観光先進国・都市は世界に多くある（例えば米国ニューヨーク市やペルー国観光省など）。

### 苦情内容によるペナルティ制の導入

苦情内容を集計し、苦情解決・処理に必要な然るべき対応策をとる。苦情内容の重大さに応じたペナルティ制を導入し、1 ヶ月、3 ヶ月、1 年ごとにペナルティ点数を累計する。そして、一定の点数ランクごとにペナルティとして課せる措置・処罰を定め、段階ごとに適用する（例えば、累計 10 点で営業停止 1 ヶ月、20 点で同 2 ヶ月、50 点で半年といった方式）。観光客の安全に関わるような重大なものについては、営業免許の停止や取り消しも含める。

### (2) 観光地付随の施設、設備、便宜、サービスの早急な改善と整備

「4.4 観光プロダクト開発戦略」における提案と一部重複するが、青海省の代表的な観光地の一つである青海湖鳥島を例とし、現在の観光地をどのように改善・整備していけば観光客が有意義な観光ができるようになるのか、具体的なステップを整理する。これらの改善、整備によって観光客の満足度が大幅に向上することは明らかであり、これは青海湖観光への評価、さらには青海省観光全体の魅力度とイメージを高めることにもつながる。

### アクセス道路の整備

- 舗装の改善（現況は整備が不十分、一部に波打ち、路肩の軟化）
- 県道分岐から駐車場までのアクセス道路沿いに、乾燥に強い低木・灌木の選択など環境に十分配慮した植栽・修景

### 駐車場の整備

- 現況の砂利敷きの舗装化
- バス、乗用車の区分マーキング
- モダン・清潔なトイレの新設（有料化も検討）
- 電気自動車大型広告板の移動（蛋島入口正面から現況トイレ側）

### 蛋島入口の改善

- 蛋島・鳥島を含む全体の案内図・解説掲示版の設置（多言語での表示）
- 蛋島・鳥島を含む全体の案内所の新設と訓練された案内・情報サービス員の配置
- 簡素・簡略な案内パンフレットの作成（簡単にコピー増刷できる一色刷り一枚もの）
- 蛋島アプローチ両側の鳥類案内板（小型）の更新・大型化（少なくとも現況の 4 倍）
- 蛋島展望台小丘下の建物（2、3 室のスペース）の小規模展示・資料室としての活用
- 蛋島展望台に固定・観察用望遠双眼鏡の設置（有料化も検討）

### 鳥島

- 電気自動車運転手を教育・訓練し、鳥島についての最低限の解説・案内を提供
- 鳥島下の保護区職員施設の移転、船着き場の改良・美化
- モダン・清潔なトイレの新設（有料化も検討）
- 小規模展示・資料室の新設、鳥島内の遊歩ルート案内板の新設
- 鳥島内のアクセス階段・遊歩道の改良、入口門構えの改良（現況は醜い）

- 遊歩道沿いの保護柵の更新（現況は維持・管理が悪く、雰囲気壊す）
- 主要観察スポットへの固定・観察用望遠双眼鏡の設置（有料化も検討）

### 4.3.3 マーケティング

#### （1）来訪客を満足させる観光商品にするための行動計画

満足度の高い観光体験を持った観光客は、多くの友人・仲間たちに楽しかった観光の思い出を語る。これは一般に「口コミ」と呼ばれ、口コミが最良かつ最も効果的な宣伝・広告手段であることは、観光業界や宣伝・広告業界でも良く知られている。下記は、青海省の代表的な観光プロダクトである土族民族村を例とし、どのように多くの観光客を満足させるプロダクトにしていくかの具体的試案である。

#### **観光先進地区への視察ミッションの派遣**

互助県、土族民族村、省旅遊局の代表者、及びその他関係者による視察ミッションを観光先進地域に派遣し、類似の観光プロダクト（例えば雲南省昆明の雲南民族村、広西チワン族自治区桂林の漓江民族風情園）の現況を視察する。運営関係者からプロダクト化企画、運営方法、施設維持管理、展示・演目企画（演出・歌舞・音曲・伝承行事・祭事）、技芸員の訓練、施設サービス従業員の訓練、営業・販売促進などについて仔細な聞き取り、学習を行う。

#### **外部の専門家・ノウハウの導入**

観光先進地域からプロダクト開発の専門家を青海省に招聘し、土族民族村の観光プロダクトについて忌憚のない評価を求める。可能な改善策に関する助言や提案、具体的な技術指導を受ける。

#### **新しい観光プロダクトの造成**

視察ミッションの派遣、外部の専門家・ノウハウの導入の結果、土族民族村の新しい観光プロダクトは先進地区と類似した形態、運営方式となる可能性が高い。それは大きな投資を伴う高度に集中した観光テーマ施設であり、そこでは学術的正統性に裏付けられた土族の歴史・文化、伝承芸能（歌舞、遊戯、音曲）が純正な形で、かつ包括的に再現・展示・上演される。この場合、現在の観光プロダクトに参画している家庭（家族）は、新たな観光プロダクトを支える従業員（サービス、技芸、営繕、営業、管理など）として雇用されることになるが、その際には十分な訓練・教育が必要となる。

#### （2）より魅力的な（購買欲をそそる）土産品・手工芸品の創出

「3.3 観光産業開発課題」にて既述したように、青海省の現在の観光土産品・手工芸品は魅力に乏しいものばかりである。より魅力的な土産品を創出するための具体策を下記に示す。

#### **観光先進地域への視察・学習ミッションの派遣**

省内の土産品・手工芸品の製造者と販売者、その他関係者による視察ミッションを観光先進地域に派遣し、どのような土産・工芸品があって品質・デザイン・包装はどうである

か、また製品化・商品化、展示、流通・販売、宣伝の方法や取り組みについて詳細な聞き取り、学習を行う。

#### **省外の専門家・ノウハウの導入**

香港や上海などの商品開発専門家、デザイナー、マーケティング担当者（土産品や工芸品の専門店・デパートなどの商品開発・仕入れ担当）を青海省に招聘し、現況の土産品・手工芸品の評価、その製造・製品化過程についての助言、具体的な技術指導、改善提案を求め、さらに商品開発可能性のある原材料の発掘とその商品化可能性について助言・指導を受ける。

### **4.4 観光プロダクト開発戦略**

#### **4.4.1 インフラ整備**

##### **(1) 重要観光ルートの整備**

インフラに係る基本戦略として、重要観光ルートの整備を挙げる。「4.1.2 全体戦略」で述べた点・線・面の観光重点地区の整備を促進するため、現在整備が進んでいる環西寧圏の道路ネットワーク、計画中の玉樹の空港建設、及び青蔵鉄道を戦略的に活用した新しい観光ルートの整備を提案する。

#### **短い滞在期間でも青海省の観光ブランドプロダクトを十分に楽しめるルート整備**

環西寧圏では、増加・多様化する観光客の需要に対応し、観光客の大部分と推測される1泊から2-3泊の観光客でも青海省の全体的な魅力を楽しめるようにする。そのため、コンパクトな複数ルートの設置や資源・拠点整備により、青海省のマスツーリズムの受け皿をつくる。このルートを巡ることにより、高原・草原・高山、黄河源流・ダム、チベット・少数民族・青海湖といった青海省の観光ブランドプロダクトを短い滞在期間でも十分楽しめるようにする。

#### **大シャングリラ構想の中心都市の一つとした玉樹の整備・美化とルート整備**

玉樹の空港建設に合わせ、短期滞在観光客に対応したコンパクトなルート・拠点整備を短期目標とする。中長期的な視点では、大シャングリラ構想の中心都市の一つとして町の整備・美化、及びルート整備を行う。また、四川省や雲南省、チベット自治区との広域的観光開発の組織強化、協同開発を通して、現在進められている草原考察ルート、チベット式民居考察ルート、民俗婚俗考察ルートなどの大シャングリラ構想の観光ルートとの連携を図る。

#### **西寧からチベット自治区に至るコリドー上の観光地整備**

青蔵鉄道の開通に合わせ、西寧からチベット自治区境に至るコリドー上の観光地整備を行う。西寧、青海湖沙島、剛察、天棚、烏欄、徳令哈、ゴルムド、塩湖、昆侖山口、唐古拉山などは国道25号と青蔵鉄道の駅の接点であり、鉄道・道路双方の客に対する観光サービス拠点の可能性を持っている。このような箇所に交通・観光情報提供施設や宿泊休憩施設、飲食・土産品店、医療サービス施設などを立地することが考えられる。

**地域性の明示**

各ルート上のサインボードや街路樹など、ランドスケープのデザインに配慮し、地域性を明確にすることが必要である。



図 4.4.1 大シャングリラ構想の観光ルート

## (2) その他交通・インフラの整備

### 黄河河川ルート整備

青海湖上の遊覧船・船着場の整備促進に加えて黄河の景観探勝を兼ねた河下り船の拠点整備を進め、道路ルートだけでなく、河川を利用して龍羊峡ダム下流から孟達にいたる観光ルートを整備する。同ルート上には新たに複数の発電用ダム湖が建設されており、起終点の龍羊峡ダム下流と孟達に川下りの拠点を形成し、途中の貴徳西部の新設ダム、李家峡ダム、公伯峡ダムには、ダム湖内とダム下流部にも各々拠点を整備する。各拠点には、上下する水位に対応するフローティング式の船着場、小規模な管理用施設・待合室に加え、カヌー・カヤックなどの黄河ラフティング・スポーツ・レクリエーションのための拠点機能として、用具を貸し出す管理施設と艇の離着岸用のスリップヤードを整備する。また、途中にある新設ダム・李家峡ダム・公伯峡ダムでは、ダム湖とダム堤下流の拠点間を結ぶ道路整備に合わせ、距離がある場合にはバス（乗客用）とトラック（艇用）の公共交通サービスを導入整備する。

### 汚水処理施設

既に汚水処理施設が整備されている青海湖 151 基地、鳥島、青海湖沙島などの地区では、観光客の増大に伴い汚水処理能力を高めていく必要がある。また、カンブラ、北山、仙米森林公園などの森林公園においては、新しく汚水処理システムを整備する必要がある。

### ゴミ処理

ゴミの管理・処理方法については、基本的には各拠点にゴミの小規模集積所・中継所を整備する。周辺の観光地や市町村を対象とした適地に、自治体が最終処分場として埋立地（サニタリーランドフィルが望ましい）と焼却炉を整備し、ゴミ収集車により定期的に運搬する必要がある。ゴミの分別、リサイクル、リユースなどを促進し、資源化・減量化を進める。同時に、観光客・観光施設運営者などに対する教育・啓発にも力を入れ、観光客が「ゴミを持ち込まない、捨てない、持ち帰る」マナーを身に付け、ゴミの発生量を減少させる。

## (3) 観光情報提供インフラの整備

観光客に重要な情報提供インフラを整備する。

### 観光案内所の設置

観光客の興味についてあらゆる情報を用意し、大勢の観光客が集まる拠点や主要観光都市（西寧市、ゴルムド市、玉樹県など）に観光案内所を設置する。

### 旅遊局のウェブサイトの改善

旅遊局のウェブサイトを改善し、観光情報提供システムを改善する。

### 道の駅など休憩施設を兼ねた情報提供施設の整備

青蔵鉄道の新駅を兼用するなどして、100km 間隔を基本として給油、飲食、買物、通信、休憩などに対応した施設、また観光情報、交通情報などを提供する機能を整備する。また、高山病の恐れがある地域ではファーストエイドサービス機構を設置する。

### サインボードの設置

主な観光ルート上の都市や町に出入口にその地名を表示し、同時にスピード制限などの方策をとって交通事故を予防する工夫が必要である。また、耕運機や馬車が多く通行する箇所、羊やヤクが通過する箇所においてもその表示が望まれる。サインボードは観光地として相応しいデザインとし、交通庁公路局との調整を必要とする。

### 通行不能などを知らせる情報システムの整備

道路工事、陥没・亀裂・落石、交通事故、積雪などによる通行不能、または通行が不安定な場合、電光掲示による道路標識やラジオ、道の駅などを通し、その情報を的確に観光客やそのコンダクターに知らせるシステムを整備する。

### 街区マップやガイドマップの設置

西寧市などの主要観光都市の街角に街区マップを設置し、観光名所を明示する。バス停やバス車内ではバスルートマップを掲載する。また、青蔵鉄道の主要駅前や車両内でもガイドマップを掲載する。

### マナー情報案内板の設置

カンブラ、大通、孟達植物保護区、互助北山などの森林公園などにマナー情報案内板を設置する（ゴミの放置・投げ捨て、衛生面、飲酒、立ち入り禁止、騒音、防火などに対するマナー）。

#### 4.4.2 観光資源開発

特に西寧市とその近隣地域では観光地へのアクセス道路の整備計画や事業化が進んでいるが、これらの道路整備では法面処理が不適切なため、自然景観の破壊が生じている所も見られる。また、既に観光開発・利用されている景観区などの建設・整備や管理・運営状況でも、タール寺や日月山における観光商店街の建設のように改善されつつ部分もあるが、整備は始まったところであり、観光利用による観光施設の劣化が改善されているとは言い難い。観光プロダクト化についても、第3章においてそのレベルの低さを指摘した。

つまり、魅力的な観光資源を有していても、その観光プロダクト化、開発・整備、維持・管理・運営の方法が不適切であるため、逆に魅力を減殺してしまっている。また、観光プロダクトとしての魅力は、他地域の観光プロダクトとの相対的な評価、あるいは観光市場の需要（観光客の志向）などで評価されるものである。その意味において、他地域との連携と補完、観光市場に適した資源開発など、その時期と適地を選定して実施する必要がある。

そこで、観光地、及び観光関連施設に係る開発戦略として次の4つを挙げる。

- ・ 自然・景観観光資源の「見せ方」の改善と開発
- ・ 文化資源観光地環境の改善と開発
- ・ レジャー・レクリエーション施設の改善と開発
- ・ 観光プロダクト価値を高める維持・管理・運営

### (1) 自然・景観観光資源の「見せ方」の改善と開発

#### **景観スポット開発**

青海省の観光では、自然景観や生態だけでなく、荘厳な宗教建築物や雄大な人工構造物などの景観が重要な観光資源となっている。景観は、国内外の観光市場、旅程の長短を問わず、人気が高く誰にでも楽しめる観光資源である。青海省の魅力的な景観は様々なガイドブック、パンフレットに写真と解説入りで数多く紹介されているが、どこでいつ見られるのか、実際に観光客が目に見える手段とその説明に乏しい。景観は、位置や季節、時間によってもその様相を変えるものであり、その「スポット」を狙った景観資源開発を図る。景観は移動途中でも楽しめることから、他地域との連携、ルート整備の中でも重要な資源開発項目でもある。そこで、以下のような方策が考えられる。

#### **景観マップの作成と配布**

- ・ 景観資源調査を実施し、季節や場所（沿道のどの地点であるか）、時間などを示す景観スポット説明資料（例：景観マップ）を作成し、ある条件でしか見られないような景観も示す。これにより、中・長期的には自家用車や鉄道などで旅行する個人・グループ観光客にもアピールすることができる。
- 植物、動物、鳥類も同様に調査し、観光客への配布用資料（例：フェノロジー（生物季節学、花暦学）、カレンダー、花植物暦）を作成する。
- マップを旅行会社や省観光宣伝事務所、提携する省市自治区の旅遊局に置いてもらう。あるいは、イベントでの配布やウェブサイト上での紹介を行う。

#### **展望施設整備**

- ・ 景観スポットによって、アクセス道路や駐車スペース、休憩所を兼ねた展望施設を整備する。
- ・ 周辺の環境に影響を与えない規模を設定し、用地を確保する。
- ・ 周辺景観と調和した施設デザインとする。

#### **レジャー施設、拠点観光地での景観活用**

- ・ レジャー地区内での施設配置や施設デザインを周辺の景観と調和させ、施設が引き立つように周辺景観を「借景」として利用する。
- ・ 宿泊施設だけでなく、飲食施設でも景観を展望できるような施設配置を図る。



### **施設による自然資源の見せ方改善**

#### **目立たない観察施設の整備**

生態観光の大きな魅力の一つは、フィールドで固有の動植物を見ることである。その際、従来の特殊目的旅行（SIT）に加え、これからのターゲットとなる生態観光の知識が浅い初心者を引きつけるには、観察施設の設置が有効である。また、フィールドでの観察行為に不安のある初心者には、動植物への影響の低減も兼ねて観察場所を限定することが必要である。同時に、施設の外観は周辺の自然景観と同化させ、観察対象となる野生動物への影響を防止しなければならない。

鳥島では、繁殖地においてトーチカのような観察所を整備しているが、コンクリートの建築物がむき出しになっており、周辺の景観、野鳥の繁殖環境とそぐわない。完全に埋設して覗き窓だけ出すなどして野鳥から見えないようにし、周辺の平坦な景観とも調和した施設とすることが必要である。

#### **インタプリター（解説者）の導入**

自然資源を見せた生態解説には、単なる観光ガイドではなく、地域の自然環境・生態系の専門知識を持つネイチャー・インタプリター（解説者）が不可欠である。インタプリターは、自然保護区内での行動規範を示し、観光客の行動も管理することになる。初心者の観光客は言うまでもなく、知識のある特殊目的旅行（SIT）者をも満足させる重要な役割を担うものであり、エコツーリズム開発にとって必要不可欠である。

#### **環境研究機関との連携**

生態観光では実際に動植物が見られるかどうか重要であるが、季節や気象条件に影響を受けるだけでなく、条件が整っていてもその目的が叶わないことも多い。特殊目的旅行（SIT）の生態観光客であれば常識として捉えていることでも、初心者の観光客は満足できない。また、青海省の観光シーズンは雨の季節でもあるため、シーズン中でさえ動植物を見ることが叶わない可能性もある。

そこで、生態観光初心者にも何らかの形で目にできる場所は、貴重な観光メニューの選択肢となる。博物館は良い例であるが、例えば研究保護機関との連携による希少動植物の保護・研究・繁殖施設などは、目的自体は観光ではないが観光客が青海省固有の自然資源に触れることができる貴重な施設となる。自然環境研究機関（例：中国科学院西北高原生物研究所や塩湖研究所、林業局関連研究機関など）との連携のもと、展示・説明施設の拡充などによる観光利用を目指す<sup>49</sup>。

### **（2）文化資源観光地環境の改善と開発**

#### **伝統的・文化的雰囲気損なわないための環境維持と改善**

青海省の観光資源の中で、寺院などの宗教文化施設は重要な位置を占めるが、その観光開発・利用状況は観光客を満足させるものではない。特に大きな改善テーマは、宗教活動・

<sup>49</sup> 通常の動植物園では通年の維持管理が困難であるが、研究・保護施設であれば研究・保護と観光の両立という面で優れている。

僧侶の生活と観光との共存である。タール寺は、西寧市からのアクセスが非常に良く多くの観光客が訪れるため、大きな改善が必要である。

タール寺を始めとするチベット仏教寺院には、多くの僧侶が生活しながら宗教活動を営んでいるため、現状ではどうしても観光客の目に触れることになる。僧侶の生活自体は寺院の一部であり宗教的活動であるが、その現代的な日常生活風景（テレビ、アンテナ、洗濯機、車両、バイクなど）は荘厳な宗教的雰囲気壊すことになる。生活機材を観光順路上に置かない、あるいは順路から完全に切り離す、ガイド誘導により観光客を生活空間に近づかせないようにするなどの工夫が必要である。

その他にも以下のような方策が求められる。

- 施設整備：入場券売り場、売店、トイレなどの便利施設は伝統建築をモチーフとしたデザインとする。
- 建築物や施設の修復：基本的に伝統的技術・素材を用いることが望ましい。ただし、予算や安全性の都合上、コンクリートや鉄パイプ、タイルなどの現代的の建材が必要な場合は、観光客の目に付かない部分への補強に使う。目に付く部分は、偽木、偽石、あるいは塗装などによって目立たなくするなどの工夫をする。
- 同仁の隆務寺土壁の劣化は、内部に補強材を入れるなどして外壁は土壁を維持する。
- 生活排水施設、寺院関係者の生活路は観光客の順路と切り離す。
- 建築物のための照明が必要な場合は、電飾ではなくライトアップにする。

なお、このような工夫は古代遺跡の観光開発にも適用できる。楽都の柳湾遺跡には既に博物館が建設されているが、都蘭の熱水吐蕃古墳群や諾木洪文化遺跡などの観光開発への適用を目指す。

省建設庁では、貴徳の旧市街などの歴史・文化区の歴史的環境・街路景観の保全計画・観光開発計画の策定を進めている。しかし、一部の地区では既定の保全計画や観光計画と異なる開発が発生するなど、住民の理解と協力が十分に得られていない状況がある。歴史・文化区の保全計画は、市民の社会・経済活動など私権の一部制限を含むものであり、歴史的環境や街路景観の保全に対する啓発活動を通し、地元社会の歴史・文化に対する住民意識の向上・理解を深めることが計画の実施・具体化には必要不可欠である。そのためには、地元社会の参加による計画策定・共通認識醸成体制をシステム化し、歴史・文化環境の保全と同時に、観光開発・利用の促進、町の美化運動などの一体的な促進・強化体制づくりが必要である。

### **もう一つの民族観光開発**

既存の民族観光としては互助土族民族村があるが、その観光プロダクト内容には「3.4 観光プロダクト開発課題」で多くの課題を指摘し、「4.3 観光需要開発戦略」では新しい土族民族村の戦略を提案した。一方、観光市場ニーズの観点からは、大規模のこれら民族観光村に対し、もう一つの民族村のニーズは、小規模で来訪者も少ないが客単価が高く、より伝統的な民族生活・習慣・文化に根ざした形での伝統民族村落観光が考えられる。この場合、来訪者には村民の生活・文化への相応の知識と敬意、礼儀正しい振る舞いが求められ、一時的に擬似村民として迎えらる。ただし、このような民族村の観光利用の可否は、住民意思によって判断・決定されなければならない。来訪者は、ヨーロッパやアメリカ、日

本などの海外観光市場の特殊目的旅行（SIT）が中心となり来訪者数は少ないだろうが、住民は直接的な収入を得ることができる。

青海省では、社会開発・近代化の進展に伴ってライフスタイル・生活習慣が変わり、都市化の進展による均一化が浸透し、伝統的な民族習慣やライフスタイルの影が薄くなってきている。現在、民族・宗教庁では、旅遊局などと協力して各民族の民謡や芸能グループの育成や公演場所の整備・確保、伝統工芸の育成・振興などの方策を実施している。民族村観光の多様化と質の向上策の一環として、上記伝統的な生活習慣の再生・保護の支援を含む小規模民族村開発助成事業の導入を提案する。

### (3) レジャー・レクリエーション施設の改善と開発

#### 屋内型観光資源の開発

青海省では、冬季の厳しい気象条件による冬季観光の低調ばかり指摘されているが、観光シーズンの夏季も雨の季節で、雨による土砂災害なども起きている。観光は移動も含め基本的に屋外の活動が中心であり、天候が観光客の満足度に与える影響は非常に大きいものがある。よって、悪天候でも利用できる屋内型の観光施設は、観光メニューの選択肢を広げる上で重要な点である。屋内での体験観光やイベント、アトラクションも同様である。屋内型施設やアトラクションの開発は、長期的に見れば冬季観光の発展にもつながる。

#### より魅力的なレジャー空間づくりのための計画手法（持続的観光開発のための景観・環境配慮型開発）

既存のレジャー施設の改善や新たな避暑レジャー観光地（湖畔レジャー、森林レジャー）保養観光地（温泉レジャー）などの観光拠点（施設）開発に対し、既存の画一的な開発からより魅力的なレジャー空間作りを目指す。

- 周辺自然環境との融合：レジャー空間づくりにおける基本方針は施設と周辺自然環境との融合であり、景観的な調和を図る。それにより利用者にとっても違和感のない空間が提供できる。これは、自然環境だけでなく厳肅な宗教施設、古代遺跡、民族風情といった環境についても同様である。周辺の環境に対峙するような近代的な人工物や大規模建造物の建設は避けなければならない。
- 自然保護区、景観区や歴史・文化区などの導入部・ゲート（玄関口）における「センス・オブ・アライバル」の創出：各地区のテーマ（緑、水、文化など）に応じた修景、植栽整備により、観光客の出迎え方を演出する。
- 地区内の地形を活かした施設配置：特に傾斜地では域内空間の構成に変化をつけやすい。施設に周辺の景観に馴染ませるとともに施設内に景観を取り入れ、地形を活かした施設配置とする。
- 景観を活かした施設配置とデザイン：開発区内では、周辺の地形、景観、施設の機能に適した空間構成と施設配置とする。特に、宿泊施設、レストランから周辺の景観を眺望できる施設配置、施設デザインとする。また、周辺にランドマークとなる山、樹木などがあれば、借景として地区の修景に取り入れる。
- 客の動線を考えた施設配置：立ち寄り客と宿泊客の動線を分け、宿泊客のプライバシーと快適性を確保する。また、車両動線と歩行者動線を分離する。

- 賑わい空間づくりと静かな空間づくり：域内には、利用者が自然に集まるように広場、商業施設、イベント施設などを集めた空間をつくる。賑わい空間には、歩行者動線が集中するようにデザインする。一方で、利用客が静かに過ごせるよう、落ち着いた空間も必要となる。
- 施設の機能に応じた施設配置：ホテルや宴会場はにぎやかな空間近く、コテージ型の宿泊施設は静かな場所、駐車場は主要施設付近、衛生施設（ゴミ処理、汚水処理）は地区の境界近くに配置する。
- 施設デザイン：施設の高さを制限して伝統的なデザインを取り入れ、建築素材、色彩も周辺景観と調和するよう配慮する。快適な室内空間を作るためには、外見は伝統的なデザインでも内部は現代的な設備にすることも考える。例えば、テント型の宿泊施設では外見はテントだが、内部は近代的な設備の宿泊施設とし、チベット居住空間の雰囲気をつくりつつ快適な居住空間を提供する。
- 緑化：地区内には修景用地を十分に確保し、遮音・隠蔽・修景のために効果的に緑化する。また、誰もが利用する利便施設とプライベートな宿泊施設の間には十分な緩衝帯を設ける。駐車場や衛生環境（ゴミ処理、汚水処理）施設の周囲も同様に処置する。
- 美化：修景や緑化だけでなく、地区内のごみ処理や清掃は快適なレジャー空間づくりには不可欠である。
- エコ・エネルギーの利用：消費電力の少ない設備や外灯などには太陽電池などの代替エネルギーを取り入れる。
- 青海省は観光開発後進省であり、上記のような周辺環境との調和や保護の観点から観光開発計画や施設設計、事業・施工管理の経験が乏しく、これらに対応できる計画・設計要員の人材開発・供給体制の強化（対口支援システムを利用した観光開発先進省との人材交流、指導要員の派遣など）必要とされる。

#### （４）観光資源価値を高める維持・管理・運営

適切に維持管理された観光資源（環境）は、高品質プロダクト化の可能性がある。そして、このプロダクト価値の高い自然・人文資源（環境）を持続的に活用したプロダクト開発ができる。また、保全された環境は、魅力的な観光地の景観を創出することができる。

したがって、観光資源価値を高めるためには観光資源（観光地）環境を保全・改善することが重要である。地域の環境を享受し、環境に最も影響を与える地域住民の主体的参加を前提に、関連省行政機関や自治体、旅遊局、観光産業界、科学教育界などの支援と協働体制づくりが不可欠である。

#### **協働管理・運営（コミュニティ参加）方式の導入**

観光資源を守りつつ活用していくには、本来の資源管理者（林業庁や寺院など）、関連する地方自治体や県レベルの旅遊局などとともに、地元の民間業者、コミュニティ・住民が参加した資源の監視・管理や施設の維持対策、利益配分システムを含め、それぞれの意見を調整しながら協働で管理・運営していくことが資源保全を顕在化する上で重要である。

管理・運営の従事者や地元社会が地元に残された資源を保護・保全し、それが観光プロダクトとして活用され、地元社会に新たな収入を生む、というサイクルが理解されれば、

地元社会の自然・歴史・文化資源に対する理解が深まって認識も改まり、結果的に資源の適切な保護・保全策の強化につながる。また、これらの活動は観光地の景観性を高め、来訪者に対して快適性と好印象を与えることができる。地元の自然・歴史・文化を愛し誇りを持った観光受け入れ態勢づくりは、貴重なリピーターあるいは観光地の個人宣伝者を得ることにつながる。

観光収入を得ることは、住民による環境破損行為を防止だけでなく、住民による資源保護の監視活動への協力体制づくりにもつながる。適切な資源管理による観光収入の増加は、環境保全活動に必要な維持・管理に必要な財源確保システムの構築にも寄与することが可能となる。さらに、観光客の来訪と消費によって外部から観光資源が認められたという成果は、伝統文化などの再生や活性化を促すかもしれない。

ただし、このような管理・運営のためには、住民を含めた直接の従事者の活動だけでなく、土地利用計画やゾーニング、あるいは開発ガイドラインの整備により適切な開発を誘導し、環境負荷を最小化しなければならない。これらについては、行政の支援が不可欠である。

### **来訪者管理システムの導入**

青海省における観光資源の運営・管理に来訪者管理システム導入する目的は以下の3つである。来訪者管理システムは直接管理と間接管理からなり、環境ゾーニングの地区区分や資源、遺産の重要性・希少性・特性に応じた適切な運用が必要である。

- 観光客の満足度の最大化
- 観光客による観光資源に対する負の影響の最小化
- 治安・安全性の確保

### **観光地における来訪者流動の管理**

観光資源利用の大きな問題は、一定期間に利用者が集中すると観光資源環境に負荷がかかり、来訪者の満足度も低減してしまう点にある。それら観光利用負荷を軽減するため、以下のような来訪者流動の直接・間接管理の方策が必要である。

#### **(直接管理)**

1. 入場者数制限：相対的に脆弱な場所等
2. 複数の探勝路整備：混雑を緩和と分散
3. 誘導路にサインや説明版設置：来訪者を誘導

#### **(間接管理)**

1. 高料金設定・季節料金設定：外部要因に敏感な地区への入場希望が多い場合（料金抵抗による入場制限）
2. 申請・許認可性の適用：上記に同じ
3. 外部要因に敏感な場所等へはガイドの同行を義務づける。
4. 行動ガイドライン作成・配布：自然環境保全区、宗教施設、民族観光区内等

### **観光地評価・表彰制度の導入**

観光資源や観光地、観光プロダクトの質を評価して認定・表彰することは、観光プロダクトの質とブランド力を高め、結果的に販売力を高める有効な手段の一つとなる。同時に、各観光地の地元社会・住民の意識の向上は、旅行業界の販売促進に対するアピールとなり、生態観光開発の方向性と地元のモチベーションを高めることにもなる。これは、生態観光を戦略目標とする青海省の観光イメージを強めることにもつながる。

表彰を受けるためには、必然的に観光資源を保全して観光資源価値を高め、観光利用の仕方や見せ方を工夫し、より質の高い観光プロダクトにしなければならない。これは、結果として青海省の生態観光の競争力を強化することにつながる。

また、自らの努力によって観光資源を維持・保全し、観光利用の成果を公的に認められたという結果は、地元社会や従事者たちに観光資源価値の再認識を促し、自信や誇りを生むきっかけとなる。加えて、観光ガイドや旅行会社も評価して表彰することも有効である。

上記と同様に、ゴミが散乱し、水溜りや汚水の流れる観光地区内の道路、汚いトイレ等、観光地にふさわしくない現状を抜本的に改善するため、観光都市や観光地区内の美化キャンペーン（環境・観光セミナー、学生・生徒によるゴミ拾い、市民参加による街路清掃、花と樹木の植栽、美化評価・表彰）助成策を含むシステムを整備する。

### **観光教育・啓発プログラムの実施**

観光産業従事者へのホスピタリティを醸成するため、観光基本サービス教育プログラムを実施する。地元住民組織を対象に観光セミナーを開催し、地元が誇る自然・歴史・文化などの資源とその観光利用の方法、参加の方法、観光開発メカニズム等のプログラムを実施し、総合的な観光への理解と意識の向上、ホスピタリティの醸成を図る。

省内住民の観光に対する意識の向上は、新聞・テレビ・ラジオなどのマスメディアを活用し、青海省に対する郷土愛を育てる。同時に、観光客に対する住民の笑顔・ホスピタリティが次に訪れる観光客を倍増し、観光産業を通して雇用機会増や省内景気の向上、所得向上につながる観光開発のメカニズムを伝える。

観光開発には、観光産業の発展段階に応じた資金調達方法が考えられる。青海省におけるインフラ開発や観光資源開発のための資金調達方法として、次の5つが考えられる。なお、これら資金調達方法についての詳細は「第11章 資金調達方法の拡大」にて記述する。

- 政府資金
- 銀行融資
- 観光産業基金
- プロジェクトファイナンス
- 信託融資

## 4.5 人材育成と法制度・組織整備に係る戦略

### 4.5.1 人材育成開発

「3.5.1 人材育成課題」において、青海省観光部門の人材育成に係る主な課題として、以下3つを挙げた。

- 観光業に携わる人材の不足
- 教育機関による育成数と、ポジションのミスマッチ
- 観光人材の専門分野における知識不足

これらの課題を解決するための基本戦略として、以下を提案する。

#### (1) 観光業人材規模の拡大

青海省における急激な観光業の発展を支えるために観光業人材を増加させる。計画推進の際は既存教育機関を最大限に利用する。既存教育機関は、ポジションごとの人材育成数に配慮し、職業学校を中心とした定員数増加とする。

短期的には宿泊施設に携わる人員が大きくなるが、以後観光産業が成熟するに従い、他分野の発達も視野に入れた人材の拡大を図る必要がある。

また、地元雇用の創出という観点から、特に観光業が発展すると思われる地域において、短期的な職業訓練を中心に現場レベルの人材育成を図る。

#### (2) 観光業人材の高度化

研修を通じて、観光業人材の更なる高度化を図る。高度化の対象として以下を提案する。

##### **教員の再教育**

職業学校、及び大学の職員を対象として実践的な研修機会を与え、理論に特化した既存カリキュラムの改定につなげる。

##### **ホテル従業員の再訓練**

青海省観光業において、大きな比率を占めるホテル業従業員を対象に再訓練を行う。

##### **観光ガイドの再教育**

観光ガイド証保有者のうち、初級ガイドを中心として観光ガイドの再教育を行い、中級・高級ガイドへの育成を図る。また、将来的には英語・日本語を中心とする外国語ガイドの割合も増やす。

##### **インタープリター（生態観光ガイド）養成プログラムの実施**

青海省固有の観光資源を主体とする生態観光や歴史・文化・民族観光を促進するため、その科学的価値やその生態系、歴史・文化・民族についての知識を持ち、来訪者の満足を得られる十分な説明のできるネイチャー・インタープリターや歴史・文化ガイドを養成する。

#### 4.5.2 法制度・組織体制整備

「3.5.2 法制度・組織体制課題」において、青海省観光開発を妨げる法制度・組織体制に係る主な課題として以下の3つを挙げた。

- 観光業関連法規、及び管理体制の不備
- 旅遊局組織の能力向上に対する対応不足
- 旅遊協会の活動不足

以下、これらの課題を解決するための基本戦略として以下を提案する。

##### (1) 観光業における法体系、及び実施体制の整備

「3.5.2 法制度・組織体制課題」にて述べたとおり、急激な観光業の発展に法体系の整備がまだ追いついていない状況である。よって、より一層の青海省観光業における法体系の向上を図る。また、法制度の実施体制にも配慮する。特に、消費者保護制度に対しては、青海省内で適用される条例・標準を定めると共に、投訴制度の充実を図る事で観光客がより安心して青海省を観光できる仕組みを作る。

##### (2) 青海省旅遊局の組織強化

青海省観光の発展は、人民旅遊行政管理部門である青海省内の省・州・県各旅遊局の役割が大きい。現在の青海省は、民間投資家の資本不足、経験不足、他省からの投資が少ないため、旅遊局が観光開発に大きな役割を果たす。省・自治州・県共に重要であるが、まずは省旅遊局の組織強化を戦略として掲げる。特に、環境に配慮した観光開発管理能力の強化、健全な観光業の発展、市場調査・宣伝能力の向上に主眼を置くものとする。

##### (3) 青海省旅遊協会強化による官民一体となった観光開発

青海省で官民一体となった観光開発を促進させるため、青海省旅遊協会の役割を強化する。これにより、青海省旅遊協会が政府の政策実施の効率的な伝達機関としての役割を果たせるようにする。しかしながら、観光業は最終消費者と密接に結びつき、その動向に敏感に対応する必要があるため、旅遊協会も個々の観光関係業者の自発的開発意欲を十分に生かす組織でなければならない。



# 付 録

## 付録1 ウェブサイト（本編 1.4）

### 1.1 ウェブサイト開設の目的

ウェブサイト開設の目的は、本調査の計画策定過程の情報開示を通じて調査実施の啓発を図り、また計画内容に対する国内外の一般・有識者からの幅広い意見を計画にフィードバックさせることである。

### 1.2 ウェブサイトの概要

ウェブサイトの概要（表 1.2.1）は、C/P 機関である青海省旅游局、及び JICA と協議して決定した。

主たる広報先が中国と日本になることから、ウェブサイトで使用する言語は中国語と日本語の 2 言語とし、コンテンツは本調査の情報開示というウェブサイトの目的に即して決定した。2005 年 6 月にウェブサイトの構築作業を開始し、2005 年 7 月にウェブサイトを公開した。公開後も調査の進捗に応じてコンテンツを追加した。

表 1.2.1 ウェブサイトの概要

アドレス	<a href="http://www.jica-qinghai-tourism.cn/">http://www.jica-qinghai-tourism.cn/</a>
取得名義	中華人民共和国青海省環西寧圏総合観光開発計画調査
取得日時	2005-07-06 16:30
有効期限	2006-07-06 16:30
コンテンツ概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 本調査の目的</li> <li>• 調査団の構成（連絡先や団員名など）</li> <li>• 参画の呼びかけ（ワークショップ開催などの広報）</li> <li>• 提出報告書の概要</li> <li>• その他調査の進捗状況や成果の開示</li> <li>• 意見・情報募集のための連絡先の掲載</li> </ul>

JICA 調査団ウェブサイトの構築に並行して、C/P 機関である青海省旅游局が公式ウェブサイトの開設を準備していた。観光政策広報や青海省の紹介は調査団ウェブサイトでも検討課題とされていたが、省旅游局公式ウェブサイトと目的や内容が重複することは適切ではない。そのため、調査団のウェブサイトではこれらのコンテンツは扱わず、必要に応じて省旅游局ウェブサイトに対して助言・協力を行うことが適当であるとされた。

なお、省旅游局ウェブサイトは 2005 年夏に公開されている。

表 1.2.2 青海省旅游局公式ウェブサイトの概要

アドレス	<a href="http://www.qhly.gov.cn/">http://www.qhly.gov.cn/</a>
取得日時	2005-04-08 17:25
有効期限	2010-04-08 17:25
コンテンツ概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 省内の観光地、行事、名物料理等の紹介</li> <li>• 省内の旅行業者、ホテルの紹介</li> <li>• 観光政策情報（政策法規、旅行業管理、育成、統計、投資情報、意見連絡先等）</li> </ul>

### 1.3 ウェブサイトの技術情報

中国国外にあるウェブサーバは、中国国内からのアクセスが制限されるようなコンテンツのウェブサイトと同じゾーン内になった場合、中国からアクセスできなくなる可能性が高い。また、中国国内でも、遠隔地にあるサーバは担当者との連絡に時間がとられやすいため、平均復旧時間が長くなりやすい。そのため、地元の西寧市にあるホスティングサービスに絞ってサーバを検討した。その結果、安定稼動の実績を重視し、C/P 機関のウェブサイト構築コンサルタントとしての実績もある青海師範大学ネットワーク情報学院のサーバを利用することとした。

ウェブサイトを適切に構築してコンテンツを追加していくためには相応の IT 技術が必要であり、コンテンツの作成と翻訳には観光産業や自然・社会環境など本調査に関する広範な基礎知識と日中両言語の能力が求められる。しかし、両者を満たす人材の確保は困難であり、IT 技術者でなくてもコンテンツの作成と翻訳が可能となるよう、コンテンツ管理システムを導入することとした。すなわち、IT 技術者がサーバの設置とコンテンツ管理システムの導入を実施し、コンテンツの作成と翻訳は IT 知識が不要な入力画面への入力で可能になるようにした。

表 1.3.1 ウェブサイトの技術情報

ドメイン	ドメイン名	http://www.jica-qinghai-tourism.cn/
	レジストラ	Nihao Net (http://www.nihao.net/)
	サイト名称	青海省環西寧圏総合観光開発計画調査
サーバ	所在	青海師範大学ネットワーク情報学院
	ソフトウェア	Redhat Linux Apache PHP MySQL Visual site builder 智能网站管理系统 (交大博通企業製)
接続	経路	CERNET (教育科学研究所) の西安アクセスポイント
	速度	155 Mbps

### 1.4 ウェブサイト開設による成果

ウェブサーバにおいてアクセスを記録し、Awstats を用いてアクセス解析を行った。その集計結果を表 1.4.1 に示す。積極的なウェブサイト広報を実施していないが、ある程度のアクセスを得ていることが分かる。

表 1.4.1 月別アクセス数

月	日	日数	総アクセス	
			ホスト数	ページビュー
7月	19 - 31日	13	395	728
8月	1 - 31日	31	588	2,361
9月	1 - 30日	30	407	46,352
10月	1 - 31日	31	641	17,479
11月	1 - 30日	30	686	48,919

Referer キーワードを用いて検索エンジンでの検索キーワードの解析も実施した(表 1.4.2)。調査を知っている人による検索結果が多いことから、調査団に関する追加情報を得るためにウェブサイトを検索したことが分かる。そのため、今後も調査団の動向に基づいてウェブサイトを維持することは必要と言える。

百度以外の検索エンジンからのヒットは無かった。また、近年のセキュリティに対する関心の高さのためと思われるが、Referer キーワードが正しく送信されてきたケースが非常に少ない。その点は留意する必要がある。

**表 1.4.2 Referer キーワードによる検索キーワード解析**

検索エンジン	検索キーワード	ヒット数
百度 (http://www.baidu.com/)	環西寧観光圏計画	4
	環西寧圈総合観光開発計画	3
	環西寧圈観光開発計画調査団成員	1
	青海省環西寧圈総合観光開発計画調査	1
	旅游局 GIS	1
	観光開発調査	1
	運営調査	1



## 付録2 C/P 本邦研修の研修プログラム（本編1.4）

本調査と連携したC/P（カウンターパート）本邦研修（技術協力個別案件）が別途予定されている。ここでは、本調査実施側の立場から、日本の観光開発に対するC/Pの理解を増進するための研修プログラムの原案を作成する。

### 2.1 プログラム作成にあたって

本調査では、各種調査や計画策定をする上でC/Pの主体的な参加が求められており、主に表2.1.1に示す主要項目を含んでいる。ここでは、それら主要項目と次節にて示す研修・訪問先での研修内容との対応を整理する。

表 2.1.1 本調査に含まれる主要項目とC/P本邦研修内容との対応

（○は特に対応している事を意味する）

本調査に含まれる 主要項目 研修・訪問先	観光振興	観光商品・ マーケティング開発	観光関連施設・ インフラ整備	自然環境保全と観光	配慮）と観光 配慮）と観光 配慮）と観光 配慮）と観光	社会環境・文化遺産 保全（少数民族への 配慮）と観光	周辺地域との連携 ネットワーク	人材育成	組織・法制度整備	観光情報統計	ウェブサイトの活用
北海道経済部	○								○		
北海道環境生活部			○		○				○		
(社)北海道観光連盟	○	○						○		○	○
(社)北海道観光土産協会		○									○
(株)ニセコリゾート観光協会	○	○						○	○		
北海道釧路支庁経済部	○	○	○	○	○			○	○	○	○
釧路市役所観光振興室	○	○	○	○			○	○			
NPO 法人阿寒観光協会まちづくり推進機構	○	○	○	○	○		○	○			
弟子屈町役場経済観光課		○	○	○							
斜里町役場商工観光課	○	○		○							
環境省				○					○		
国土交通省	○		○						○	○	
講師による講義		○		○				○			
(社)日本観光協会	○								○		○
(社)日本旅行業協会									○		
(独)国際観光振興機構（JNTO） /（財）国際観光サービスセンター（ITCJ）	○	○						○	○	○	○
リゾートトラスト(株) エクシブ浜名湖		○	○					○			

## 2.2 研修プログラムの原案

表 2.2.1 に示すように、約 4 週間（25 日間）の研修プログラムを作成した。青海省の観光資源（湖を始めとする自然資源や少数民族文化）、気候（夏は涼しく冬は寒い）、地理的条件（北京や上海など大都市との位置関係）などを考慮し、青海省観光を取り巻く諸条件が比較的類似している北海道を主な研修地域として選択した。

表 2.2.1 C/P 本邦研修（技術協力個別案件）プログラム

日数	行程/研修・訪問先	研修内容	宿泊
1 日	北京 ⇒ 札幌	<移動>	札幌
2 月	札幌国際センター (JICA 札幌)	<ブリーフィング> <オリエンテーション>	札幌
3 火	北海道 経済部 観光のくにつくり 推進室	<概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 北海道観光のくにつくり条例 ・ 北海道観光のくにつくり行動計画 ・ 北海道観光サミット（官民連携について） ・ 観光客誘致への取り組み など	札幌
	北海道 環境生活部	<概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 自然環境全般 ・ 自然環境保全への取り組み（施策の概要） ・ 環境アセスメント ・ アイヌ文化の振興と知識の普及啓発 ・ 世界自然遺産「知床」 など	
4 水	社団法人 北海道観光連盟	<概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 観光振興・宣伝誘致事業 ・ 観光情報の提供方法 ・ 受け入れ体制の整備促進 ・ 苦情に対する対応 など	札幌
	社団法人 北海道観光土産品協会	<概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 土産品協会の取り組み ・ 推奨店制度や推奨品制度 など	
5 木	株式会社 ニセコリゾート観光協会	<概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 株式会社としての観光協会設立の経緯や事業内容 ・ ニセコリゾート観光協会の事業内容 ・ ニセコのリゾート戦略 ・ 旅行商品の企画、販売、及び開発、観光客誘致事業 など <視察> ・ 宿泊施設 ・ ペンション等の独自の取り組み など	ニセコ
6 金	株式会社 ニセコリゾート観光協会	<道の駅視察> ・ 情報プラザ（インフォメーションコーナー） ・ 土産品の販売促進 ・ 農産物の販売 など	札幌
7 土	-----	休日	札幌
8 日	札幌 ⇒ 釧路	<移動>	釧路

日数	行程/研修・訪問先	研修内容	宿泊
9	月	北海道釧路支庁 経済部	釧路
		釧路市役所 観光振興室	
10	火	-----	釧路
11	水	NPO 法人 阿寒観光協会まちづ くり推進機構	阿寒
12	木	NPO 法人 阿寒観光協会まちづ くり推進機構	阿寒
13	金	弟子屈町役場 経済観光課	知床
		-----	
14	土	-----	知床
15	日	-----	知床
16	月	斜里町役場 商工観光課	東京
		知床 ⇒ 東京	



日数	行程/研修・訪問先	研修内容	宿泊	
17	火	環境省 <概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 国立公園等の管理と都道府県や市町村との役割分担 ・ 自然環境の保全整備 ・ 野生生物の保護管理 など	東京	
	国土交通省 <概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 政府レベルの観光振興への取り組み ・ 観光カリスマ ・ 観光統計の整備 ・ 観光社会資本整備 など			
18	水	講師による講義 <講義> ・ エコリゾートの経営戦略 ・ 自然体験ツアーの企画 ・ 高質サービスの提供方法 など	東京	
19	木	社団法人 日本観光協会 <概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 日本観光協会で行っている事業の概略 ・ 観光地づくり促進 ・ 観光情報ネットワークの整備 ・ インバウンド観光の促進	東京	
	社団法人 日本旅行業協会 <概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 旅行業協会の事業内容の概略 ・ 旅行業務の取り扱いに従事する者に対する研修の内容 ・ 旅行者者等に対する指導や苦情の解決方法			
20	金	独立行政法人 国際観光振興機構 (JNTO) 財団法人 国際観光 サービスセンター (ITCJ) <概要説明・質疑応答・意見交換> ・ 観光地、観光商品の PR 方法 ・ ツアーの企画・開発・造成・販売のトータルコーディネート ・ 自治体や観光・旅行運輸関連企業及び団体との連携 ・ 外国人旅行者の来日促進、受け入れ体制整備 ・ 外国人旅行者のための宿泊予約の斡旋機関	東京	
	リゾートトラスト 株式会社 エクシブ浜名湖 <概要説明・質疑応答・意見交換> ・ サービス向上への取り組み ・ 従業員の業務内容と研修内容 ・ 「エクシブ」の会員権のシステム ・ サービス、ホスピタリティについてなど <視察> ・ レストラン、エステ、客室、プール、会議室			
21	土	エクシブ浜名湖	エクシブ浜名湖	
22	日	-----	休日	東京
23	月	JICA 社会開発部 <ブリーフィング> 「JICA の観光セクター開発の考え方」について	東京	
24	火	東京国際センター (JICA 東京) <研修報告> <研修評価>	東京	
25	水	東京 → 北京 <移動>		

## 付録3 ワークショップとセミナーの概要（本編 1.4）

### 3.1 ワークショップ

2006年2月に、青海省観光の現状と今後の展望について観光・旅行業関係者で情報を共有し、また意見交換することを目的としたワークショップを開催した。

ワークショップには、青海省旅遊局を始め青海省内の各市州県の行政機関、ホテル、観光関連の教育機関、旅行会社、航空会社などの職員・従業員が参加した。四川省、甘粛省からの参加者も含めると参加者は約120名に達し、幅広い層から多くの参加者を得る事ができた。

#### (1) ワークショップのプログラム

- タイトル：青海省観光の現状と今後の展望
- 日時：2006年2月21日
- 場所：青海賓館（西寧市）
- 参加者人数：約120名
- プログラム：

時間	内容
8:30 - 9:00	受付
9:00 - 9:10	開会挨拶 青海省旅遊局 計画財務課長 喇 積元
9:10 - 9:30	発表1：青海省環西寧圏総合観光開発計画調査について JICA 調査団 総括 本村 雄一郎
9:30 - 10:10	発表2：青海省の観光業発展には今後何が必要か JICA 調査団 観光振興 I 高桑 清明
10:10 - 10:30	休憩
10:30 - 11:00	発表3：サービス水準向上や人材育成の具体的手法 四川旅遊計画設計研究院 副シニアエンジニア 覃 建雄
11:00 - 11:30	発表4：ホテルのルームサービスの向上 建銀賓館 客室部副經理 鄧 銳田
11:30 - 12:00	質疑応答
12:00 - 12:10	閉会挨拶 青海省旅遊局 計画財務課長 喇 積元

(敬称略)

#### (2) ワークショップの概要

ワークショップでは、まず調査団が本調査の背景や目的、スケジュール、マスタープランの概要について発表した。続いて、「青海省の観光業発展には今後何が必要か」という題目で、調査団から観光サービスと観光プロダクトの望ましい姿について発表した。

四川旅遊計画設計研究院の覃氏からは、四川省における観光・旅行業の人材育成について発表された。西寧市にある建銀賓館の鄧氏からは、建銀賓館で実際に行われている人材育成や宿泊客に対するきめ細かいサービスについて、具体例を交えて紹介された。

質疑応答では、参加者と JICA 調査団、発表者、及び青海省旅遊局の間で活発な議論が交わされた。

### 3.2 JICA-Net セミナー

2006 年 2 月、青海省旅遊局職員や旅行社職員を主な対象とした JICA-Net セミナー（TV 会議システムを利用したセミナー）が開催された。JICA 調査団は、JICA 中国事務所担当者や JICA-Net プロデューサーと共に、内容の企画、中国側の参加者選定・募集、実施準備など各種支援を行った。

#### (1) JICA-Net セミナーのプログラム

- タイトル：「環境保全に配慮した観光開発セミナー」
- 日時：2006 年 2 月 16 日（木）10:30-15:30（日本）/9:30-14:30（中国）
- 場所：JICA 本部 11 階（東京）/ JICA 中国事務所（北京）
- 参加者人数：講師 4 名（日本）/ 青海省観光関係者 19 名、北京旅行会社職員 4 名、JICA 関係者 4 名（中国）
- プログラム：

第一部：観光開発と環境保全－北海道の事例紹介－	
9:30 - 9:45	開会挨拶 JICA 中国事務所 次長 藤谷 浩至
9:45 - 9:55	挨拶 青海省旅遊局 局長 呉 大偉
9:55 - 10:30	北海道・阿寒における観光開発と環境保全 NPO 法人阿寒観光協会まちづくり推進機構 藏根 敏文
10:30 - 11:20	質疑応答
11:20 - 12:40	昼休み
第二部：日本市場と観光開発	
12:45 - 12:50	午後の部開始の挨拶/日本側講師紹介
12:50 - 13:15	青海省の観光地紹介 青海省旅遊局 局長 呉 大偉
13:15 - 13:35	青海省の取り組みの詳細/PR ポイントに関するインタビュー トラベルジャーナル株式会社 上野 良子
13:35 - 13:40	青海省旅遊局による土産物紹介
13:40 - 14:00	日本における海外旅行のトレンド/団体客誘致について 株式会社ケイアイイーチャイナ 郷家 達
14:00 - 14:20	日本における登山・トレッキングツアー市場について アルパインツアーサービス株式会社 芹沢 健一
14:20 - 14:35	ディスカッション、質疑応答
14:35 - 14:40	閉会挨拶

(敬称略、時間は中国時間)

## (2) セミナーの目的と概要

セミナーの目的は、2005年8月に実施したC/P本邦研修で青海省旅遊局職員が得た情報や経験を他旅遊局職員やその他関係者と共有し、日本での成功例の青海省における適用可能性について討議することである。もう一つの目的は、日本の海外旅行の現状や日本人観光客の特徴について見聞を広め、また日本の旅行業者と意見交換を行うことによって日本のマーケットに関して知見を深めることである。

第一部では、「観光開発と環境保全ー北海道の事例紹介」として、北海道阿寒地区における環境に配慮した観光開発、及び阿寒湖・釧路湿原・弟子屈・中標津各エリアの連携によるルート運営体制について講義がなされ、その後活発な質疑応答が行われた。

第二部は、日本の大手旅行社、SIT<sup>50</sup>旅行社、及び旅行専門雑誌社により、日本マーケットに関して異なる立場からの講義がなされた。青海省からのプレゼンテーション、及び両者によるディスカッション時間も含め、双方向性の高い内容となった。

## (3) セミナーの成果

本セミナーは中国側参加者から好評を得ることができ、参加者に対するアンケートでの平均点は4.4であった（最高点5点、最低点1点として評価）。また、下記のコメントが得られた。

- 講義内容は実践的であった。
- 相互交流が図れ、有意義であった。
- 資料が良く準備されていた（豊富な内容、重要ポイント・達成すべき結果の明示等）。

### 3.3 技術移転セミナー

本調査のドラフトファイナルレポートについて青海省内の観光関係者で情報を共有し、幅広く意見交換することと技術移転を目的としたワークショップを開催した。ワークショップには、青海省旅遊局職員を始めとする青海省内の各市州県の行政関係者、ホテル従業員など旅行・観光業従事者、大学職員など約150名が参加した。

---

<sup>50</sup> SIT (Special Interest Tour) : 観光旅行のなかで、特別な興味、形態、目的をもって設定される旅行。

**(1) セミナーのプログラム**

- 日時：2006年5月29日
- 場所：青海省勝利賓館九号楼会議庁
- 参加者人数：約150名
- プログラム：

時 間	内 容
8:30 - 9:00	受付
9:00 - 9:10	開会挨拶 青海省旅遊局
9:10 - 9:40	発表1：青海省環西寧圏総合観光開発計画調査の計画技術上の要点 発表2：開発基本戦略と環西寧圏観光開発マスタープランの内容説明 JICA 調査団
9:40 - 9:55	発表3：カンブラ公園・李家峡地区の観光開発について 黄南州旅遊局長 劉氏
9:55 - 10:10	発表4：青海湖151基地の観光開発について 青海湖旅遊發展公司副總經理 苗氏
10:10 - 10:25	発表5：青海湖沙島地区の観光開発について 海北州海晏副県長 黄氏
10:25 - 11:40	質疑応答
12:00 - 12:10	閉会挨拶 青海省旅遊局

**(2) セミナーの概要**

JICA 調査団から本調査のドラフトファイナルレポートの内容について発表した後、優先プロジェクトの対象地域の観光開発について、各地域の担当者（黄南州旅遊局長劉氏、青海湖旅遊發展公司副總經理苗氏、海北州海晏副県長黄氏）からそれぞれ発表がなされた。

質疑応答では、観光開発に係る自然環境保全や地元住民の生活、近隣省市自治区と連携した青海省の観光開発などについて、参加者と JICA 調査団、及び旅遊局職員の間で活発な議論が交わされ、セミナー開催の当初の目的が達成できた。特に、優先プロジェクト対象地域の観光開発に直接携わる担当者の参加が得られ、他地域の関係者も含めて今後の観光開発に向けた意見交換、及び議論をすることができた。

## 付録 4 観光需要予測（本編 3.1）

### 4.1 本調査における観光需要予測

#### 4.1.1 観光需要予測の必要性

観光需要予測は、観光に係る将来の展望や状況を議論する上で重要なものであり、例えば下記を推定、予測する際に用いられる。

- 1) 将来の観光収入見込み
- 2) 観光分野の発展を加速するための政策や投資規模の優先付け（観光開発やインフラ整備に係る政策や投資など）
- 3) 必要となる宿泊施設や観光サービス部門の規模（ホテル、旅行代理店など）
- 4) 観光部門労働者数、観光部門に従事する人材を育成する教育施設や学校の規模

青海省旅遊業發展与布局総体計画（2000）では、青海省への将来の旅行者数が表 4.1.1 のように予測されている。

表 4.1.1 インバウンド旅行者数の予測

	2004	2005	2010	2015	2020
国内旅行者数（百万人）	-	5.00	10.00	-	20.00
国内旅行者数の年増加率	-	-	15%	-	7%
外国人旅行者数（千人）	29.00	100.00	250.00	-	600.00

出所 青海省旅遊業發展与布局総体計画（2000）

#### 4.1.2 本調査における将来予測モデル

表 4.1.1 にて示した青海省旅遊業發展与布局総体計画（2000）による予測は非線形回帰モデルから導出されたものであり、1995 年から 1999 年の観光入り込み客数に基づいている。青海省へのインバウンド旅行者は、国内旅行者が外国人旅行者よりも圧倒的に多く、中でも青海省居民（青海省内居住者）による省内旅行者が国内旅行者の約 8 割を占めている。本調査では、省内旅行者と省外旅行者を区別し、可能な限り現実に即した将来予測をするため、省内旅行者のトリップ生成が省外旅行者と分離できるという仮定の下、より詳細なモデル分析を行った。

将来旅行者数を予測するためのモデル構造については後述するが、本調査で用いた予測モデルには下記に挙げるデータの不足や設定した仮定など不十分な点も含んでいる。

- 2001 年以前の国内旅行者数の内訳（省内旅行者数と省外旅行者数のデータがない）
- 省外旅行者数（上位 10 省市自治区のデータしかなく、それ以外は「その他」として集約されている）
- 省市自治区別の都市・農村別の GDP（都市部の GDP が高い地域の居住者の方がより旅行機会が多いと考えられるが、省市自治区の都市・農村別 GDP に関する十分なデータが得られない）

- 省市区別の都市人口と農村人口の割合（都市人口の割合が高い地域からの方が青海省への旅行者数も多いと推測されるが、省市区別の都市人口と農村人口の割合に係る十分なデータが得られない）
- 省市区別のアウトバウンド旅行者数（アウトバウンド旅行者数が多い省市区からの方が、青海省への旅行者数が比較的多いと推測されるが、データの不足によりモデルへの適用が困難）
- 省市区別の GDP 成長率（本調査では中国全体の GDP 成長率を基に各省市自治区の将来の予測 GDP 成長率を算出しているが、各省市自治区の GDP 成長率をそれぞれ用いる事ができれば、より精度の高い将来予測が可能となる）
- 青蔵鉄道に関する仮定（省外旅行者数の将来予測において青蔵鉄道の運行頻度や車両台数などの仮定を設定しているが、青蔵鉄道は現時点で運行開始前であり、実際に運行された場合に設定した仮定とは異なる可能性がある）

以上、本調査で用いる予測モデルの不十分な点を挙げた。しかしながら、本調査では現在入手可能なデータの範囲で最も適合するモデルを用い、青海省旅遊業發展与布局総体計画（2000）での将来予測よりも厳格に、そして科学的に分析を行っている。適用したモデルは、2020 年までの青海省、及び中国の社会経済状況を踏まえたより現実的なモデルとなっていると考える。

## 4.2 青海省への国内旅行者数の将来予測

### 4.2.1 青海省への国内旅行者数

青海省旅遊局（観光局）は、青海省への国内旅行者を次の3つに分類している。

- 青海省居民（青海省内居住者）による宿泊旅行者
- 青海省居民による日帰り旅行者<sup>51</sup>
- 省外からの旅行者

表 4.2.1 は、近年の青海省への国内旅行者数の推移を示したものである。ここでは、青海省居民によるトリップは「省内旅行者」、省外からの旅行者は「省外旅行者」と表している。

2001 年から 2004 年の青海省へのインバウンド国内旅行者数は年平均 11.3% の割合で増加しており、2004 年は 509 万人であった。2003 年の SARS の影響が無ければ、この数字はより増大していたと予想される（2002 年から 2003 年は 5.7% 減少している）。また、日帰り旅行者は省内旅行者全体の約 4 分の 3 を占め、国内旅行者全体の 6 割以上を占めている。

<sup>51</sup> 例えば甘肅省の人々が青海省を日帰りで観光する事も可能だが、日帰り旅行者の大部分は青海省内に居住する人々であり、本調査では日帰り旅行者は全て青海省内居住者として扱う。

表 4.2.1 青海省へのインバウンド国内旅行者数

(上段：旅行者数(人)、下段：対前年増加率(%))

年	省内旅行者			省外旅行者	合計
	宿泊旅行者	日帰り旅行者	合計		
2001	764,000	2,460,000	3,224,000	474,000	3,698,000
	-	-	-	-	-
2002	870,000	2,780,000	3,650,000	530,000	4,180,000
	13.9	13.0	13.2	11.8	13.0
2003	816,000	2,622,000	3,438,000	505,000	3,943,000
	-6.2	-5.7	-5.8	-4.7	-5.7
2004	1,136,300	3,260,200	4,396,500	695,500	5,092,000
	39.3	24.3	27.9	37.7	29.1
2001年-2004年の 年平均増加率(%)	14.1	9.8	10.9	13.6	11.3

\* 日帰り旅行者は全て青海省内居住者とみなしている。

出所 青海省旅遊局計画財務室：青海省旅遊統計便覧

表 4.2.2 は、省市自治区別の青海省へのインバウンド旅行者数を示したものである。

表 4.2.2 省市自治区別の青海省へのインバウンド国内旅行者数

順位	2002		2003		2004	
	省市 自治区	旅行者数(人) 割合(%)	省市 自治区	旅行者数(人) 割合(%)	省市 自治区	旅行者数(人) 割合(%)
1	北京	95,400	北京	70,700	広東省	97,370
		18.0		14.0		14.0
2	広東省	83,740	広東省	65,650	北京	90,415
		15.8		13.0		13.0
3	上海	36,040	上海	40,400	上海	55,640
		6.8		8.0		8.0
4	四川省	25,970	甘肅省	30,300	甘肅省	41,730
		4.9		6.0		6.0
5	寧夏回族 自治区	22,790	寧夏回族 自治区	25,250	寧夏回族 自治区	34,775
		4.3		5.0		5.0
6	河南省	21,730	新疆ウイグ ル自治区	15,150	新疆ウイグ ル自治区	20,865
		4.1		3.0		3.0
7	陝西省	21,200	陝西省	14,645	陝西省	20,170
		4.0		2.9		2.9
8	甘肅省	19,610	浙江省	13,635	浙江省	18,779
		3.7		2.7		2.7
9	山東省	16,960	江蘇省	13,130	江蘇省	18,083
		3.2		2.6		2.6
10	浙江省	13,250	福建省	9,595	福建省	13,215
		2.5		1.9		1.9
	その他	173,310	その他	206,545	その他	284,460
		32.7		40.9		40.9
	合計	530,000	合計	505,000	合計	695,500
		100		100		100

\* 2001年に関してはデータが無く、また「その他」に含まれる省・地域の内訳に関するデータは得られていない。

出所 青海省旅遊局計画財務室：青海省旅遊統計便覧



### 4.2.2 省内旅行者数の将来予測

#### (1) 将来予測モデル(省内旅行者)

- 例えば、日帰り旅行者は観光デスティネーションの近くに住んでいるため宿泊を必要としない、または経済的に宿泊する余裕が無いかもしれない。一方、宿泊旅行者は宿泊を要する距離に居住している、または近くでも経済的に宿泊できるかもしれない。このように、宿泊旅行者と日帰り旅行者は異なる要因を持っていると想定できる。しかし、両者に関するより詳細な情報が入手できないため、本調査では下記に示す2つの同じ要因に基づいて両者(宿泊観光旅行と日帰り観光旅行)のトリップが発生すると仮定する。
- 青海省の都市人口(青海省では、一般的に都市居住者は地方居住者よりも経済的に豊かであり、観光する機会も多い)
- 一人当たりGDP(一人当たりGDPは人々の豊かさを表す一つの指標であり、豊かさは観光や業務を目的としたトリップが発生させる要因である<sup>52</sup>)

本調査では、この2つの要因に基づいて多変量線形回帰モデルを定式化した<sup>53</sup>。省内旅行者に関して入手できるデータの限界もあって相関関係が低い結果となったが、モデル自体の一般的な論理や仮定は妥当であると考えられる。回帰モデルと2001年から2004年の省内旅行者数に係る回帰分析、分散分析等の結果を図4.2.1に示す。

回帰統計		y	=	$ax_1 + bx_2 + c$
重相関 R	0.99806787	y	=	省内旅行者数
重決定 R <sup>2</sup>	0.99613948	a	=	x <sub>1</sub> 係数
補正 R <sup>2</sup>	-0.007721	x <sub>1</sub>	=	青海省の都市人口(百万人)
標準誤差	414346.979	b	=	x <sub>2</sub> 係数
観測数	3	x <sub>2</sub>	=	青海省一人当たりGDP(元/人)
		c	=	切片 = 0 (人口/一人当たりGDP = 0)
		y	=	$0.56x_1 + 360.54x_2 + c$

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F
回帰	2	4.43E+13	221499	129.01617	#NUM!
残差	1	17168	171683		
合計	3	44472			

	係数	標準誤差	t 値	P-値	下限95%	上限95%	下限95.0%	上限95.0%
c	0	-	-	-	-	-	-	-
a	0.56	1.13	0.49	0.71	-13.85	14.97	-13.85	14.97
b	360.54	306.73	1.18	0.45	-3536.85	4257.93	-3536.85	4257.93

出所 JICA 調査団

図 4.2.1 将来予測モデル(省内旅行者)

<sup>52</sup> 都市居住者の一人当たりGDPを用いた方がより適切であると考えられるが、入手できる統計データに限界がある。

<sup>53</sup> 人口と一人当たりGDPがゼロの場合には観光トリップは発生しないため、切片をゼロと仮定。

## (2) 将来予測結果（省内旅行者）

図 4.2.1 に示した予測モデルによる省内旅行者数の将来予測結果は次のようになった。

- 2005 年の省内旅行者数は約 470 万人（一人当たり旅行回数は年 0.87 回）
- 2010 年の省内旅行者数は約 750 万人（一人当たり旅行回数は年 1.32 回）
- 2015 年の省内旅行者数は約 1,100 万人（一人当たり旅行回数は年 1.85 回）
- 2020 年の省内旅行者数は約 1,640 万人（一人当たり旅行回数は年 2.66 回）

2010 年の一人当たり旅行回数は年 1.32 回、同じく 2015 年は年 1.85 回、2020 年は年 2.66 回となったが、現在、及び推測される将来の経済社会状況を考えると、これらは楽観的な予測と言える。日本における 2004 年の一人当たりの国内旅行回数は年 1.47 回<sup>54</sup>であり、現在の青海省と日本の状況を比較した場合、青海省で年 1.47 回を超える旅行回数を想定する事は非現実的である。そのため、本調査における省内旅行者数の将来予測においては、青海省居民の平均旅行回数の上限を年 1.25 回と仮定する。上限を 1.25 回とした場合の予測結果が図 4.2.2 と表 4.2.3 である。

表 4.2.3 省内旅行者数の将来予測

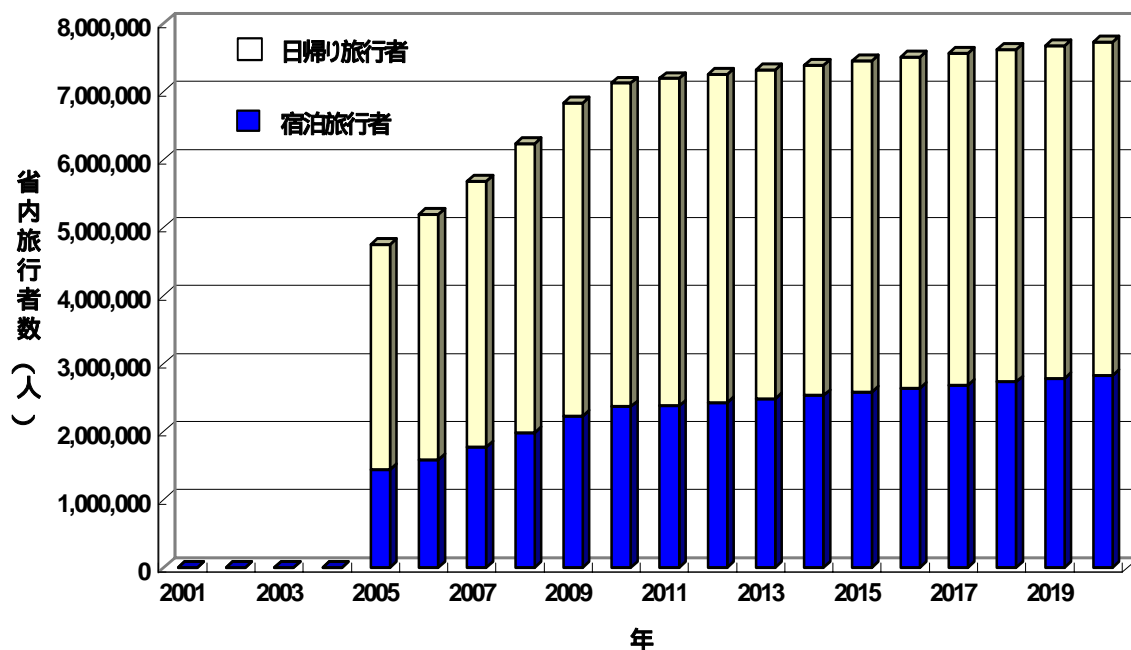
年	省内旅行者数（人）			割合		増加率		
	宿泊	日帰り	合計 <sup>A</sup>	宿泊 <sup>B</sup>	日帰り	宿泊	日帰り	合計
2001	764,000	2,460,000	3,224,000	23.7%	76.3%	-	-	-
2002	870,000	2,780,000	3,650,000	23.8%	76.2%	13.9%	13.0%	13.2%
2003	816,000	2,622,000	3,438,000	23.7%	76.3%	-6.2%	-5.7%	-5.8%
2004	1,136,300	3,260,200	4,396,500	25.8%	74.2%	39.3%	24.3%	27.9%
<b>2005</b>	<b>1,441,864</b>	<b>3,307,495</b>	<b>4,749,359</b>	<b>30.4%</b>	<b>69.6%</b>	<b>26.9%</b>	<b>1.5%</b>	<b>8.0%</b>
2006	1,583,061	3,611,106	5,194,167	30.5%	69.5%	9.8%	9.2%	9.4%
2007	1,774,160	3,912,650	5,686,810	31.2%	68.8%	12.1%	8.4%	9.5%
2008	1,987,544	4,245,125	6,232,669	31.9%	68.1%	12.0%	8.5%	9.6%
2009	2,225,778	4,611,961	6,837,738	32.6%	67.4%	12.0%	8.6%	9.7%
<b>2010</b>	<b>2,365,754</b>	<b>4,763,345</b>	<b>7,129,099</b>	<b>33.2%</b>	<b>66.8%</b>	<b>6.3%</b>	<b>3.3%</b>	<b>4.3%</b>
2011	2,377,420	4,816,357	7,193,777	33.0%	67.0%	0.5%	1.1%	0.9%
2012	2,430,051	4,828,991	7,259,042	33.5%	66.5%	2.2%	0.3%	0.9%
2013	2,482,274	4,842,625	7,324,899	33.9%	66.1%	2.1%	0.3%	0.9%
2014	2,534,083	4,857,270	7,391,353	34.3%	65.7%	2.1%	0.3%	0.9%
<b>2015</b>	<b>2,585,474</b>	<b>4,872,937</b>	<b>7,458,411</b>	<b>34.7%</b>	<b>65.3%</b>	<b>2.0%</b>	<b>0.3%</b>	<b>0.9%</b>
2016	2,636,444	4,875,133	7,511,577	35.1%	64.9%	2.0%	0.0%	0.7%
2017	2,684,721	4,880,401	7,565,122	35.5%	64.5%	1.8%	0.1%	0.7%
2018	2,732,181	4,886,867	7,619,049	35.9%	64.1%	1.8%	0.1%	0.7%
2019	2,778,837	4,894,523	7,673,360	36.2%	63.8%	1.7%	0.2%	0.7%
<b>2020</b>	<b>2,824,704</b>	<b>4,903,354</b>	<b>7,728,058</b>	<b>36.6%</b>	<b>63.4%</b>	<b>1.7%</b>	<b>0.2%</b>	<b>0.7%</b>

出所 JICA 調査団

A 一人当たり旅行回数の上限は 1.25 回/年（2010 年より）と仮定

B 宿泊旅行者数の割合の増加は 2001 年から 2004 年の年平均増加率と同じとし、一人当たり GDP の増加がトリップ発生に反映されるとして、各年の一人当たり GDP の増加率を乗じている。

<sup>54</sup> 国土交通省編：観光白書（2005）



出所 JICA 調査団

図 4.2.2 省内旅行者数の将来予測

#### 4.2.3 省外旅行者数の将来予測

##### (1) 将来予測モデル(省外旅行者)

省外旅行者数の将来予測では、下記に挙げる 3 つの仮定の下、省市自治区の人口、GDP、青海省との距離を観光トリップ発生の主要因として想定する<sup>55</sup>。

- 省市自治区の人口（人口が多い地域からの方がより多くの旅行者が青海省を訪れる）
- 省市自治区の GDP（経済的に豊かな地域からの方がより多くの旅行者が青海省を訪れる）
- 青海省との距離（青海省に近い地域ほどより多くの旅行者が青海省を訪れる）

表 4.2.4 と図 4.2.3、図 4.2.4 は、省市自治区別の青海省への旅行者数、人口、GDP を比較したものである。

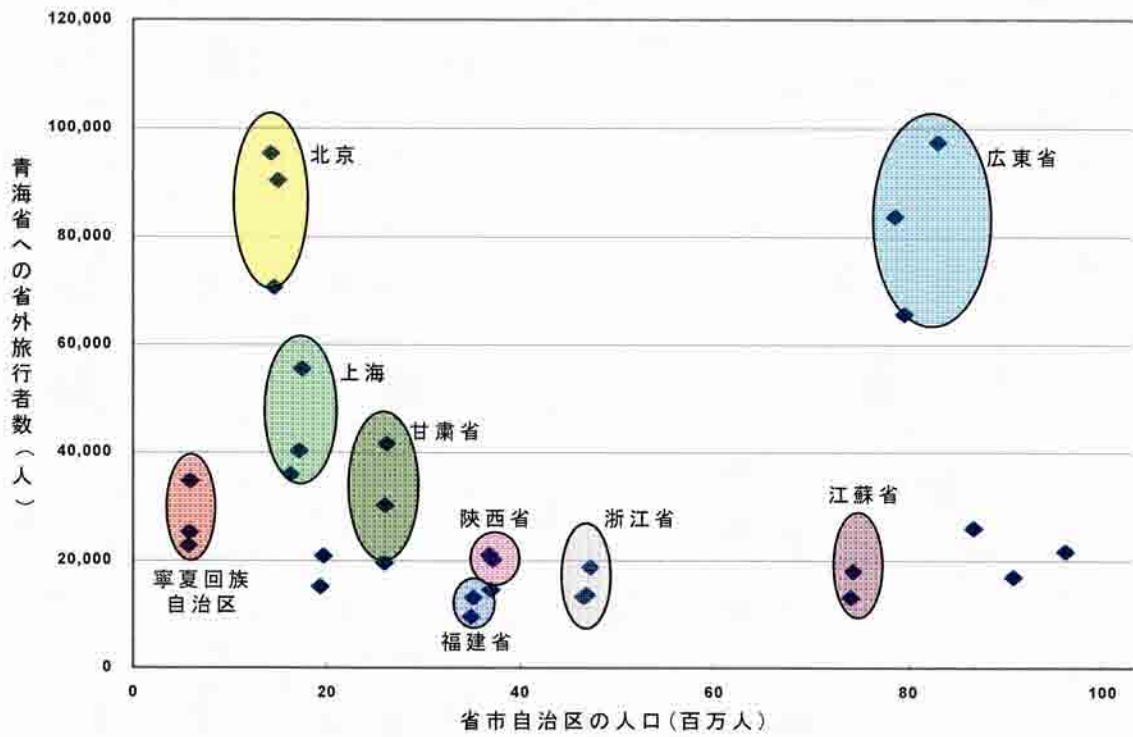
<sup>55</sup> 都市人口やアウトバウンド旅行者数も重要な要因として考えられるが、各省市自治区の都市人口比率に関するデータの入手には限界がある。

表 4.2.4 青海省への省外旅行者数と当該省市自治区の人口、及び GDP (2002 年 2004 年)

(単位 人口：百万人、GDP：億 RMB、旅行者数：人)

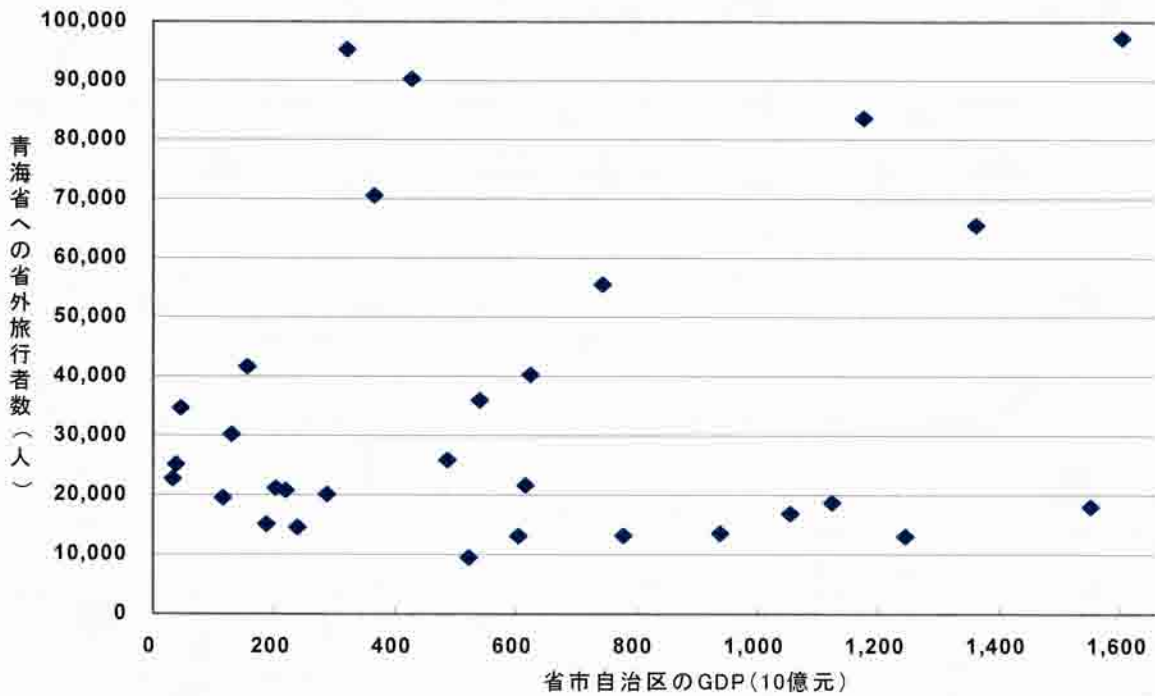
	2002				2003				2004			
	省/地域	人口 (百万人)	GDP (億 RMB)	旅行者数 (人)	省/地域	人口 (百万人)	GDP (億 RMB)	旅行者数 (人)	省/地域	人口 (百万人)	GDP (億 RMB)	旅行者数 (人)
1	北京	14.23	321.3	95,400	北京	14.56	366.3	70,700	広東省	83.04	1,604.0	97,370
2	広東省	78.59	1,177.0	83,740	広東省	79.54	1,362.6	65,650	北京	14.93	428.3	90,415
3	上海	16.25	540.9	36,040	上海	17.11	625.1	40,400	上海	17.42	745.0	55,640
4	四川省	86.73	487.5	25,970	甘肅省	26.03	130.5	30,300	甘肅省	26.19	155.9	41,730
5	寧夏回族 自治区	5.72	32.9	22,790	寧夏回族 自治区	5.80	38.5	25,250	寧夏回族 自治区	5.88	46.0	34,775
6	河南省	96.13	616.9	21,730	新疆ウイグ ル自治区	19.34	187.8	15,150	新疆ウイグ ル自治区	19.63	220.0	20,865
7	陝西省	36.74	203.6	21,200	陝西省	36.90	239.9	14,645	陝西省	37.05	288.4	20,170
8	甘肅省	25.93	116.1	19,610	浙江省	46.80	939.5	13,635	浙江省	47.20	1,124.3	18,779
9	山東省	90.82	1,055.2	16,960	江蘇省	74.06	1,246.1	13,130	江蘇省	74.33	1,551.2	18,083
10	浙江省	46.47	779.6	13,250	福建省	34.88	523.2	9,595	福建省	35.11	605.3	13,215
	その他	-	-	173,310	その他	-	-	206,545	その他	-	-	284,460
	合計	-	-	530,000	合計	-	-	505,000	合計	-	-	695,500

出所 中国国家统计局ウェブサイト：<http://www.stats.gov.cn/>



出所 中国国家统计局ウェブサイト、青海省旅游局資料

図 4.2.3 省市自治区の人口と青海省への省外旅行者数



出所 中国国家统计局ウェブサイト、青海省旅游局資料

図 4.2.4 省市自治区のGDPと青海省への省外旅行者数

図 4.2.3 と図 4.2.4 に示すデータは比較的散乱しているが、省市自治区 GDP と省外旅行者数には概ね正の相関がある。そして、プロットは直線関係にあるとみなせるとし、省外旅行者数の将来予測に線形モデルを用いた。

省市自治区のGDPと人口、及び青海省との距離の3つの要因を取り上げ、図 4.2.5 に示す多変量回帰モデルを定式化した<sup>56</sup>。このモデルは、青海省への直行航空便を有する省を表すダミー変数<sup>57</sup>と青海省の近隣省・自治区（甘肅省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区）を表すダミー変数を含んでいる。また、省市自治区のGDPがゼロ、または人口がゼロの場合には青海省への観光トリップは発生しないため、定数fはゼロとしている。

回帰統計		y	=	$ax_1 + bx_2 + cx_3 + f$
重相関 R	0.80	y	=	省外旅行者数
重決定 R <sup>2</sup>	0.64	a	=	x <sub>1</sub> 係数
補正 R <sup>2</sup>	0.57	x <sub>1</sub>	=	当該省市自治区のGDP（10億元）
標準誤差	26501.67	b	=	x <sub>2</sub> 係数
観測数	29	x <sub>2</sub>	=	当該省市自治区の人口（百万人）
		c	=	x <sub>3</sub> 係数
		x <sub>3</sub>	=	青海省との距離によるダミー変数（甘肅省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区、陝西省、四川省 = 1、その他 = 0）
		f	=	y切片（GDPまたは人口 = 0）
		y	=	$55.15x_1 - 295.77x_2 + 22,684.88x_3$

分散分析表

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F
回帰	3	3.18E+10	1.06E+10	15.093854	8.232E-06
残差	26	1.826E+10	7.02E+08		
合計	29	5.006E+10			

	係数	標準誤差	t 値	P-値	下限95%	上限95%	下限95.0%	上限95.0%
切片	0	#N/A	#N/A	#N/A	#N/A	#N/A	#N/A	#N/A
a	55.15	17.08	3.23	0.00	20.05	90.25	20.05	90.25
b	-295.77	274.32	-1.08	0.29	-859.64	268.10	-859.64	268.10
c	22684.88	9089.27	2.50	0.02	4001.61	41368.15	4001.61	41368.15

出所 JICA 調査団

### 図 4.2.5 将来予測モデル（省外旅行者）

2002 年から 2004 年のデータを適用した場合の重決定R<sup>2</sup>は 0.64 となり、まずまずの回帰モデルと言える。変数x<sub>1</sub>（省市自治区のGDP）と変数x<sub>3</sub>（青海省との距離）のt値はそれぞれ 3.23 と 2.50 となり、両変数は省外旅行者数を算出するこのモデルにおいて重要な変数とみなせる。一方、変数x<sub>2</sub>（省市自治区の人口）のt値は-1.08、係数は-295.77 であり、人口と旅行者数には負の相関があることを表している。つまり、人口が多い省市自治区からの方がより青海省への旅行者数は多いとい仮定に矛盾する結果となった。

そこで、省外旅行者数がある程度予測できるモデルとみなし得るものの、予測モデルの修正を試みた。

<sup>56</sup> チベット自治区についてはデータが入手できなかったため、近隣省・自治区のグループから除いている。

<sup>57</sup> 青海省への直行航空便を有する省の方がより観光トリップが生成しやすいという仮定に基づく。

## (2) 修正した将来予測モデル(省外旅行者)

修正した将来予測モデルでは、省市自治区の GDP の代わりに一人当たり GDP を用いた。的確な将来予測をする上で都市部の一人当たり GDP を用いた方が適切かもしれないが、入手できるデータが限られているため、ここでは省市自治区全体の一人当たり GDP を採用した。表 4.2.5 と図 4.2.6 は、省市自治区の一人当たり GDP と青海省への旅行者数について整理したものである。

表 4.2.5 省市自治区別の一人当たり GDP と青海省への旅行者数

(単位：一人当たり GDP (元/人)、旅行者数 (人))

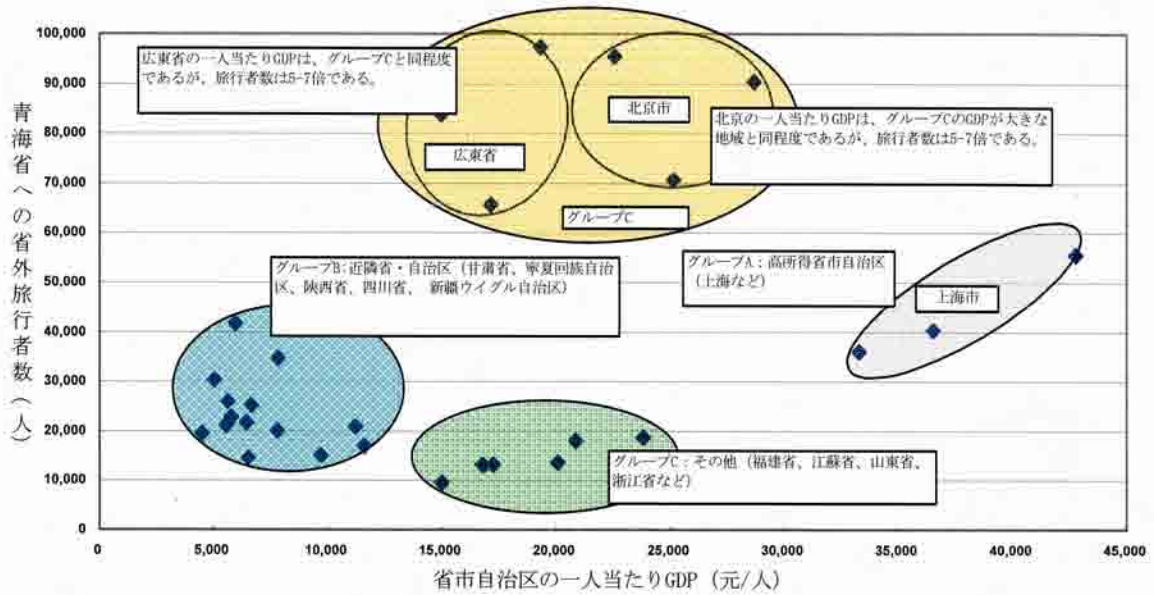
2002			2003			2004		
省市自治区	一人当たり GDP	旅行者数	省市自治区	一人当たり GDP	旅行者数	省市自治区	一人当たり GDP	旅行者数
北京	22,577.0	95,400	北京	25,151.7	70,700	広東省	19,315.4	97,370
広東省	14,976.1	83,740	広東省	17,130.4	65,650	北京	28,689.2	90,415
上海	33,284.7	36,040	上海	36,533.1	40,400	上海	42,768.7	55,640
四川省	5,621.0	25,970	甘肅省	5,011.3	30,300	甘肅省	5,952.3	41,730
寧夏回族自治区	5,756.6	22,790	寧夏回族自治区	6,640.4	25,250	寧夏回族自治区	7,828.2	34,775
河南省	6,417.1	21,730	新疆ウイグル自治区	9,708.4	15,150	新疆ウイグル自治区	11,208.4	20,865
陝西省	5,541.5	21,200	陝西省	6,501.1	14,645	陝西省	7,782.7	20,170
甘肅省	4,479.1	19,610	浙江省	20,076.7	13,635	浙江省	23,819.9	18,779
山東省	11,618.7	16,960	江蘇省	16,825.7	13,130	江蘇省	20,869.6	18,083
浙江省	16,776.4	13,250	福建省	15,000.5	9,595	福建省	17,240.4	13,215
その他	-	173,310	その他	-	206,545	その他	-	284,460
合計	-	530,000	合計	-	505,000	合計	-	695,500

出所 中国統計局、青海省旅遊局

図 4.2.6 から、省市自治区別の一人当たり GDP と旅行者数の関係を大まかに次の 4 つのグループに分類する事ができる。

- グループ A：上海などの高所得省市自治区で青海省への旅行者数も比較的多い地域
- グループ B：青海省の近隣省自治区（甘肅省、寧夏回族自治区、陝西省、四川省、新疆ウイグル自治区）で、青海省への旅行者数がそれ程多くない地域
- グループ C：青海省への旅行者数は少なく、一人当たり GDP が 15,000 - 25,000 元/人の地域（福建省、江蘇省、山東省、浙江省など）
- グループ D：一人当たり GDP はグループ C と同程度であるが、旅行者数はグループ C の 5-7 倍の地域（北京市や山東省）

グループ D は多少ずれるものの、平均的に一人当たり GDP が大きい省市自治区は、青海省への旅行者数も比較的多いと言える。



出所 中国統計局、青海省旅遊局

図 4.2.6 省市自治区別の一人当たり GDP と青海省への省外旅行者数

図 4.2.7 に、省市自治区の GDP の代わりに一人当たり GDP を用いた予測モデルを示す。

回帰統計		y	=	$ax_1 + bx_2 + cx_3 + f$
重相関 R	0.84	y	=	青海省への省外旅行者数
重決定 R <sup>2</sup>	0.71	a	=	x <sub>1</sub> 係数
補正 R <sup>2</sup>	0.65	x <sub>1</sub>	=	当該省の一人当たり GDP (元/人)
標準誤差	23590.65	b	=	x <sub>2</sub> 係数
観測数	29	x <sub>2</sub>	=	省人口 (百万人)
		c	=	x <sub>3</sub> 係数
		x <sub>3</sub>	=	青海省との距離によるダミー変数 (甘肅省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区、陝西省、四川省=1、その他=0)
		f	=	y切片 (GDPまたは人口 = 0)
		y	=	$1.40x_1 + 189.42x_2 + 9,592.51x_3$

分散分析表

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F
回帰	3	35594286609	11864762203	21.3196002	4.545E-07
残差	26	14469493533	556518982		
合計	29	50063780142			

	係数	標準誤差	t 値	P-値	下限95%	上限95%	下限95.0%	上限95.0%
切片	0	-	-	-	-	-	-	-
a	1.40	0.31	4.47	0.00	0.75	2.04	0.75	2.04
b	189.42	119.64	1.58	0.13	-56.50	435.34	-56.50	435.34
c	9592.51	7285.86	1.32	0.20	-5383.78	24568.80	-5383.78	24568.80

出所 JICA 調査団

図 4.2.7 修正将来予測モデル

予測モデルは、当該省市自治区の一人当たり GDP (x<sub>1</sub>)、人口 (x<sub>2</sub>)、青海省との距離を表すダミー変数 (x<sub>3</sub>) の 3 つの変数で構成している。また、一人当たり GDP、または人口がゼロの場合には観光トリップは発生しないため、y 切片をゼロと仮定している。その結果、重決定 R<sup>2</sup> が 0.71 となり、R<sup>2</sup> から判断すると修正前のモデルと比較するとより適切なモデルであるとみなせる。



変数 $x_1$  (一人当たりGDP) のt値は 4.47 と大きい値となり、このモデルにおいて一人当たりGDPは大きな要因であると言える。 $x_2$  (人口) と $x_3$  (青海省との距離) のt値はそれぞれ 1.58 と 1.32 となり、これら 2 つの変数も比較的大きな要因であるとみなせる。修正モデルでの 3 つの変数は想定する仮定を裏付ける結果となり、本調査ではこの予測モデルを採用する事とする。他の説明変数も試してみたものの、これら 3 つの変数よりも重要とみなせるものはなかった、あるいは設定する仮定と矛盾を有するものであった。

なお、青海省への省外旅行者数の将来予測には将来の一人当たり GDP を算出する必要があるが、次のような仮定を設定して算出した。

まず、省市自治区の GDP の将来成長率が中国全体の GDP 成長率の予測に従うとし、2006 年から 2010 年は 8.0%、2011 年から 2020 年は 7.0%とした。2005 年の GDP 予測は、2000 年から 2004 年の省市自治区 GDP の平均成長率と同じとしている。

一方、省市自治区の将来人口は、2000 年から 2004 年の年平均人口増加率を求め、同期間の中国全体の年平均人口増加率 0.65%との比率を算出した。そして、この比率を中国全体の人口増加率の予測に掛け合わせ、各省市自治区の将来の人口増加率とみなした。中国全体の 2006 年から 2010 年の年平均人口増加率は 0.58%、2011 年から 2015 年は 0.56%、2016 年から 2020 年は 0.44%である。

### (3) 将来予測結果(省外旅行者数)

以上に示した将来予測モデルと仮定により予測した将来の省外旅行者数の予測結果は表 4.2.6 のようになった。

なお、この予測モデルには北京とラサを結ぶ青蔵鉄道開通による省外からの旅行者は含まれていないが、下記の仮定の下で青蔵鉄道利用による青海省へのインバウンド旅行者数を別途算出した。その結果、2007 年に青蔵鉄道によって発生する青海省への省外旅行者数は年間 912,500 人<sup>58</sup>となった。2010 年からの運行本数は片側 3 本、同じく 2015 年からは片側 4 本に増便されるというさらなる仮定を置くと、2010 年から 2014 年は年間約 137 万人、2015 年から 2020 年は年間約 183 万人となる<sup>59</sup>。

- 青蔵鉄道の開業：2007 年
- 一日の運行本数：片側 2 本
- 車両数：10
- 車両当たり 125 人乗車
- 乗客の半数は青海省外の居住者であり、青海省内で下車する。

青蔵鉄道利用者を含めた省外旅行者数は、2015 年で 333 万人、2020 年で 379 万人という予測結果となり、2005 年から 2010 年の年平均増加率は 23.0%、2010 年から 2015 年は 5.5%、2015 年から 2020 年は 2.6%となった。

<sup>58</sup> 125 人×10 車両×4 本×0.5 (乗客の半数) ×365 日

<sup>59</sup> なお、2006 年 4 月に一日の運行本数:片側 4 本、車両数:12 (1 等寝台車 2 両、2 等寝台車 6 両、座席 4 両)、定員: 824 名であることが明らかとなった。しかし、75%の乗客が青海省外の居住者であり、青海省内で下車すると仮定すると、2015 年までは表 4.2.6 の予想とほぼ一致する為、予測モデルをこのまま利用する。

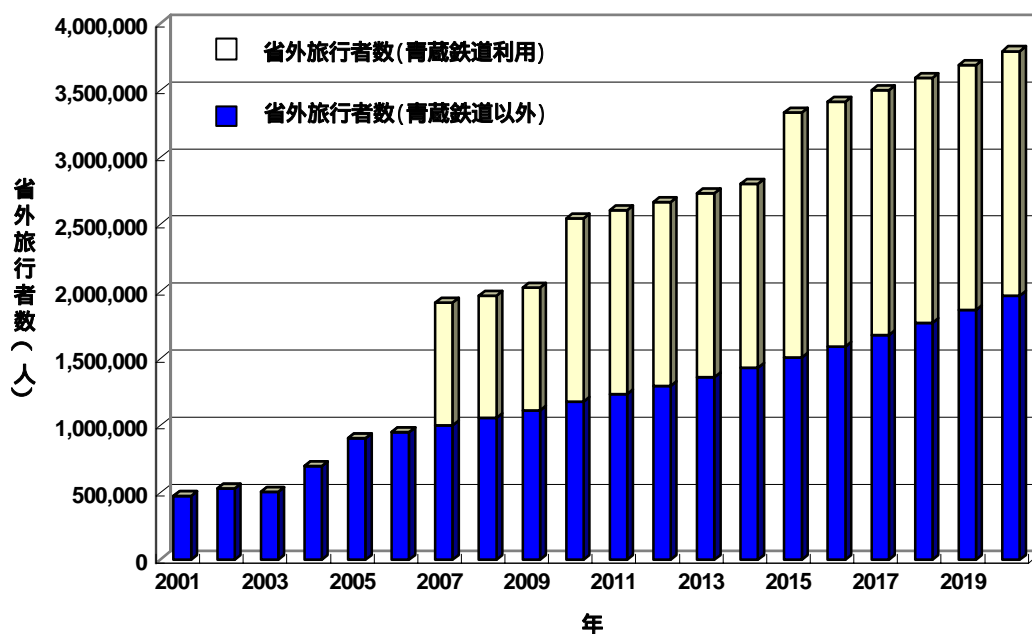
表 4.2.6 省外旅行者の将来予測

(旅行者数の単位：人)

年	省外旅行者数 (青蔵鉄道以外)	省外旅行者数 (青蔵鉄道利用)	省外旅行者 数合計	増加率 (青蔵鉄道以外)	増加率 (合計)
2001	474,000	0	474,000		
2002	530,000	0	530,000	11.8%	11.8%
2003	505,000	0	505,000	-4.7%	-4.7%
2004	695,500	0	695,500	37.7%	37.7%
<b>2005</b>	<b>904,726</b>	<b>0</b>	<b>904,726</b>	<b>30.1%</b>	<b>30.1%</b>
2006	951,481	0	951,481	5.2%	5.2%
2007	1,001,681	912,500	1,914,181	5.3%	101.2%
2008	1,055,585	912,500	1,968,085	5.4%	2.8%
2009	1,113,477	912,500	2,025,977	5.5%	2.9%
<b>2010</b>	<b>1,175,656</b>	<b>1,368,750</b>	<b>2,544,406</b>	<b>5.4%<sup>A</sup></b>	<b>23.0%<sup>A</sup></b>
2011	1,233,836	1,368,750	2,602,586	4.9%	2.3%
2012	1,295,779	1,368,750	2,664,529	5.0%	2.4%
2013	1,361,736	1,368,750	2,730,486	5.1%	2.5%
2014	1,431,974	1,368,750	2,800,724	5.2%	2.6%
<b>2015</b>	<b>1,506,778</b>	<b>1,825,000</b>	<b>3,331,778</b>	<b>5.1%<sup>B</sup></b>	<b>5.5%<sup>B</sup></b>
2016	1,587,387	1,825,000	3,412,387	5.3%	2.4%
2017	1,673,318	1,825,000	3,498,318	5.4%	2.5%
2018	1,764,929	1,825,000	3,589,929	5.5%	2.6%
2019	1,862,601	1,825,000	3,687,601	5.5%	2.7%
<b>2020</b>	<b>1,966,743</b>	<b>1,825,000</b>	<b>3,791,743</b>	<b>5.5%<sup>C</sup></b>	<b>2.6%<sup>C</sup></b>

A、B、C 2005 - 2010、2010 - 2015、2015 - 2020、それぞれの期間における年平均増加率

出所 JICA 調査団



出所 JICA 調査団

図 4.2.8 省外旅行者の将来予測

### 4.3 外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の将来予測

青海省への外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数は1990年代中頃から着実に増加しており、SARSの影響で2003年に落ち込んだものの、2004年には持ち直している。表4.3.1は、1995年から2004年までの青海省への外国人旅行者数と香港・マカオ・台湾からの旅行者数の推移を表したものである。ともにピークは2002年であり、1995年から2002年までの外国人旅行者の年平均増加率は9.9%、香港・マカオ・台湾からの旅行者数の年平均増加率は32.1%、外国人旅行者と香港・マカオ・台湾からの旅行者の合計では18.5%であった。SARSの影響があった2003年から2004年の増加を除き、最も増加率が高かったのは1999年から2000年であり、その期間の増加率は58.7%に達している。

表 4.3.1 青海省への外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の推移

(旅行者数の単位：人)

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
外国人旅行者数	9,852	7,533	9,449	10,049	9,745	14,579	18,295	19,110	7,715	12,358
香港・マカオ・台湾からの旅行者数	3,480	2,819	3,368	6,561	10,792	18,013	21,405	24,400	9,996	16,517
合計	13,332	10,352	12,817	16,610	20,537	32,592	39,700	43,510	17,711	28,875
年平均増加率		-22.4%	23.8%	29.6%	23.6%	58.7%	21.8%	9.6%	-59.3%	63.0%

出所 青海省統計局：青海統計年鑑2001、2002、2003、2004、2005

国別の外国人旅行者数を表4.3.2に示す。2002年から2004年にかけて、青海省への外国人旅行者は主に日本、フランス、アメリカからとなっている。2002年と2003年は日本が最多であったが、2004年はアメリカが最多となっている。

表 4.3.2 国別の青海省への外国人旅行者数

(旅行者数の単位：人)

順位	2002		2003		2004	
	国	旅行者数	国	旅行者数	国	旅行者数
1	日本	4,844	日本	1,668	アメリカ	2,264
2	シンガポール	2,639	アメリカ	841	日本	1,399
3	フランス	1,801	フランス	803	フランス	1,300
4	アメリカ	1,735	韓国	690	ドイツ	792
5	イギリス	1,476	シンガポール	609	韓国	678
6	カナダ	1,048	イギリス	483	イギリス	598
7	その他	943	モンゴル	473	カナダ	410
8	ドイツ	885	カナダ	379	オーストラリア	410
9	韓国	614	ドイツ	346	インドネシア	368
10	イタリア	372	ベトナム	241	イタリア	366

出所 青海省統計局：青海統計年鑑2001、2002、2003、2004、2005

表4.3.3は、青海省旅遊業發展与布局総体計画（2000）に示されている外国人旅行者数の将来予測である。

表 4.3.3 外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の将来予測 1

	2004*	2005	2010	2020
外国人旅行者数、及び 香港・マカオ・台湾からの旅行者数（人）	28,875	100,000	250,000	500,000
増加率（2004 - 2005）	246.3%		-	-
年平均増加率（2004 - 2010）	43.2%			-
年平均増加率（2004 - 2020）	20.8%			
年平均増加率（2010 - 2020）	-	-	9.1%	

\* 2004 年の数字は実績

出所 青海省観光開発総合計画（2000）

2004 年の実績値、及び 1995 年以降の増加率を考えると、2005 年の 10 万人、及び 2004 年からの増加率 246.3% という数字は非現実的であり、2010 年の予測値も大きく算出されている。一方、2020 年の予測値である 50 万人は、2004 年からの年平均増加率が 20.8% であれば良く、達成可能な数値と考える。20.8% という数字は、1995 年から 2002 年の年平均増加率（18.5%）よりも少し高いだけである。

以上を踏まえ、本調査では過去の実績に基づき、2010 年までの外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の増加を抑え、一方で 2010 年から 2020 年の増加率を増大させて将来の旅行者数を予測した。これは、2010 年頃には現在実施されている、また今後実施される観光開発がある程度完了し、観光デスティネーションとしての青海省の国際的な知名度が高まるという想定に基づいている。

表 4.3.4 外国人旅行者数、及び香港・マカオ・台湾からの旅行者数の将来予測 2

	2004*	2005	2010	2020
外国人旅行者数、及び 香港・マカオ・台湾からの旅行者数	28,875	50,000	175,000	500,000
増加率（2004 - 2005）	72.4%		-	-
年平均増加率（2004 - 2010）	34.9%			-
年平均増加率（2004 - 2020）	20.8%			
年平均増加率（2010 - 2020）	-	-	13.1%	

出所 JICA 調査団

#### 4.4 青海省へのインバウンド旅行者数の将来予測

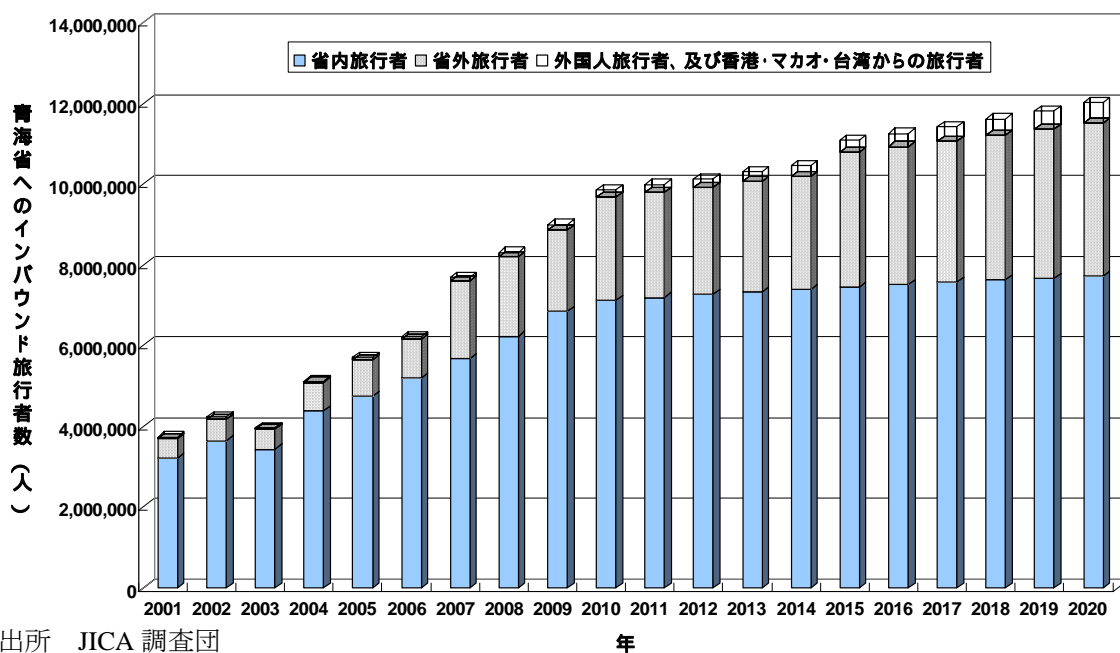
表 4.4.1 に、青海省へのインバウンド旅行者数の 2020 年までの将来予測をまとめる。青海省旅遊業發展与布局総体計画（2000）による推計よりも 2005 年は約 70 万人多くなっているが、2020 年では同計画の予測は約 1,025 万人、本調査の予測は約 985 万人となり、ほぼ同程度の予測結果となった。2020 年では、同計画による予測は 2,060 万人、本調査の予測は 1,202 万人である。

表 4.4.1 青海省へのインバウンド旅行者数

(単位：千人)

年	A 省内宿泊 旅行者	B 省内日帰 り旅行者	C=A+B 省内旅行 者合計	D 省外 旅行者	E 青蔵鉄道 による省 外旅行者	F=D+E 省外旅行 者合計	G=C+F 国内旅行 者合計	H 外国人 旅行者	I=G+H 青海省へ の旅行者
2001	764	2,460	3,224	474	0	474	3,698	40	3,738
2002	870	2,780	3,650	530	0	530	4,180	44	4,224
2003	816	2,622	3,438	505	0	505	3,943	18	3,961
2004	1,136	3,260	4,397	696	0	696	5,092	29	5,121
<b>2005</b>	<b>1,442</b>	<b>3,307</b>	<b>4,749</b>	<b>905</b>	<b>0</b>	<b>905</b>	<b>5,654</b>	<b>50</b>	<b>5,704</b>
2006	1,583	3,611	5,194	951	0	951	6,146	64	6,210
2007	1,775	3,912	5,687	1,002	913	1,914	7,601	83	7,684
2008	1,988	4,245	6,233	1,056	913	1,968	8,201	106	8,307
2009	2,226	4,612	6,838	1,113	913	2,026	8,864	136	9,000
<b>2010</b>	<b>2,366</b>	<b>4,763</b>	<b>7,129</b>	<b>1,176</b>	<b>1,369</b>	<b>2,544</b>	<b>9,674</b>	<b>175</b>	<b>9,849</b>
2011	2,378	4,816	7,194	1,233	1,369	2,603	9,796	194	9,991
2012	2,431	4,828	7,259	1,296	1,369	2,665	9,924	216	10,139
2013	2,483	4,842	7,325	1,362	1,369	2,730	10,055	240	10,295
2014	2,535	4,857	7,391	1,432	1,369	2,801	10,192	266	10,458
<b>2015</b>	<b>2,586</b>	<b>4,872</b>	<b>7,458</b>	<b>1,507</b>	<b>1,825</b>	<b>3,332</b>	<b>10,790</b>	<b>296</b>	<b>11,086</b>
2016	2,637	4,875	7,512	1,587	1,825	3,412	10,924	329	11,253
2017	2,685	4,880	7,565	1,673	1,825	3,498	11,063	365	11,428
2018	2,733	4,886	7,619	1,765	1,825	3,590	11,209	405	11,614
2019	2,779	4,894	7,673	1,863	1,825	3,688	11,361	450	11,811
<b>2020</b>	<b>2,825</b>	<b>4,903</b>	<b>7,728</b>	<b>1,967</b>	<b>1,825</b>	<b>3,792</b>	<b>11,520</b>	<b>500</b>	<b>12,020</b>

出所 JICA 調査団



出所 JICA 調査団

図 4.4.1 青海省へのインバウンド旅行者数

## 付録 5 自然環境調査 (本編 3.2)

### 5.1 調査目的

「環境管理と観光振興の融合」を全体戦略の一つに位置付けている本調査にとって、青海湖の水資源データ（水質や水位など）は不可欠なものである。自然環境調査の目的は、青海湖に流入する主な河川の水質や水位などの現状をできるだけ詳細に理解することにある。6月と10月の調査時点による水文データの分析によって水質と水位の季節的な変化を掌握し、これを利用して将来日増しに貴重になる水資源の管理方法に対して検討する。

### 5.2 調査対象地域

調査地域は青海湖、及び主な流入河川とする。



図 5.2.1 自然環境調査の調査対象地域

### 5.3 調査結果

調査結果を表 5.3.1 (6月) と表 5.3.2 (10月) に示す。

表 5.3.1 青海湖流域水質分析観測調査(6月)

番号	採水点	位置		採取時間	気温(°C)	水温(°C)	pH値	溶存酸素(mg/l)	電導率(μs/cm)	濁度(NTU)	大腸菌数(個数/l)	COD(mg/L)	総リン(mg/l)	総窒素(mg/l)	流量(m³/s)	風速(m/s)
		北緯	東経													
1	青海湖漁場	36°33.238′	100°39.253′	2005.6.26.10:36	16.5	16.0	9.1	6.8	>20,000	47	80	****	0.03	0.79		2.1
2	151基地	36°35.782′	100°29.036′	2005.6.26.11:40	18.0	18.1	9.1	6.7	>20,000	15.7	1,400	****	0.03	0.93		2.3
3	西南湾(1)	36°44.536′	99°47.725′	2005.6.26.14:53	16.5	17.7	9.1	7.1	13,200	96.2	≥24,000	****	0.05	1.52		3.1
4	西南湾(2)	36°50.236′	99°43.387′	2005.6.26.15:34	14.5	16.2	9.1	6.2	19,300	7.28	790	****	0.09	1.35		2.9
5	西北角	37°10.151′	99°45.592′	2005.6.26.19:21	14.5	13.9	9.1	6.3	>20,000	96.8	230	****	0.05	0.75		5.1
6	青海湖湖心	36°50.364′	100°15.121′	2005.7.11.12:00	18.5	17.5	9.1	6.8	>20,000	15.7	1,100	****	0.03	1.25		4.2
7	海心山休暇村	37°11.102′	100°06.924′	2005.6.28.10:40	13.0	14.9	9.2	9.2	14,100	16.3	5,400	****	0.04	0.96		2.7
8	青海湖湖東偏北	36°49.285′	100°45.077′	2005.6.28.16:00	20.0	19.0	9.0	6.0	>20,000	42.7	2,800	****	0.04	1.37		3.2
9	湖東種羊場	36°39.241′	100°44.326′	2005.6.28.17:48	21.0	20.2	9.1	6.1	19,600	65.9	490	****	0.03	1.02		0.8
平均值					17.0	17.1	9.1	6.8	>18,467	44.8	≥4,032	****	0.04	1.10		2.9
10	黒馬河	36°43.332′	99°46.972′	2005.6.26.14:08	16.5	16.5	7.9	6.9	462	1.3	16,000		0.07	4.15	0.419	2.2
11	切吉河	37°01.505′	99°42.982′	2005.6.26.16:28	15.5	16.0	8.6	5.8	383	77.6	2,400	***	0.02	0.77	9.6	5.1
12	布哈河水文站	37°02.216′	99°44.213′	2005.6.26.16:54	15.5	15.0	8.5	5.5	371	29.2	230	7.75	0.02	0.76	72.2	5.3
13	布哈河河口	36°57.558′	99°50.152′	2005.6.26.18:05	16.0	13.9	8.4	6.0	377	67.2	2,400	9.79	0.02	0.97	*	5.5
14	泉吉河	37°16.322′	99°53.912′	2005.6.26.19:54	9.0	10.4	8.3	6.5	334	1.01	230		<0.01	1.06	1.44	4.9
15	沙柳河(剛察)	37°19.385′	100°07.850′	2005.6.26.20:48	9.0	10.3	8.6	6.5	307	8.5	2,400	4.9	0.01	0.71	9.4	4.7
16	沙柳河上流	37°23.402′	100°06.178′	2005.6.28.12:12	15.5	10.5	8.6	6.8	239	29.5	2,200	7.34	0.04	0.91	**	1.2
17	哈尔盖河	37°13.212′	100°28.685′	2005.6.27.19:12	11.0	14.6	8.6	6.2	359	4.41	1,100	5.71	0.01	0.8	2.66	3.5
18	甘子河	37°09.422′	100°32.344′	2005.6.28.14:18	22.5	18.5	8.7	5.5	275	63.2	230	6.12	0.04	0.97	0.406	4.3
19	倒淌河	36°34.546′	100°44.851′	2005.6.28.20:00	20.0	17.9	8.9	10.1	1270	11.4	50	47.3	0.02	0.99	0.5	1.3
平均值					15.1	14.4	8.5	6.6	438	29.3	2724	12.70	<0.03	1.21	12.08	3.8

表 5.3.2 青海湖流域水質分析観測調査 (10月)

番号	採水点	位置		採取時間	気温 (°C)	水温 (°C)	pH 値	溶存酸素 (mg/l)	電導率 ( $\mu$ s/cm)	濁度 (NTU)	大腸菌数 (個数/l)	COD (mg/L)	総リン (mg/l)	総窒素 (mg/l)	流量 (m <sup>3</sup> /s)
		北緯	東経												
1	青海湖漁場	36°33.238′	100°39.253′	2005.10.19.10:13	6.0	8.3	9.3	6.9	19,600	2.4	0	2.7	0.02	0.80	
2	151基地	36°35.782′	100°29.036′	2005.10.19.10:54	6.5	8.0	9.3	7.5	19,000	15.0	0	2.0	0.04	0.63	
3	151基地埠頭	36°35.167′	100°29.950′	2005.11.01.10:16	4.5	8.2	9.4	7.7	19,700	2.6	0	2.3	0.01	0.59	
4	西南湾 (1)	36°44.536′	99°47.725′	2005.10.19.12:50	7.5	9.0	9.5	7.1	17,400	3.1	0	2.7	0.04	1.54	
5	西南湾 (2)	36°50.236′	99°43.387′	2005.10.19.13:35	9.0	8.3	9.3	8.2	10,800	5.3	0	1.9	0.02	1.38	
6	西北角	37°10.151′	99°45.592′	2005.10.19.18:10	5.5	7.6	9.3	7.9	18,000	2.4	0	3.5	0.04	0.78	
7	青海湖湖心	37°11.783′	99°49.8447′	2005.10.19.18:34	5.0	6.3	9.3	7.4	17,900	>100	0	3.4	0.09	0.65	
8	海心山休暇村	37°11.102′	100°06.924′	2005.10.20.13:00	4.5	7.7	9.3	6.5	15,600	2.4	0	2.6	0.04	0.99	
9	青海湖湖東偏北	36°49.285′	100°45.077′	2005.10.21.11:33	2.0	3.0	9.4	7.8	>20,000	1.2	0	3.3	0.02	1.37	
10	湖東種羊場	36°39.241′	100°44.326′	2005.10.21.13:48	3.0	4.8	9.3	7.6	19,200	5.8	0	2.9	0.02	1.06	
平均值					5.4	7.1	9.3	7.5	>17,720	>14.0	0	2.7	0.03	0.98	
11	黒馬河	36°43.332′	99°46.972′	2005.10.19.12:00	7.5	3.7	8.5	8.2	580	<0.5	0	15.7	0.01	1.57	0.809
12	切吉河	37°01.505′	99°42.982′	2005.10.19.14:22	9.0	7.9	8.0	6.4	430	1.7	0	0.39	0.01	0.80	0.541
13	布哈河水文站	37°02.216′	99°44.213′	2005.10.19.14:56	7.5	6.7	8.4	7.5	437	2.7	0	4.31	0.01	0.78	42.0
14	布哈河河口	36°57.558′	99°50.152′	2005.10.19.17:20	7.0	6.8	8.7	7.6	867	2.0	0	11.4	0.01	0.99	
15	泉吉河	37°16.322′	99°53.912′	2005.10.19.19:10	4.5	6.1	8.6	7.7	401	0.5	0	2.74	0.01	0.90	2.23
16	沙柳河 (剛察)	37°19.385′	100°07.850′	2005.10.20.08:25	-1.5	1.3	8.5	8.5	391	1.1	0	6.27	<0.01	0.87	15.8
17	沙柳河上流	37°23.402′	100°06.178′	2005.10.20.16:00	6.5	6.4	8.5	7.3	460	1.4	0	6.27	0.01	0.92	
18	哈尔盖河	37°13.212′	100°28.685′	2005.10.21.09:14	-1.5	1.0	8.4	8.6	421	1.1	0	2.35	0.01	0.82	4.79
19	甘子河	37°09.422′	100°32.344′	2005.10.21.09:47	0.5	0.0	8.5	8.5	346	3.1	0	12.2	0.01	1.03	0.197
20	倒淌河	36°34.546′	100°44.851′	2005.10.21.15:21	7.0	3.0	8.6	7.9	1,050	1.5	0	3.7 (CODMn)	0.02	1.03	0.186
平均值					4.7	4.3	8.5	7.8	538	<1.7	0	6.85 (不含 CODMn)	<0.01	0.97	4.65



## 5.4 分析結果

表 5.4.1 に、調査での指標と分析結果解析を整理する。

表 5.4.1 指標と分析結果解析

指標	見本タイプ	分析結果解析
気温	湖水	10月の値は6月より低い。
	川水	10月の値は6月より低い。
水温	湖水	10月の値は6月より低い。主に気温の影響を受ける。
	川水	10月の値は6月より低い。主に気温の影響を受ける。
pH 値	湖水	6月、10月両調査時点の差が大きい。主に湖に補給する水の量と気温の影響。
	川水	6月、10月両調査時点の差が大きい。主に水量、流速、気温の影響を受ける。
溶存酸素	湖水	両調査時点の差が大きい。主に気温、気圧、及び湖面風浪の影響を受ける。
	川水	気温の影響が大きく、10月の値がやや大きい。
電気伝導率	湖水	6月、10月両調査時点の差は小さく、主に湖水のイオン含有量の影響。
	川水	6月、10月両調査時点の差は小さく、主に湖水のイオン含有量の影響。
糞大腸菌数	湖水	全体的に6月は10月より多かった。その原因は6月に雨量が多く、牛と羊の糞は湖に入る量が比較的多いため。10月は降水量が少なくなって地表水の量も少ないため、湖に入る汚染物も少ない。
	川水	全体的に6月は10月より多かった。その原因は6月に雨量が大きく牛と羊の糞は湖に入る量が比較的多いため。10月に降水量は少なくなって地表水量も少ないため、湖に入る汚染物も少ない。
濁度	湖水	6月は全体的に高かった。主に風と波浪に関係している。影響の要因は、湖岸水中の地形、風と波浪による。沙陀寺の値が高いのは、水中に一つの沙峠があるため波浪の影響で濁度が高くなった。
	川水	10月は6月より全体的に小さい、その原因は渇水期に入って川水の量が少なく砂の量も少ない。
過マンガン酸カリ指標	湖水	10月に化学酸素必要の量(COD)が測定範囲を超えるため過マンガン酸カリの指標で入れ替わった。6月にこの指標の分析をしていないために比較することができない。この指標は水質汚染を表す。10月に測定した結果はこの指標の値が高くないので湖水の汚染が比較的小さいことを表明している。
COD	川水	両調査時点の差が小さい。水に入った汚染物の濃度と関係がある。倒淌川、黒馬川、布哈川口、甘子川は10月にこの指標が大きくなったのは渇水期に入って水量が少なくなった一方で、付近の住民が比較的に集中して生活しているため川に放流した汚染物が多い。
総リン	湖水	差が小さい。主に雨量の影響を受けている、しかし青海湖の容量が大きいため影響が少ない。沙陀寺の値は高いのが水中の泥が波浪で巻き上げられた結果である。
	川水	10月が6月と比べて小さいのは主に雨量の影響で、10月に降水量が少ないために土壌から浸出したリンが少ない。
総窒素	湖水	6月と10月の差は小さい。この指標は主に湖水に入った汚染物質と雨量などにより影響を受ける。6月と10月ともこの指標が高いのは、この時に青海湖に入った牛と羊の糞が多いため。
	川水	差は小さい。しかし各川水の値がやや高い。これは6月、10月川水に入った牛や羊の糞が多いため。10月に黒馬川、甘子川、倒淌川、哈尔蓋川でこの指標が大きくなった理由は、渇水時期に入って水量が少なくなり、牛や羊の糞の汚染と他の汚染物の濃縮した結果である。
流量	川水	影響の要因は上流の水量、気温、上流の降水量などであり、10月に全体的に小さいのは渇水期に入ったためである。

**その他のコメント**

- 80年代初めの青海湖の塩分は13g/Lだったが、2005年には16g/Lであり、青海湖の塩分は濃縮傾向にある。
- 観測地において、総窒素、総リン、pH、溶存酸素、過マンガン酸カリなどの指標は、いずれも地表水環境質量標準（表 5.4.2）のⅠ種標準値を越えていた。

**表 5.4.2 地表水環境質量標準の基本項目標準値**

(単位 : mg/L)

項目	Ⅰ種	Ⅱ種	Ⅲ種	Ⅳ種	Ⅴ種
1 水温 (°C)	週平均最大温度上昇≤1 週平均最大温度下降≤2				
2 PH 値	6 - 9				
3 溶存酸素 ≥	飽和率 90% (7.5)	6	5	3	2
4 過マンガン酸カリ指数 ≤	2	4	6	10	15
5 化学的酸素必要量 (COD) ≤	15	15	20	30	40
6 生物化学的酸素要求量 (BOD5) ≤	3	3	4	6	10
7 アンモニア (NH3-N) ≤	0.15	0.5	1.0	1.5	2.0
8 総リン (P 計) ≤ ( ) 内は湖・ダム湖の値	0.02 (0.01)	0.1 (0.025)	0.2 (0.05)	0.3 (0.1)	0.4 (0.2)
9 総窒素 (湖・ダム湖 N 計) ≤	0.2	0.5	1.0	1.5	2.0
10 銅 ≤	0.01	1.0	1.0	1.0	1.0
11 亜鉛 ≤	0.05	1.0	1.0	2.0	2.0
12 フッ素化合物 (F <sup>-</sup> 計) ≤	1.0	1.0	1.0	1.5	1.5
13 セレン ≤	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02
14 砒素 ≤	0.05	0.05	0.05	0.1	0.1
15 水銀 ≤	0.00005	0.00005	0.0001	0.001	0.001
16 カドミウム ≤	0.001	0.005	0.005	0.005	0.01
17 六価クロム ≤	0.01	0.05	0.05	0.05	0.1
18 鉛 ≤	0.01	0.01	0.05	0.05	0.1
19 シアン化物 ≤	0.005	0.05	0.2	0.2	0.2
20 揮発石炭酸 ≤	0.002	0.002	0.005	0.01	0.1
21 石油類 ≤	0.05	0.05	0.05	0.5	1.0
22 陽イオン表面活性剤 ≤	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3
23 硫化物 ≤	0.05	0.1	0.05	0.5	1.0
24 大腸菌数 (個数/L) ≤	200	2,000	10,000	20,000	40,000



## 付録6 アンケート調査（本編3.3）

### 6.1 観光客アンケート調査

#### 6.1.1 調査実施概要

2005年6月、西寧（青海省）、蘭州（甘肅省）、西安（陝西省）の空港や主要ホテルにおいて、7言語<sup>60</sup>で作成したアンケート用紙を用いた観光客アンケート調査を実施した。アンケート調査票（日本語）は「6.1.3 観光客アンケート調査票」に付す。

表 6.1.1 有効回答数

調査対象地	国内客	外国人客	計
西寧	373 (67.3%)	181 (32.7%)	554 (100.0%)
蘭州・西安	108 (43.9%)	138 (56.1%)	246 (100.0%)
計	481 (60.1%)	319 (39.9%)	800 (100.0%)

#### 回答者の属性

##### i. 性別

国内客と外国人客、ともに西寧での男性比率が比較的高くなっている。この理由の一つとして、西寧では業務・出張や会議・セミナーを旅行目的とする訪問者が多い事が考えられる。

表 6.1.2 性別

		男性	女性
国内客	西寧	66.6%	33.4%
	蘭州・西安	54.2%	45.8%
外国人客	西寧	63.5%	36.5%
	蘭州・西安	51.5%	48.5%

##### ii. 年齢層

**国内客：**西寧では、30 - 39歳の成年層がほぼ半数を占めるのに対し、蘭州と西安では20 - 29歳の若年層が約半数を占めている。蘭州と西安での女性比率の高さも勘案すると、これは観光客比率の高さに起因するものと推定する。

**外国人客：**西寧では40 - 49歳、及び50 - 59歳の中老年層が約6割を占め、蘭州と西安では20 - 29歳の若年層が半数を占めている。国内客での傾向がより鮮明に見てとれる。

表 6.1.3 年齢層

		20 - 29歳	30 - 39歳	40 - 49歳	50 - 59歳
国内客	西寧	27.8%	45.2%	18.5%	4.8%
	蘭州・西安	48.6%	22.4%	16.8%	7.5%
外国人客	西寧	8.8%	18.8%	34.8%	23.8%
	蘭州・西安	41.3%	23.2%	15.9%	9.4%

##### iii. 職業

**国内客：**西寧では「専門職・管理職」と「事務員・販売員」が多数を占めているのに対し、蘭州と西安では「公務員・外交官」と「学生」が多くなっている。

**外国人客：**西寧では「専門職・管理職」と「自営業」で半数強を占めるのに対して、蘭州と西安では「学生」が最多となっている。

<sup>60</sup> 中国語（簡体字）、中国語（繁体字）、日本語、韓国語、英語、フランス語、ドイツ語

表 6.1.4 職業

(上位5項目のみ記載)

		1	2	3	4	5
国内客	西寧	専門職・ 管理職 27.3%	事務員・ 販売員 25.4%	自営業 18.5%	公務員・ 外交官 9.6%	工員・ 農業 7.5%
	蘭州 西安	公務員・ 外交官 21.5%	学生 18.7%	自営業 15.0%	事務員・ 販売員 14.0%	専門職・ 管理職 11.2%
外国人客	西寧	専門職・ 管理職 27.1%	自営業 27.1%	退職者 13.8%	事務員・ 販売員 8.3%	公務員・ 外交官 6.6%
	蘭州 西安	学生 30.4%	その他 20.3%	事務員・ 販売員 14.5%	事務職・ 管理職 12.3%	自営業 8.0%

## 6.1.2 調査結果

## i. 青海省への訪問回数（西寧票のみ）

国内客：3 回目以上の訪問が比較的高い（30.7%）。業務・出張目的が多いことが、後述の旅行目的の結果からも裏付けられる。

外国人客：ほぼ予想された結果が得られた。3 回目以上は 6.7%にとどまっており、初めての訪問者が 7 割を超えている。

表 6.1.5 青海省への訪問回数

	1 回目	2 回目	3 回目以上
国内客	44.7%	24.6%	30.7%
外国人客	70.2%	23.2%	6.6%

## ii. 同行者

国内客：西寧、蘭州と西安、いずれにおいても、「友だち」「ひとり」が多い。西寧で「その他」が比較的多いのは、業務・出張目的（仕事の上司、同僚、相手先などが同行者）が多いことを反映したものと読み取れる。

外国人客：国内客と同様に「友だち」が最多であるが、「友だち」以外では西寧、蘭州と西安で傾向が異なる結果となった。

表 6.1.6 旅行の同行者

		1	2	3	4	5
国内客	西寧	友だち 43.6%	ひとり 20.3%	その他 16.0%	家族 11.8%	配偶者 8.3%
	蘭州 西安	友だち 43.9%	家族 18.7%	ひとり 17.8%	配偶者 10.3%	その他 9.3%
外国人客	西寧	友だち 52.5%	家族 14.4%	配偶者 13.3%	その他 13.3%	ひとり 6.5%
	蘭州 西安	友だち 45.7%	配偶者 18.1%	ひとり 15.2%	その他 10.9%	家族 10.1%

## iii. 旅行目的

国内客：西寧と蘭州、西安では、旅行目的に鮮やかな対比がみられる。西寧では「観光」が最多の 59.9%を占めるものの、「業務・出張」も 25.9%と比較的多い。一方、蘭州と西安では「観光」が 92.5%と圧倒的に多く、観光デスティネーションとしての西安と蘭州の高い知名度・魅力度を証明している。

外国人客：西寧では「観光」目的が大半を占めるが、国内客との対比では「会議・セミナー」目的が比較的多いことが注目される。蘭州と西安では観光が 83.3%と圧倒的な比率を占めているのに対してその他の旅行目的は極めて低く、国内客と類似している。

表 6.1.7 旅行目的

		1	2	3	4	5
国内客	西寧	観光 59.9%	業務・出張 25.9%	縁戚訪問 6.7%	会議・セミナー 6.2%	その他 1.3%
	蘭州 西安	観光 92.5%	業務・出張 2.8%	その他 2.9%	縁戚訪問 0.9%	会議・セミナー 0.9%
外国人客	西寧	観光 70.7%	業務・出張 15.5%	会議・セミナー 11.6%	その他 2.2%	縁戚訪問 0.0%
	蘭州 西安	観光 83.3%	その他 11.5%	縁戚訪問 2.2%	業務・出張 1.5%	会議・セミナー 1.5%

## iv. 観光形態

**国内客**：西寧と蘭州、西安で類似した傾向となっており、「自然・景観・エコツーリズム」型と「文化・歴史探訪」型で約7割を占めている。

**外国人客**：外国人客でも西寧と蘭州、西安で類似した傾向が読み取れるが、いずれも「文化・歴史探訪」型が最多となっている。

表 6.1.8 観光形態

		1	2	3	4	5
国内客	西寧	自然・景観・ エコツーリズム 39.2%	文化・歴史探訪 35.5%	高原避暑 11.8%	登山・探検・ 狩猟 6.0%	会議・セミナー 4.6%
	蘭州 西安	自然・景観・ エコツーリズム 37.8%	文化・歴史探訪 33.9%	高原避暑 13.0%	登山・探検・ 狩猟 11.8%	会議・セミナー 1.2%
外国人客	西寧	文化・歴史探訪 42.6%	自然・景観・ エコツーリズム 41.1%	登山・探検・ 狩猟 8.8%	高原避暑 4.2%	会議・セミナー 2.7%
	蘭州 西安	文化・歴史探訪 37.8%	自然・景観・ エコツーリズム 35.7%	登山・探検・ 狩猟 16.2%	高原避暑 8.1%	会議・セミナー 0%

## v. 青海省での滞在期間

青海省での滞在期間では、表 6.1.9 のような結果が得られた。

表 6.1.9 青海省での滞在期間

		1泊	2泊	3泊	4泊	5泊以上
国内客	西寧	18.0%	30.8%	22.5%	28.7%	0.0%
	その他市町村	51.4%	20.0%	28.6%	0.0%	0.0%
	青海省全体	7.7%	17.6%	20.9%	18.2%	35.6%
外国人客	西寧	3.3%	22.3%	26.3%	42.9%	0.0%
	その他市町村	35.7%	15.7%	48.6%	0.0%	0.0%
	青海省全体	3.3%	8.8%	15.5%	12.2%	60.8%

## vi. 有用な情報源（西寧のみ）

国内客：「友人・知人」がその他の項目を大きく引き離して34.5%となっている。世界のどの観光デスティネーションでも「友人・知人のすすめ」、いわゆる「口コミ（word of mouth）」が有効性の高い情報源であることが証明されているが、これが青海省でも確認できた。

外国人客：世界各国で有効性の高い「友人・知人」が低位にあることは、そもそも「口コミ」の元となる青海省への訪問経験を有する外国人が絶対的に少ないことを伺わせる。また、国内客と同様に「旅行会社」が低く、旅行会社の影響力の弱さを示唆している。

表 6.1.10 有用な情報源

	1	2	3	4	5
国内客	友人・知人 34.5%	雑誌・新聞 13.1%	ガイドブック 12.4%	ホームページ 12.2%	旅行会社 12.0%
外国人客	雑誌・新聞 29.0%	ガイドブック 22.7%	ホームページ 19.6%	友人・知人 17.4%	旅行会社 10.5%

## vii. 不足している情報（西寧票のみ）

不足していると感じる情報について示したものが表 6.1.11 である。国内客と外国人客とで差異が確認でき、今後の観光資料や情報の企画作成に貴重な指針となり得るものである。

表 6.1.11 不足している情報源

	1	2	3	4	5	6
国内客	交通機関 21.7%	観光地 観光案内 20.8%	地図 17.7%	土産品 15.5%	自由行動 娯楽 13.3%	ホテル レストラン 13.3%
外国人客	地図 26.9%	観光地 観光案内 21.4%	交通機関 18.6%	ホテル レストラン 14.9%	土産品 11.2%	自由行動 娯楽 6.5%

## viii. 観光目的地としての青海省の評価（西寧のみ）

国内客：どの評価項目でも「普通」が多く、「良い」が50%を越えたのは「観光地・観光施設」のみである。一方、「衛生状態」で「悪い」が突出している（これは中国全土の観光地に共通して指摘されている）。

表 6.1.12 観光目的地としての青海省の評価（国内客）

評価項目	良い	普通	悪い
都市の快適さ（アメニティ）	39.0%	57.2%	3.8%
安全・治安	39.8%	50.3%	9.9%
衛生状態（トイレなど）	15.5%	54.0%	30.5%
宿泊施設（ホテルなど）	44.7%	52.7%	2.6%
宿泊施設（ホテルなど）	44.7%	52.7%	2.6%
観光地・観光施設	52.7%	42.5%	4.8%
観光情報	16.9%	67.9%	15.2%
空港・鉄道駅	16.6%	69.0%	14.4%
観光客のもてなし（ホスピタリティ）	47.3%	48.4%	4.3%

**外国人客：**多くの評価項目で「普通」が圧倒的に多いものの、国内客とは明らかな差異が認められる。「都市の快適さ」では「良い」が71.8%と突出している。青海省のような中国内陸部で、西寧のような比較的大きな都市を期待していなかった外国人客の印象を反映したものと推測できる。一方で、「空港・鉄道駅」と「衛生状態」で「悪い」多くなっているが、中国全土、特に中国内陸部に共通するものである。

**表 6.1.13 観光目的地としての青海省の評価（外国人客）**

評価項目	良い	普通	悪い
都市の快適さ（アメニティ）	71.8%	27.6%	0.6%
安全・治安	34.3%	60.2%	5.5%
衛生状態（トイレなど）	40.9%	44.8%	14.3%
宿泊施設（ホテルなど）	45.3%	47.0%	7.7%
観光地・観光施設	43.7%	49.2%	7.1%
観光情報	41.4%	51.4%	7.2%
空港・鉄道駅	37.6%	43.6%	18.8%
観光客のもてなし（ホスピタリティ）	47.7%	44.0%	8.3%

**ix. 青海省再訪の意向（西寧票のみ）**

**国内客：**「はい」が69.0%と高いことは、今後の青海省観光に明るい期待を持たせるものと言えよう。

**外国人客：**元来再訪率があまり高くないと想定される外国人客で「はい」が高く、「いいえ」が1.7%と低いことは、青海省観光の外国人マーケティングに対する可能性を示すものとして注目される。

**表 6.1.14 青海省再訪の意向**

	はい	わからない	いいえ
国内客	69.0%	28.9%	2.1%
外国人客	55.8%	42.5%	1.7%

**x. 友人・知人へのすすめ（西寧票のみ）**

青海省観光を友人・知人へすすめるかという問いに対し、国内客、外国人客ともに「はい」が大多数を占めている。これは、「再訪の意向」で確認できた傾向と同様に、今後の青海省観光に望ましい結果である。

**表 6.1.15 友人・知人へのすすめ**

	はい	わからない	いいえ
国内客	80.8%	16.0%	3.2%
外国人客	93.4%	6.6%	0.0%

**xi. 青海省観光訪問の意向（蘭州・西安票のみ）**

国内客、外国人客で「はい」がそれぞれ86.9%、62.3%と高くなっており、青海省観光マーケティング強化の貴重な指針となる。

**表 6.1.16 青海省観光訪問の意向**

	はい	わからない	いいえ
国内客	86.9%	7.5%	5.6%
外国人客	62.3%	31.2%	6.5%

**xii. 青海省の観光宣伝を見たことはあるか（蘭州・西安票のみ）**

**国内客：**「はい」が56.1%と半数を超えているものの決して高いとは言えず、宣伝強化の必要性が伺われる。観光宣伝を見たメディアとしては、テレビが52.7%、新聞・雑誌が31.1%、広告が5.4%であった。

**外国人客：**国内客と異なり、基本的に短期滞在が主である外国人客の視認率は低いものと予想され、その通りの結果となった。観光宣伝を見たメディアでは、テレビが45.5%、新聞・雑誌が29.1%、広告が10.9%となり、国内客と同様の傾向であった。

**表 6.1.17 青海省の観光宣伝**

	はい	いいえ
国内客	56.1%	43.9%
外国人客	26.8%	73.2%



### 6.1.3 観光客アンケート調査票（青海省観光についてのアンケート）

以下、アンケート票の質問項目の箇所を抜き出して示す。

- Q-1 青海省をこれまでに訪れたことがありますか?  
 (1) 初めて (2) 2 度目 (3) 3 度目/それ以上
- Q-2 旅行の同行者:  
 (1) ひとり (2) 配偶者 (3) 家族 (4) 友だち (5) その他
- Q-3 旅行の目的:  
 (1) 観光 (2) 業務 (3) 縁戚・知人訪問 (4) 会議・セミナー  
 (5) その他 (記入 \_\_\_\_\_ )
- Q-4 Q-3 で (1) 観光 とお答えの方にかがいます。  
 観光の種類: 該当するものをいくつでも。  
 (1) 文化・歴史探訪 (タール寺、古城遺跡、清真寺など)  
 (2) 自然・景観・エコツーリズム (青海湖、鳥島、ココシリ草原など)  
 (3) 高原避暑  
 (4) 登山・探検・狩猟  
 (5) 会議・セミナー  
 (6) その他 (記入 \_\_\_\_\_ )
- Q-5 今回の旅行の日程:  
 1) 今回の中国旅行全体の日数 ( \_\_\_\_\_ 日)  
 2) 青海省での日数 (1) 1 泊 (2) 2 泊 (3) 3 泊 (4) 4 泊 (4) 5 泊以上  
 3) 西寧での日数 (1) 1 泊 (2) 2 泊 (3) 3 泊 (4) 4 泊以上  
 4A) 青海省のその他の町村  
 町村名: \_\_\_\_\_ (1) 1 泊 (2) 2 泊 (3) 3 泊以上  
 4B) 青海省のその他の町村  
 町村名: \_\_\_\_\_ (1) 1 泊 (2) 2 泊 (3) 3 泊以上
- Q-6 青海省来訪に一番役に立った情報源: 二つのみを選択  
 (1) 雑誌・新聞 (2) ガイドブック (3) ホームページ (4) 友人・知人  
 にすすめられて (5) 旅行会社 (6) その他 (記入: \_\_\_\_\_ )
- Q-7 青海省観光に不足している情報: 三つのみを選択  
 (1) 地図 (2) ホテル・レストラン (3) 交通機関  
 (4) 観光地・観光案内 (5) 土産もの (6) 自由行動・娯楽  
 (7) その他 (記入 \_\_\_\_\_ )
- Q-8 青海省観光の評価:
- |                 |    |    |      |
|-----------------|----|----|------|
| 1) 都市の快適さ       | 良い | 普通 | よくない |
| 2) 治安・安全        | 良い | 普通 | よくない |
| 3) 衛生環境 (トイレなど) | 良い | 普通 | よくない |
| 4) ホテル・宿泊       | 良い | 普通 | よくない |
| 5) 観光地          | 良い | 普通 | よくない |
| 6) 観光情報・案内      | 良い | 普通 | よくない |
| 7) 空港・鉄道駅       | 良い | 普通 | よくない |
| 8) サービス・応接態度    | 良い | 普通 | よくない |



## 6.2.2 調査内容

### (1) 青海省中国国際旅行社（青海省）

#### 中国国際旅行社の概要

- 旧中国国際旅行社（外国人インバウンド唯一の国営旅行社）が分割して設立
- 青海旅遊集団（旅行会社グループ）傘下の会社で、外国人と中国人の省内旅行、中国人の海外旅行を手配
- 従業員は60名（内訳は外連センター・インバウンド12名、出境センター・アウトバウンド10名、ガイド部30名（中国語21、英語8、フランス語1））
- バス20台を保有（旅遊汽車公司（観光バス会社）で型15台、ミニバス5台）
- カラー写真入りのモデル旅程集（日本語で17ページ、期間は7-12日間）を作成

#### インバウンド（欧米、香港、台湾、日本部の取り扱い）

- 2004年の取り扱い客は約2,500名（内アメリカ1,000名、台湾600名、ドイツ200名、フランス200名、日本100名、イタリア50名）
- 欧米客には12日間の青海高原2,200km走破ルート（北京～西寧～ゴルムド～ラサ～成都～北京）が人気。2004年7月中旬、日本から門源県の菜の花畑へツアー客60名
- 7月から8月が繁忙期
- ゴルムド～ラサ鉄道開通は省旅遊局と一体で販促努力する予定であり、期待している。北京や広州などでの旅行フェアに参加し、宣伝・販促に努めている。

#### インバウンド（国内部の取り扱い）

- 2004年の国内客は約5,500名（内広東（空路）、北京（鉄道）、上海（空路）、杭州（空路）、甘肅、西安、新疆（自家用車、バス）が西寧への主な交通手段）
- 2泊3日の旅程が大半で、タール寺、青海湖、土族民族村が見所
- 広東、北京、上海、杭州は旅行会社を通じての手配になるが、甘肅、西安、新疆は直接手配が大半

### (2) 青海交通旅行社（青海省）

#### 青海交通旅行社の概要

- バス会社が経営する子会社で1993年に開業
- 国内専業（中国人の青海省内旅行、青海省から中国内各地への旅行）
- 従業員17名（内9名はガイド免許所有）

#### インバウンド（中国各地から青海省へ）

- 2004年の取り扱い客は約4,500名（西安（鉄道）30%、江南（鉄道）25%、寧夏（自家用車・バス）10%、北京（空路・鉄道）10%）
- 2泊3日の旅程が大半でタール寺、青海湖、土族民族村が見所（パック価格780元）
- 4-6日の旅程ではチャカ塩湖、カンブラ国家森林公园等が入る。
- 6月から8月が繁忙期（5月上旬の中国の黄金週間も忙しい）
- 繁忙期は大型バスやホテル（2星-3星級）が不足（繁忙期に会議、イベント（自転車レース）が多く問題をより深刻にしている）

**アウトバウンド（青海省から国内各地へ）**

- 2004年の国内客は約400名（内訳、桂林、海南島、昆明など）
- 寒い11-12月、旧正月（2月）に暖かい中国南部に出かける休暇旅行が主

**(3) 青蔵高原鉄道国際旅行社（青海省）****青蔵高原鉄道国際旅行社の概要**

- 青蔵高原鉄道公司（鉄道会社）が経営する子会社で1992年に開業
- 国内専業（中国人の青海省内旅行、青海省から中国内各地への旅行）
- 従業員26名（内18名はガイド免許所有、4名は英語も可能）
- 6-10日間のモデル旅程集（黑白印刷で9ページ）を作成
- 日帰りツアーの料金
  - ・ 青海湖・日月山 188元
  - ・ 互助土族民俗村 88元
  - ・ 「青海小江南」～貴徳 120元
  - ・ カンブラ国家森林公园 210元

**インバウンド（中国各地から青海省へ）**

- 2004年の取り扱い客は約2,000名（上海（空路）40%、北京（鉄道）30%、広東（空路）20%）
- 2-4日の旅程が大半でタール寺、青海湖、土族民族村が主（価格は一日平均300元）
- 6月から8月が繁忙期
- 李家峡～カンブラ国家森林公园や都蘭付近のチベット族墳墓群など、アクセス道路の改良や高度化をしてもらいたい。

**(4) 青海中信旅遊公司（青海省）****青海中信旅遊公司の概要**

- 2000年開業の新しい会社
- 国内専業（中国人の青海省内旅行、青海省から中国内各地への旅行）
- 従業員12名でバス2台を所有（22人乗りと12人乗り）

**インバウンド（中国各地から青海省へ）**

- 2004年の取り扱い客は約3,000名（内訳、広東（空路）50%、江南（空路）30%、北京（空路）20%、上海（空路）20%、寧夏、内モンゴル、敦煌（自家用車・バス）
- 2泊3日の旅程が大半でタール寺、青海湖、土族民族村が見所
- 繁忙期の列車切符手配ではトラブルが多い。
- 青海省観光業の発展や省の観光収入増加のためにも、西寧発の列車切符を独占的に扱っている青蔵高原鉄道公司に対して、旅行会社への割り当てを少しでも優先するよう旅遊局から働きかけてもらいたい。

**アウトバウンド（青海省から国内各地へ）**

- 2004年の国内客は約4,000名（桂林、海南島、江東、上海など）
- 寒い11月から12月、旧正月（2月）に暖かい中国南部に出かける休暇旅行が主

**インバウンド・アウトバウンドのバランス**

- インバウンドよりアウトバウンドの方が旅行単価も高く、利幅も大きい。
- 国内景気の波動などもあり、両者のバランスを考えて経営している。

**(5) 青海省九州旅遊開発有限公司・青海九州旅行社（青海省）****青海省九州旅遊開発有限公司・青海九州旅行社の概要**

- 2000年開業の新しい旅行社
- 国内専業（中国人の青海省内旅行、青海省から中国内各地への旅行）。
- 従業員16名（全員ガイド免許所有）

**インバウンド（中国各地から青海省へ）**

- 2004年の取り扱い客は約2,600名（上海・南京（空路）45%、北京（空路）20%、広東（空路）20%）
- 2-3日の旅程が大半でタール寺、青海湖、土族民族村が見所（価格は2日間ツアーで540元）
- 7月から9月が繁忙期だが、5月上旬の中国の黄金週間はそれほど忙しくない。
- 繁忙期の問題は大型バス、ホテル（3星-4星級）、列車切符、ガイドの不足（特に団体客に手際良く対応できるホテルが限られている。）
- 中国国内でも青海省のイメージは青海湖のみで、旅遊局にはイメージの拡大・強化により努めてもらいたい。

**アウトバウンド（青海省から国内各地へ）**

- 2004年の国内客は約1,400名（桂林、海南島などに11日間のコース）
- 10月から旧正月（2月）がアウトバウンドのシーズン

**(6) 中国旅行社有限公司（青海省）****中国旅行社有限公司の概要**

- 全国展開している国営企業で、中国旅行社（国内客専門）の青海省支社が、観光自由化後に独立
- 青海省中国国際旅行社の独占だった外国人の国内旅行業務も認められた。
- カウンターには「旅遊投訴電話（観光苦情受け付け電話）」の案内板があり、入り口や受け付けでの対応も良い。
- 国内部、日韓部、欧米部の3部門からなる。

**市場・営業活動**

- 2004年取り扱い客数は約10,000人（内中国人7,700人（77%）、香港・マカオ・台湾1,500人（15%）、外国人800人（8%））

- 大都市・沿海部では北京、上海、広東が主で大半は空路を利用
- 近隣では陝西省（西安、空路・鉄道）、甘肅省（蘭州、バス・自家用車）、四川省（成都、空路・鉄道）が主
- 国内の代表的旅遊見本市に参加し、北京、広東、上海の旅行社にも定期的に営業を実施

### **国内客パッケージの代表例**

- 大都市・沿海部発（例は北京発）
  - 4-6日間の青海省パック（3,500元前後）
  - 1日目：北京発、2日目：タール寺、青海湖、3日目：互助土族村・西寧市内（東関清真大寺）、4日目：西寧発
  - 8日間の青海・寧夏パック（4,500元前後）
  - 1日目：北京発、2日目：西寧市内（東関清真大寺）・互助土族村、3日目：タール寺、チャカ塩湖、青海湖151基地、4日目：西寧～銀川、5-7日目：銀川泊・寧夏周遊、8日目：銀川発
  - 10日間の青海・河西回廊シルクロード・敦煌パック（7,000元前後）
  - 西寧市内（東関清真大寺）、互助土族村、タール寺、青海湖を経て、祁連山脈からチョウエキ、酒泉、嘉谷関、敦煌へ
  - 10日間の青海・敦煌パック（7,000元前後）
  - 西寧市内（東関清真大寺）、互助土族村、タール寺、青海湖を経て、チャカ塩湖から徳令哈、大柴旦を経て敦煌へ
- 近隣省発のパック
  - 青海省2泊3日の典型的なコース（タール寺、土族民族村、青海湖）で蘭州発はバス・自家用車利用、西安発は空路・鉄道利用

## **(7) 青海省旅遊總公司（青海省）**

### **青海省旅遊總公司の概要**

- 青海省旅遊集團有限公司傘下の事業単位
- 中国国際旅行社が取り扱えない中国人の海外旅行を旅遊總公司に取り扱えるため、同じ青海省旅遊集團有限公司傘下に青海省中国国際旅行社と並存（観光自由化後は別事業単位として個別に経営・管理）

### **市場・営業活動**

- 中国人の国内旅行が主で、「国内旅行」：「海外旅行」の比率は9：1
- 6月から9月が他省からの国内客受け入れの繁忙期で、10月から4月が青海省内容の海外旅行の繁忙期（近年とくに青海省でも海外旅行が盛ん）
- 海外旅行の行き先は暖かい東南アジア（近くて料金的にも安価なパッケージ）
- 海外旅行は客当たり単価が高く利幅も大きく、販売・販促も容易（航空会社や海外観光局等の販売店支援がある）

- 国内・他省客受け入れは競争の激しく、手間がかかる割に客単価、利幅が低い（パッケージ旅行の一部でホテル、バス、ガイド等の下請け）
- 省内客の国内他省観光は、パッケージ全体を扱うので客単価も高く利幅も大きい。

## **(8) 陝西海外旅遊有限責任公司（陝西省）**

### **陝西海外旅遊有限責任公司の概要**

- 1989年2月設立で従業員数130人（国際担当80人）
- 外国人客に特化しており、「外国人客」：「国内客」の比率は5:1
- 外国人客は英米の団体が50%で、その他欧米客も含めると外国人客全体の8割（98年以前に多かった日本人客も減少）
- 5月、9月、10月が繁忙期で一日平均7-8グループの取り扱い
- 閑散期は12月から3月で一日平均1グループ未満

### **青海省観光について**

- 外国人客の短い滞在時間が制約条件
- 観光商品の多様性が欠けている。
- ホテルは西寧とゴルムドに限られ、観光施設での古いタイプのトイレの設備が問題
- ガイドのサービスマインドは良いが語学能力が低い。
- 「青蔵鉄道」では、駅、及び駅周辺で滞在時間を延ばす商品開発が重要

### **青海省旅遊局の観光振興・マーケティング**

- 隔年で西部地域の省旅遊局長会議を開催しているが、各省間でのより密な協議体制、連携強化が必要
- パンフレットなどが青海省旅遊局から届いた事があるが、その後の追加はない。
- 周辺省におけるプロモーション活動、周辺省との連携はほとんど聞かない。

## **(9) 西安中国国際旅行社集團有限公司（陝西省）**

### **西安中国国際旅行社集團有限公司の概要**

- 1956年に中国全土を対象とする唯一の国際旅行社の陝西省支社として設立
- 取り扱い規模は年間約20万人（繁忙期3万人/月、閑散期1-3千人/月と格差が大きい）、従業員は400人前後
- 国内客は北京、上海等の沿海地域の大都市が主
- 外国人客はアメリカが30%、欧州が27%で、日本は9%程度に低下
- 「省内」：「省外」の比率は2:8
- 省外観光商品の主な対象省は北京、上海、桂林が多く、次いで甘肅省

### **青海省観光と青海省旅遊局の観光振興・マーケティング**

- 外国人客の青海湖・鳥島を扱ったことはあるが、青海省関連の自社商品はない。
- 観光情報もなく知名度が低い。
- 青海省に関する観光振興、マーケティング活動に関しては聞いた事がない。
- 旅遊局、旅行会社、ホテル業者、いずれもでも周辺省との連携は聞いた事がない。

**(10) 甘肅省中国国際旅行社（甘肅省）****甘肅省中国国際旅行社の概要**

- 旧中国国際旅行社が 1989 年に分割して設立
- 外国人の中国国内旅行、中国人の国内旅行、中国人の海外旅行の全てを扱っている。
- 蘭州本社・本店以外に、敦煌他 2、3 箇所の支店を有し、従業員は 60 - 70 人
- 各地に契約ベースによる代理店網を有し、特に中国人の海外旅行の営業を実施

**市場・営業活動**

- 外国人の中国国内旅行、中国人の国内旅行、中国人の海外旅行の割合は同程度
- 中国人の国内旅行は近年拡大傾向（将来は営業の 5 割が国内旅行になる見通し）
- 省外から甘肅省・蘭州への観光では、沿海地域からが多い。
- 甘肅省・蘭州から他省への旅行では青島、海南島、張家界などが人気
- 欧州、豪州からの観光客が増加（旅行形態は家族、友人、知人の小グループ（3 - 5 人）で、ヒンレイ寺、ラプラン寺回りでタール寺に入るルートも最近人気
- 日本市場のシルクロードに関しては、客層が中高年層に偏り旅行料金も高めに設定されているため、若者や若い女性層に広がらないのが悩み

**青海省観光について**

- 来年の青蔵鉄道開通を契機に、蘭州として青海省や西寧との連携強化が必要
- 南のシルクロード「西寧～門源～祁連～チョウエキ」を多く利用するのは台湾と東南アジア（華僑）からの観光客団体

**(11) 甘肅省中国旅行社有限公司（甘肅省）****甘肅省中国旅行社有限公司の概要**

- 旧中国旅行社（国営旅行社）が 90 年頃ころに分割して設立
- 外国人と中国人の国内旅行、中国人の海外旅行を手配可能
- 従業員は 50 名で、敦煌支社の他に各県・地区に営業所を有する。
- 傘下のバス会社も有するが、稼働率が悪く赤字経営（シーズン格差による）

**市場・営業活動**

- 外国人客と国内客の比率は 2 : 8 から 3 : 7
- 蘭州に目玉となる中核的観光資源がないため、近隣省から蘭州への観光客は少ない。
- 甘肅省内には観光資源は多いが、省域が東西に細長く広がっているため、コンパクトな観光旅程が組みにくいのが難点
- 西安と敦煌という 2 大観光拠点にはさまれ、蘭州の観光的な地位はこの 2 拠点に奪われている。



**青海省観光について**

- 2004年に西北5省区（陝西省、寧夏回族自治区、甘肅省、青海省、新疆ウイグル族自治区）の観光ルート開発、共同宣伝、販促の推進を目的とする「大西北・新奇之旅」西北5省区旅遊宣伝推進会議が開催され、共同宣伝用のカラー版「広域観光案内地図」「大西北・新奇の旅、省区別案内・モデル旅程ブック」が作成された。
- 青蔵鉄道の開通は西北5省区にとって大きな刺激剤となる。

**6.3 ホテル業者アンケート調査****6.3.1 調査実施概要**

ホテル業者アンケート調査として表 6.3.1 に示す調査先を選定し、調査を実施した。

**表 6.3.1 ホテル業者アンケート調査先**

調査先	所在地	星級
1 銀龍賓館	青海省	5
2 青海賓館	青海省	4
3 青海建銀賓館	青海省	3
4 夏都賓館	青海省	3
5 紫金山大酒店	陝西省	4
6 建国飯店	陝西省	4
7 金城賓館	甘肅省	3
8 蘭州飛天大酒店	甘肅省	4

**6.3.2 調査内容****(1) 銀龍賓館（青海省）****銀龍賓館の概要**

- 2005年7月8日に開業した青海省・西寧初の5星級ホテル
- 鉱山・鉱物・鉄鋼を主な事業としている青海省の投資家が投資
- 投資額は3億元で大半は自己資金（一部銀行融資）
- 316客室（439ベッド）で21階建の5-21階（17階分）が客室階、従業員数450人
- 会議室、宴会場、サウナ、スパ、フィットネスジムを完備

**経営管理**

- 経営管理は四川省の錦江旅遊飯店管理公司に委託（主要部門の20人の専門家、指導員が3年契約で担当）
- 錦江旅遊飯店管理公司は、各地で数軒のホテルの経営管理を受託
- 傘下に旅行社（バスも保有）もあるが、西寧で旅行社まで手を広げるかは未定
- 錦江旅遊飯店からの専門家、指導員に次ぐ中核スタッフには、多省でのホテル業・サービス業経験を持つ青海省出身の人材を雇用

**ターゲットとする市場**

- 通年で市場の見込める会議や宴会を主軸（観光客は季節の偏りがあるので付随的）
- ホテル代理・予約業者契約は国内、国外とも現在持っておらず、当面は錦江旅遊飯店の営業・販促ルートを活用
- 長期滞在のアパートの利用（特に外国人向け）、事務室・事務所利用の市場も考慮

**(2) 青海賓館（青海省）****青海賓館の概要**

- 省政府弁公室直属の事業単位、「省の高級招待所」の位置付けで建設
- 開業当時は資金の一部と経営管理技術指導で香港ホテル事業者と提携していたが、それ以降は独自の経営管理をして従業員の給与も省人民政府から支出
- 2000年の省政府行革で省政府より独立して青海賓館旅遊集团有限公司（旅行グループ有限会社）となった。
- 傘下に青海夏都旅行社（バスも所有）を持つ。

**経営管理**

- 予約管理は、フロントで「予約単」という様式に手書きで記入し、日付順にクリップボードに挟んで保管
- ホテル内部経理と顧客利用料金（宿泊、飲食、電話等）はコンピューター管理

**ターゲットとする市場**

- 国内客と外国人客の比率は9：1
- 大都市沿海部と近隣省の比率は5：5
- 2004年の年間客室利用率は5月から9月で54.5%、10月から4月で49.5%
- 団体（観光）は7、8、9月に集中し、10月から4月はほとんどない。
- ビジネス、会議、セミナー目的の客は通年客がいて平均滞在は2-3泊
- 4月から10月は省内の会議やセミナー、省内団体・個人客が多い。
- 8年前から省内唯一の4星級ホテルで、省内の会議やセミナーを独占的に扱う。

**(3) 青海建銀賓館（青海省）****青海建銀賓館の概要**

- 全国規模の大手銀行である中国建設銀行の傘下にあるホテル
- 1999年4月に開業し客室は146室、従業員は季節変動があるが340-360人
- 中国建設銀行の人材研修部・研修センターから派生した事業
- 建銀関連のホテルは全国に多数あるが「建銀賓館」の名称で統一されておらず、規模・星級もばらばらでチェーン的な提携はない。

**市場**

- 銀行関連のホテル、大型ホテルでないということもあり、個人の中国人ビジネス客が主流（部屋数が限られることから、観光客、特に団体は少ない）
- 多客期にはより高く売れるビジネス客で商売した方が有利

- ショルダー期（多客期と閑散期の間）には外国人観光客（イタリア、オーストラリア、日本、香港など）もいる。
- 客室利用率は多客期で 90%、閑散期で 40%、年間平均で 60%前後

#### **(4) 夏都賓館（青海省）**

##### **夏都賓館の概要**

- 2003 年 9 月に開業した比較的新しいホテル
- 客室数は 98 室で従業員 132 人
- ホテルの資本・所有者は西寧市石炭石油公司

##### **市場**

- 観光客とビジネス客の比率はおおよそ半々（2005 年は団体観光客が比較的多い）
- 客室利用率は多客期（7、8、9 月）で 95%、中間期（5、10 月）で 65%、閑散期（10 月から 4 月）で 40%
- 省旅遊局の宣伝・販促キャンペーンチームなどと一緒に旅行見本市に参加して営業活動を実施

#### **(5) 紫金山大酒店（陝西省）**

##### **紫金山大酒店の概要**

- 2000 年に設立され、江蘇省政府の直接投資によって建設
- 客室数は 232 室で 23 階建て
- 会議室、娯楽室、レストラン、貸オフィスを完備
- 従業員数は 300 人（当初は 350 人）

##### **主要な市場**

- 国内客と外国人客の比率は半々
- 国内客は沿岸部の大都市市場
- 外国人客は欧米客が一番多く、次いで東南アジアの中国人、日本人は少ない。
- 繁忙期で 7-8 割稼働、閑散期で 3-4 割（春節前）、平均稼働率は 60-65%

#### **(6) 建国飯店（陝西省）**

##### **建国飯店の概要**

- 1989 年に開業し、香港拠点の建国飯店グループが有する北京本店ネットワーク 30 店の支店として運営を受託
- 客室は 756 室で従業員は 620 人
- レストラン（四川料理、コーヒーショップ）、会議場、プール/ジムを完備

##### **主要な市場**

- 国内客と外国人客の比率は 2 : 1
- 国内客は北京、上海、広州の 3 大都市圏が主
- 外国人客で一番多いのは欧米で次いで中南米、日本と韓国は 3 番手

**青海省観光の優位性と問題点**

- 自然資源が中心で、若者市場が有望
- トイレ・衛生問題が貧弱ではないか
- 観光フェアへの参加や周辺省、及び香港、マカオ、台湾を含む近隣マーケットの旅行者の招待旅行、パンフレットやハンドブックの大量作成・配布が不可欠

**(7) 金城賓館（甘肅省）****金城賓館の概要**

- 省の外事事務所/旅遊局の国営ホテルとして 1984 年 8 月に開業
- 1992 年に香港資本も参加し、内装、サービスなど国際水準を目指して改善
- 2002 年に民営化して完全な現地資本に移行

**市場**

- 外国人客は友人・知人・家族単位の 4、5 人のグループで、蘭州～ヒンレイ寺～ラプラン寺～タール寺というルートも人気の旅程
- 国内客と外国人客の比率は 8：2
- 客室利用率は多客期（5 月から 9 月）で 85%、閑散期（10 月から 4 月）で 50%（閑散期の利用率が高いのは、国内の役所関係会議、企業の会議・セミナーなどのため）

**青海省観光について**

- 青蔵鉄道開通もあり、青海省の観光イメージは高まっている。
- 青海省旅遊局の方が甘肅省より良くやっている印象を受ける。
- 青海省のホテルや旅行会社の連絡、売り込みも多い。

**(8) 蘭州飛天大酒店（甘肅省）****蘭州飛天大酒店の概要**

- 1994 年に開業し、資本は甘肅省と上海の民間資本の合弁
- 経営管理をシンガポールの専門会社（麗華公司）と契約
- 客室は 360 室で従業員は 170 - 190 人（季節変動あり）

**市場**

- 国内客と外国人客の比率は多客期で 7：3 から 6：4、閑散期で 9：1
- 近年は国内客の増加が目立ってきている。
- 観光客とビジネス客の比率は国内客では 2：8 から 3：7、外国人客では 7：3
- 客室利用率は多客期で 70 - 80%、閑散期で 30%
- 予約は旅行会社経由が多く、インターネット予約は少ない。

## 6.4 航空会社アンケート調査

### 6.4.1 調査実施概要

本調査開始時（2005年3月）時点で西寧には航空会社の支店がなかったが、2005年8月に中国東方航空・西北公司の西寧営業部が開設した。航空券の予約、発券、販売は、市内、及びホテル内にある「航空售票処（チケットセンター）」が取り扱っている。

表 6.4.1 航空会社アンケート調査先

調査先	所在地
1 青海省民用机场有限责任公司（西寧空港管理・運営会社）	青海省
2 西寧机场中心售票处（航空券予約・発券代理専門業者）	青海省
3 中国東方航空西北公司	青海省

### 6.4.2 調査内容

#### （1）青海省民用机场有限责任公司（西寧空港管理・運営会社）

##### 青海省民用机场有限责任公司的概要

- 旧青海省民航管理局（国の直営）が2003年6月19日に組織変更されて設立
- 現在は青海省政府の監督下
- 西寧空港、ゴルムド空港の管理運営や省の空港整備計画を担当
- 観光宣伝、コマーシャルの他、航空会社各社との会議や国際会議に参加し、観光プロモーションを実施
- 空港と西寧市内を結ぶ空港バス（12台）を運行

##### 公司管理下の空港の現況

- 西寧空港
  - 全国12空港とネットワークを有し、2004年の乗降客数は45.6万人
  - 2010年には全国20カ所と結んで目標は年間100万人
  - 2020年には全国各省の都市、及び主要観光地と結んで年間200万人を目標
  - 閑散期は週60便を運航、繁忙期には90便に増便
  - 新ターミナルビルが2005年11月から供用開始
  - 2008年に見直し予定（改築・新築により容量年間200万人へ拡充することを検討）
  - 空港の敷地面積は140ha、現在の滑走路は3,000m×45m、近い将来3,800mに延伸し、ボーイング757（Max.200席）に対応可能とする予定
- ゴルムド空港
  - 軍との併用で滑走路は4,500m、西寧～ゴルムド、成都～ゴルムドを週2-3便運航
  - 2004年の実績は84便（1機50席）で年間乗降客数は約6,000人
  - 今後はエアバス319（117席）を導入して週3便運航予定

**省内のその他空港、将来計画**

- 玉樹（巴塘）の新空港
  - 玉樹（巴塘）に新空港を整備予定であり、2006年に建設着手、2007年に完成・供用の予定（滑走路：3,000mでエアバス319（Max.126席）に対応）
  - 玉樹～ラサ～ゴルムド～九寨溝の近距離ネットワークを検討
  - 空港整備用地は既に確保しているが財源確保が未定で、国の補助を要請中
- その他
  - 長期的には、省内に計6カ所の空港を整備予定（西寧、ゴルムド、玉樹、果洛、花土溝、徳令哈）だが、整備内容は未定
  - 貨物量は2004年で5,800トン（前年から38.0%増で今後も20-30%の伸びを予想）

**(2) 青海省民用机场有限责任公司 / 航空運輸銷售分公司****青海省民用机场有限责任公司 / 航空運輸銷售分公司的概要**

- 「航空運輸銷售分公司」（航空運輸販売子会社）は、青海省民航管理局の2003年の分割民営化で設立された青海省民用机场（空港）有限公司の傘下であり、国内・国際航空券の予約・変更・発券・販売を専門に扱っている。
- 本店以外に市内6カ所に支店を持ち、「售票処」会社としては西寧市最大の販売網
- 従業員は全体で70-80人

**営業・業務活動**

- 国内線については予約・発券・無料配達サービスを実施、番号を大きく車体横に書いた自動車がホテルや事務所をまわっている。
- 2005年3月から国際予約とのCPUシステム接続が改善され、国際予約の国内便についても「售票処」CPUで読めるようになった（一部照会できない国際予約もある）。

**(3) 中国東方航空西北公司****中国東方航空西北公司的概要**

- 西北航空は、青海省を中心にローカル便を主に運航していた地方航空会社
- 中国国内航空会社が中国民航、中国東方航空、中国南方航空の3社に集約された際、西北航空は中国東方航空に吸収
- 2000年の観光自由化以降、青海省、西寧の観光旅行活動が盛んになり、特に夏季から10月にかけて西寧便（発着）の客が増加
- 営業部と市内の售票処を含めて計10名のスタッフ

**運航・営業活動**

- 西北会社の営業対象地域は西北5省市自治区、西北公司西寧分公司は青海省のみ
- 西寧と北京・西安間は4社（民航、東方、南方、海南）が就航し、競争が激しい。
- 客層は、北京便では官公庁の役人の公務出張・旅行が多く、西安便では観光客が主体、上海便はビジネス客・ビジネス関連の会議・セミナー客の比重が高い。
- 営業活動の三本柱は、官公庁（中央政府、省政府、州・県・市など）、企業集団・ビジネス関係（会議・セミナー）、代理業者（旅行会社、チケットオフィス）

- 閑散期、ショルダー期（多客期と閑散期の間）の旅客確保策として、旅行会社との協力（魅力的なパッケージ特別運賃の設定・提供）を実施
- 黄金週間など政府の休暇誘導策もあり、近年は西寧発の国内休暇パッケージの設定も多くなっている。